

西大室上諏訪遺跡

一般県道深津伊勢崎線単独道路改築(改良)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

前橋土木事務所
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

西大室上諏訪遺跡

一般県道深津伊勢崎線単独道路改築(改良)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

前橋土木事務所
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



4号住居出土遺物



2号住居出土遺物

序

西大室上諏訪遺跡は、前橋土木事務所による「一般県道深津伊勢崎線単独道路改築（改良）事業」に伴って、平成15年度に発掘調査が実施されました。

この調査によって古墳時代の集落跡が検出されました。全国的に古墳が多いとされる群馬県の中に於いても、前橋市東部の「荒砥地区」は古墳の密集する地域の一つとして知られています。古墳時代前期の周溝墓を始め、後期の大型前方後円墳や群集墳など多数が調査されており、とりわけ大室古墳群は大室公園の一角にあって、大勢の市民に親しまれています。このように多くの古墳が存在することは、それを築いた人々がこの地に根付き、安定して暮らすことができたことを裏付けるものでしょう。本報告書ではそうした人々の生活の一端を明らかにしました。今回の調査によって得られた事実は、地域の歴史を豊かなものにする上で大いに役立つことと確信しております。

最後になりますが前橋土木事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には発掘調査から本報告書刊行に至るまで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すと共に発掘調査担当者、作業員並びに整理業務担当者、整理補助員の方々の労をねぎらい序と致します。

平成17年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は一般県道深津伊勢崎線単独道路改築（改良）事業に伴う、西大室上諏訪遺跡の発掘調査報告書である。
2. 西大室上諏訪遺跡は前橋市西大室町2794-1、2797-1、2798-1、2798-2、2799-1、2799-2、2801-1、2801-2、2801-3番地に所在する。
3. 遺跡名は、遺跡が所在する大字名にあたる西大室町に、小字名である上諏訪を組み合わせた。
4. 発掘調査及び整理事業は、前橋土木事務所から財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受けて実施した。
5. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成15年7月10日～平成15年9月30日
7. 調査組織
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当
小野宇三郎 住谷永市 神保侑史 萩原利通 右島和夫 植原恒夫 中東耕志 竹内 宏 高橋房夫
須田朋子 吉田有光 阿久澤玄洋 田中賢一 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子
北原かおり 今井もと子 松下次男 吉田 茂 狩野真子
調査担当
川端俊介 深澤敦仁
8. 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 整理期間 平成16年4月1日～平成17年1月31日
10. 整理組織
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当
小野宇三郎 住谷永市 神保侑史 矢崎俊夫 右島和夫 丸岡道男 相京建史 竹内 宏 高橋房夫
須田朋子 吉田有光 栗原幸代 佐藤聖行 阿久澤玄洋 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子
本間久美子 北原かおり 狩野真子 今井もと子 松下次男 吉田 茂
整理担当
齊藤幸男 黒澤はるみ 小野寺仁子 萩原光枝 小淵トモ子 安藤美奈子
11. 本報告書作成の担当者は次のとおりである。
編 集 齊藤幸男
執 筆 I-1 中東耕志
II-1～5（遺物観察表を除く）、IV 深澤敦仁（編集者がIIの一部を加筆）
IIIは本文中に執筆者を記載。
上記以外 齊藤幸男
遺構図修正 深澤敦仁
遺構写真 川端俊介 深澤敦仁
遺構写真レイアウト 深澤敦仁

遺物復元・実測 黒澤はるみ 小野寺仁子 萩原光枝 小淵トモ子 安藤美奈子

遺物機械実測 富沢スミ江 伊東博子 岸 弘子 廣津真希子

遺物写真 小川忠博

遺物保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一

遺物観察指導

縄文土器 山口逸弘、弥生土器 大木伸一郎、中世以降の土器・陶磁器 大江正行

12. 分析・委託

空中写真撮影・測量 (株)シン技術コンサル

遺構図・遺物図デジタルトレース 朝日印刷工業(株)

遺物写真 小川忠博

テフラ分析 (株)古環境研究所

炭化材樹種同定 (株)パレオ・ラボ


石材鑑定 飯島静男 (群馬地質研究会会員)

13. 本遺跡出土遺物及び記録資料の一切は財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。

14. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸氏並びに機関に有益な指導、助言、協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

石村崇史 小峰 篤 近藤 薫 薩見和広 福田貫之 矢口裕之 R.S. mona 前橋市教育委員会

凡 例

1. 調査区には国家座標（日本平面直角座標系第Ⅸ系）に基づき5 m間隔のグリッドを設定した。X=42,000台、Y=-57,000台である。
2. 北方位は真北を示す。
3. 本書で使用した地図は以下のとおりである。
「西大室上諏訪遺跡位置図」 5万分の1地形図「前橋」
「遺跡分布図」 2万5千分の1地形図「大胡」
4. セクション図・エレベーション図中の石は斜線で示す。また、土器には「P」と記した。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は原則として以下のとおりである。
住居・土坑・ピット 1:60 炉・竈 1:30 溝平面図 1:80 溝断面図 1:40
土器 1:3 大型土器 1:4 小型土器・石製品・打製石斧 1:2 石鏃 4:5
6. 遺構図・遺物図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。
焼土・As-B・土器の赤彩及び付着した砂・石器磨面 
7. 遺構図中の「住」は住居、「土」は土坑、「P」はピットを、「●」は土器、「▲」は金属製品、「■」は石器・石製品を表す。
8. 遺物写真の倍率は原則として遺物図の縮尺に近づけたが、この限りでない。
9. 本文の記載方法は以下のとおりである
「位置」はその遺構の含まれる全グリッドを記した。グリッド名はグリッド南東の国家座標下3桁をX-Yの順に記した。「他遺構との新旧関係」は重複する遺構の新旧関係を「旧→新」で示した。「規模」は遺構確認面の上端で計測した。竪穴住居の「面積」は下端を1:30図上でプランメーターにより3回計測した平均値を記した。計測値は、残存のものは「+」を付け、推定のもの（ ）内に記した。
10. 遺物観察表の記載方法は以下の通りである。
出土位置の数字は竪穴住居生活面もしくは遺構底面からの高さを表し、単位は「cm」である。ピットからの出土は「P」と表記した。計測値の単位は「cm」「g」とし、残存のものは「+」を付け、推定のもの（ ）内に記した。胎土中の砂粒はその径により「細砂」（<0.5mm）「粗砂」（0.5<2.0mm）「細礫」（2.0<5.0mm）を目安とする。
11. 本文中で使用したテフラの記号は以下のとおりである。
浅間C軽石 As-C（3世紀末） 榛名二ツ岳渋川テフラ FA（6世紀初頭）
榛名二ツ岳伊香保テフラ FP（6世紀中葉） 浅間Bテフラ As-B（天仁元年・1108年）
12. 本報告書の遺構名称は、発掘調査時に付したものを原則として使用しているが、遺構の種類を変更したものについては、発掘調査時の名称を次の通り変更している。
1号道→4号溝、2号道→5号溝

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と経過1
2. 遺跡の地理的歴史的環境2
3. 基本層序10
4. 遺跡の概要11

II 検出された遺構と遺物

1. 住居13
2. 溝39
3. ピット群43
4. 土坑44
5. As-B下旧地表面49
6. 遺構外出土遺物50

III 自然科学分析

1. 火山灰分析57
2. 1号住居出土炭化材の樹種同定66

IV まとめ

- 西大室上諏訪遺跡4号・5号住居出土土器について68

写真図版
報告書抄録

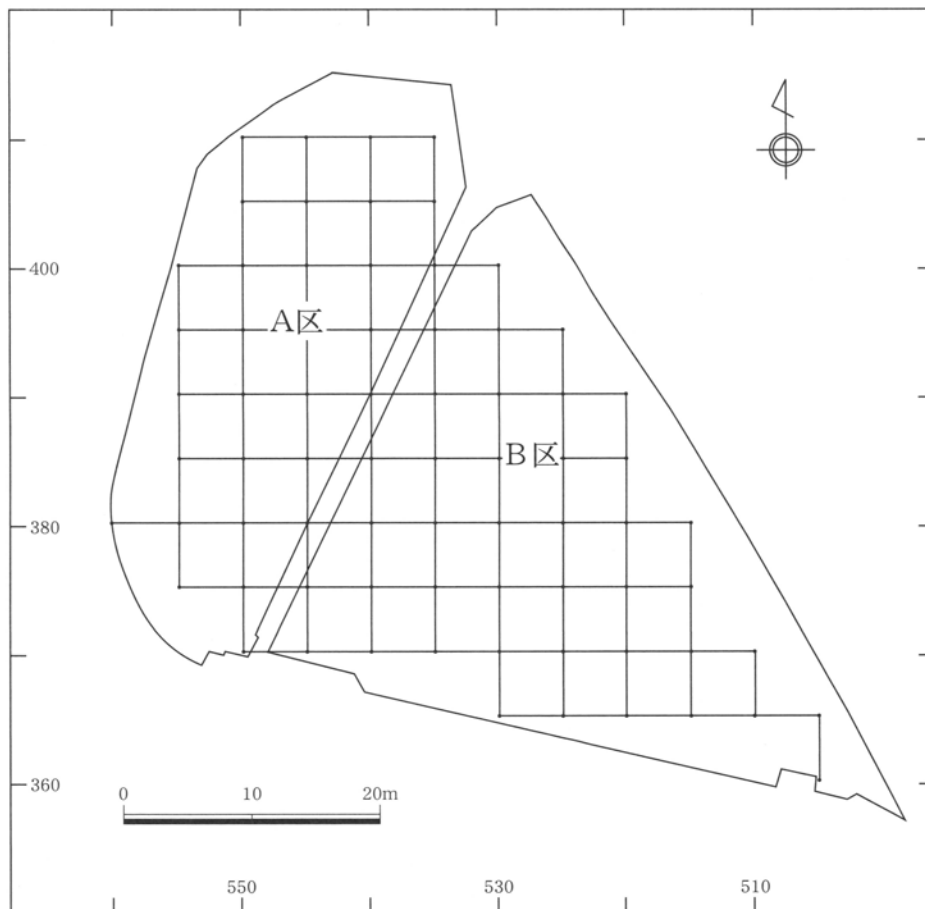
I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と経過

本事業は、前橋土木事務所により計画された深津・伊勢崎線単独道路改築（改良）事業に伴い、県教育委員会文化課が平成15年1月31日に試掘調査を実施した。試掘調査方法は、事業対象地である前橋市西大室町地内の約2,600㎡に幅1～2mの試掘溝を設定し、重機を使用して掘削をおこなった。調査では遺構検出面の認定、遺構有無の確認、遺物包含の有無を判断した。確認調査は136㎡であった。その結果、試掘範囲において、古墳時代の竪穴住居跡などの遺構が確認されるとともに、溝等も構築されていることが判明した。よって、事業地内は遺跡地として認定され、今後本調査の必要があると判断された。

また、同年3月に文化課と前橋市教育委員会文化財保護課の協議により、本遺跡は「西大室上諏訪遺跡」と命名された。

同年6月17日に県教育委員会文化課と前橋土木事務所及び本事業団の三者により、事前協議をおこなった。本遺跡の発掘調査は、遺構の確認されなかった西側部分を除外した表面積2,181㎡を対象にして実施することとなった。隣接地の借地等が不可能であったので、現在水田である低地部と、高位の畑となっている地点に2分割して、事業地内に調査事務所を設置するとともに、排土置き場を確保して調査を実施することとなった。



西大室上諏訪遺跡調査区図

2. 遺跡の地理的歴史的環境

周辺地形 西大室上諏訪遺跡は、前橋市西大室町に所在する。赤堀町との境に近い市域の東部、市街地からおよそ10kmほどに位置する。遺跡周辺の地形は、大きく見て赤城山麓・大間々扇状地・広瀬川低地帯に区分される。

赤城山麓は成層火山である赤城山の南斜面で主に火山砕屑物が堆積し、関東平野に接する平均勾配2°程の緩い傾斜面である。多くの小河川が南流し、神沢川をはじめ水源の標高が高く流域の長い荒砥川・白川などは扇状地を形成する。さらに多くの河川では小規模な開析谷を形成し、部分的に河岸段丘が発達する。その両脇には細長い尾根上の台地がのびる。また、台地上には20万年ほど前に赤城山の山体崩壊で発生した岩屑なだれによって形成された小丘陵が点在する。

遺跡の東約2.5kmに流れる粕川を境として、その東側は扇端幅20km以上をはかる広大な大間々扇状地が広がる。赤城山麓の南には前橋市関根町付近から佐波郡境町付近まで幅約3km、長さ約30kmの細長い沖積低地がのびている。これが広瀬川低地帯で、旧利根川の流路と考えられる。現在は低地帯内を広瀬川・桃ノ木川などが流れ、赤城山麓を南流する小河川が低地帯へと流れ込む。

遺跡の地形 西大室上諏訪遺跡は標高約110mに位置し、現状は水田であった。遺跡の西100mには東神沢川が流れ、すぐに神沢川に合流する。両河川とも台地を切っており、過去に人為的な流路変更が行われたと考えられる。本遺跡を含む合流点の東側及び北側には水田が広がるが、本来は今よりも狭かった沖積地を広げるために微高地を崩した結果であろう。本遺跡における古墳時代の住居は、そのことを裏付ける一つの証拠といえる。

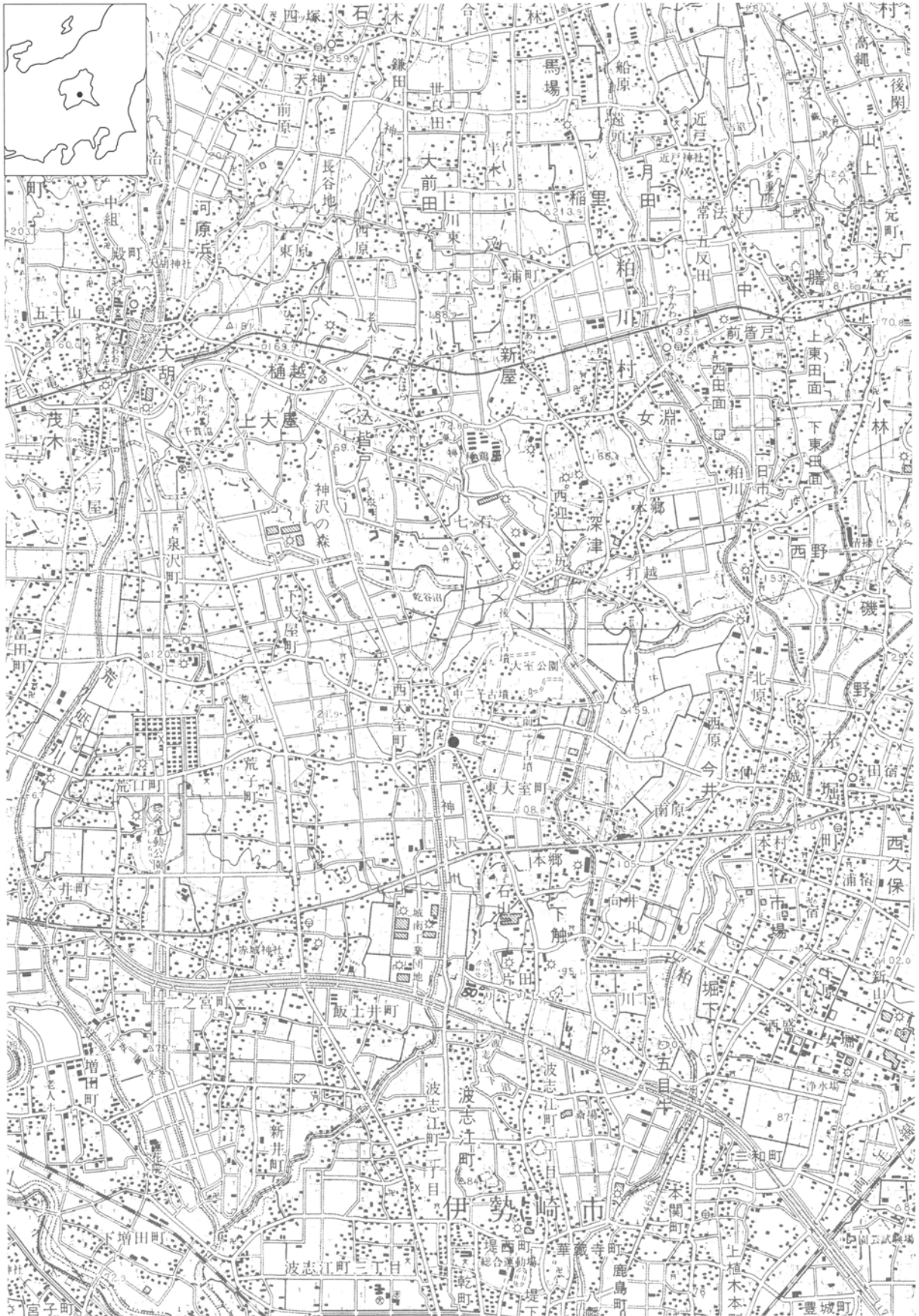
旧石器・縄文時代 周辺で最も古い人々の足跡は、荒砥北三木堂遺跡下層文化層より出土した石器で、

始良Tn火山灰層下位の黒色帯にあたる。そのほかには柳久保遺跡 (No.15)・頭無遺跡 (No.18) などの後期旧石器後半にあたるものが多い。特に頭無遺跡では湧別技法による細石刃核と荒屋型彫器を共伴する良好な資料群が出土している。

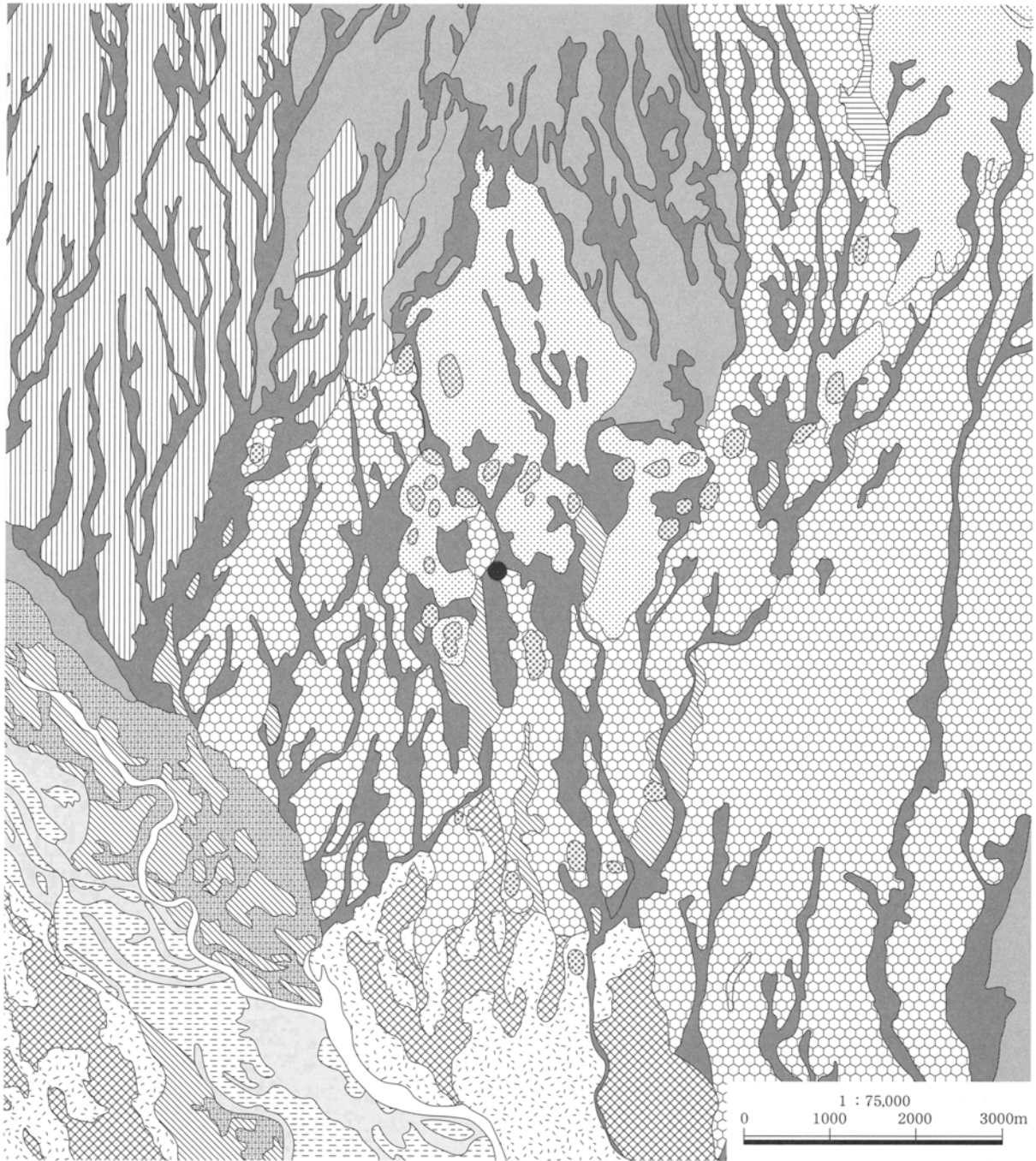
これに続く縄文時代草創期では県央部で初めての発見となった箕井八日市遺跡出土の微隆起線文土器がある。この遺跡は草創期から後期まで続く拠点集落であることが明らかとなった。小島田八日市遺跡でも草創期の土器片が出土している。















以上の遺跡は赤城山麓と広瀬川低地帯の境付近に位置するが、群馬県における縄文時代前期から後期の遺跡は丘陵性地形から台地性地形に多く分布する傾向がある。本遺跡付近は丘陵性地形から台地地形への移行部分に当たり、当該期の遺跡も少なくない。下鶴谷遺跡 (No.19)・谷津遺跡・荒砥上ノ坊遺跡 (No.26)・大道遺跡 (No.31)・村主遺跡 (No.36)・小稲荷遺跡 (No.59) などで住居や集石、陥し穴などが検出されている。これら遺構の数は多くなく住居で数件程度であるが、本遺跡例のように多くの縄文土器が包含していた遺跡もあり、現在確認されている以上の分布密度であったことは間違いのないだろう。

弥生時代 縄文時代晩期から弥生時代前期までは遺跡が確認されておらず、このことは地域における人々の活動が低調であったことにもよろう。中期後半になると数は少ないものの再び集落の分布が確認でき、頭無遺跡・荒砥北三木堂遺跡などが挙げられる。谷頭周辺や小河川沿いの台地縁辺などに立地し、これら小河川に因る小規模な開析谷を水田化していったと考えられる。後期になると中層敷Ⅰ遺跡 (No.25)・明神山遺跡 (No.40)・梅木遺跡 (No.73)・久保皆戸遺跡 (No.74) など数が増えるが、総じて住居軒数は多くない。圃場整備を中心とする発掘原因や調査面積の問題などもあるが、現時点では赤城南麓の弥生集落は少ないと言える。



西大室上諏訪遺跡位置図



- | | | | |
|---|------------------|---|-----------------------|
|  | 火山原面 |  | 扇状地 (後期更新世前半) |
|  | 岩屑なだれ (818年) 堆積面 |  | 河成段丘 (旧中州・完新世) |
|  | 火砕流堆積面 (大胡火砕流) |  | 河成段丘 (後背湿地・完新世) |
|  | 梨木泥流堆積面 |  | 広瀬川低地帯の旧中州 (As-B降灰後) |
|  | 流れ山 |  | 広瀬川低地帯の後背湿地 (As-B降灰後) |
|  | 谷底平野 |  | 前橋・伊勢崎台地上の微高地 |
|  | 扇状地 (後期更新世後半) |  | 前橋・伊勢崎台地上の後背湿地 |

遺跡周辺の地形分類図 (『群馬県史』通史編1より作成)

古墳時代 古墳時代前期になると遺跡数が急増する。集落立地は弥生時代と変わらないが、特に小河川とその支流の合流点に面した台地縁辺に集中するという分析がある。出土遺物により数時期に細分される可能性が高く、東海地方や北陸地方の土器（模倣品を多く含む）も出土している。また本遺跡4号・5号住居にも見られるように、弥生時代に用いられていた土器が、古墳時代初頭まで形態や意匠をやや変えながら残存する傾向が高いのもこの地域の特徴である。

生産遺構の検出は少なく、荒砥上ノ坊遺跡・荒砥諏訪西遺跡などのAs-Cに埋没した畠があるのみである。墓は、明確に古墳といえるものはないが、堤東遺跡 (No.14)・中山A遺跡 (No.35)・阿久山遺跡 (No.43) などで前方後方形周溝墓が検出されており、これらを中心に方形周溝墓・円形周溝墓が展開する。

中期以降の集落は多くが前期から継続しているが、荒砥天ノ宮遺跡ではそれまで集落の無かった地に溜井を掘削した上で集落が展開する。この時期に生産域の拡大があったことを伺わせる。西大室丸山遺跡 (No.55) では巨石の周囲で行われた5世紀代の祭祀遺構があるが、この巨石は先に触れた岩屑などなどによる小丘陵に伴うものである。本遺跡から北西1.2kmの産泰神社でも同様の地形による巨石が神体とされており興味深い。

5世紀も前半までは古墳の数は少なく、本遺跡周辺では赤堀茶臼山古墳（帆立貝式古墳・No.75）のみである。後半になると今井神社古墳（前方後円墳）、舞台1号墳 (No.48) などが築造される。と同時に、上縄引遺跡 (No.63)・多田山古墳群 (No.77) などで初期群集墳が展開する。この時期には、丸山遺跡 (No.1)・荒砥荒子遺跡 (No.53)・梅木遺跡で豪族居館と考えられる方形に巡る溝が検出されている。5世紀になって古墳が造られたことと居館が造られたこと及び耕地の拡大は密接に関係するもので、赤城

山南麓地域が大きく転換したことを想像させる。

後期はさらに集落が拡大し、全長100m前後の前二子・中二子・後二子の3基の大型前方後円墳 (No.67~69) を核とする大室古墳群が形成される。これと東神沢川を挟んだ対岸の台地には伊勢山古墳 (No.42)・阿久山古墳 (No.43) など50m前後の古墳がまとまって分布しており、拠点を異にする幾つかの首長階層が存在したと考えられる。終末期になると上位階層の墓制として、切石を用いた横穴式石室をもつ円墳が多田山古墳群などに築造される。

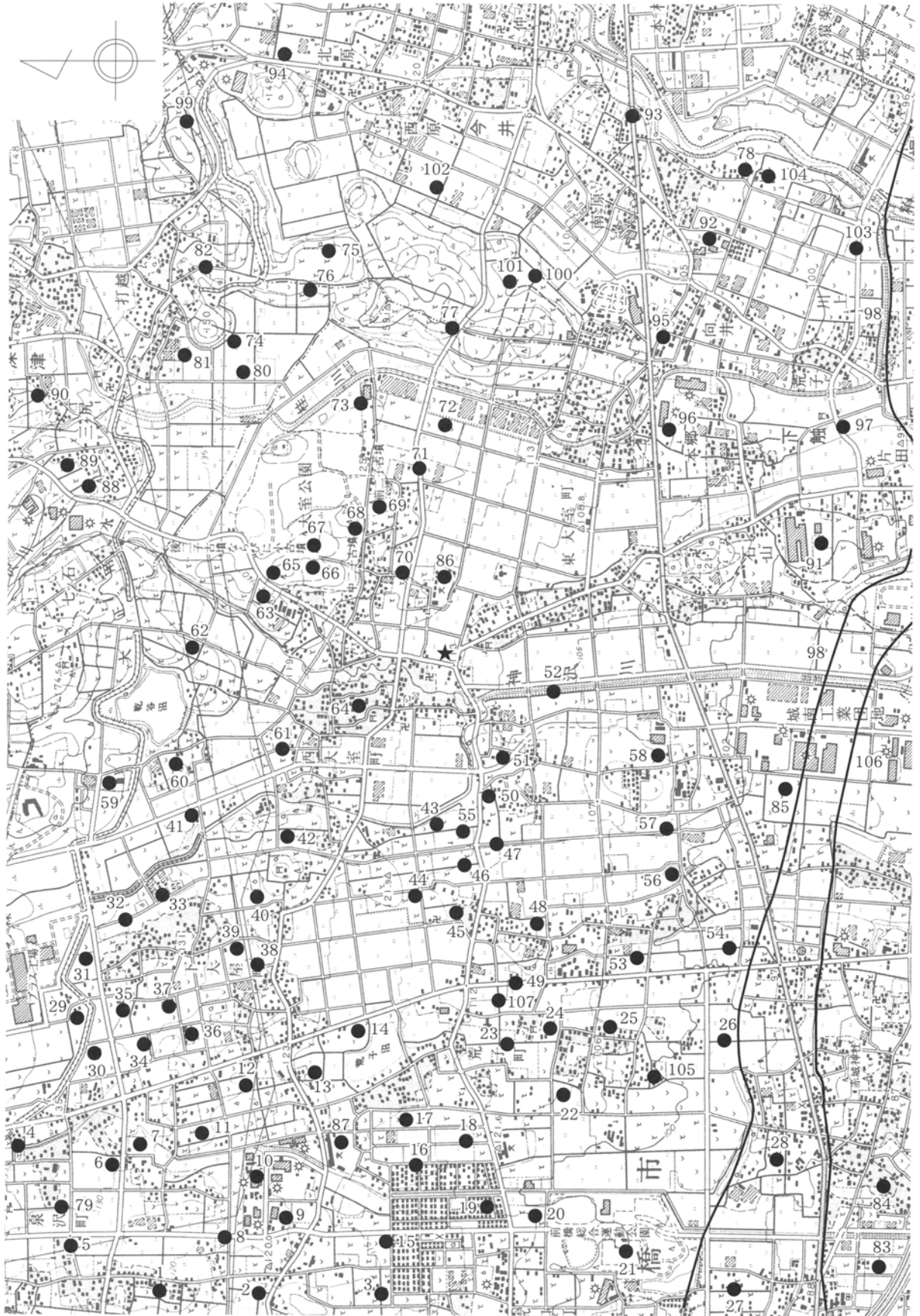
奈良・平安時代 この時代の集落も引き続き安定している。赤城南麓一体は概ね勢多郡に属し、上西原遺跡 (No.12) が勢多郡衙であると推定されている。郡内には深田・田邑・芳賀・桂萱・真壁・深渠・時沢・藤澤の8郷が置かれていた。二之宮洗橋遺跡からは「芳郷」の墨書土器が出土し、この遺跡周辺が芳賀郷であったと考えられる。

広瀬川低地帯には中原遺跡群などで方形に区画された平安時代の水田が1km四方に渡って検出されている。赤城南麓でも柳久保遺跡 (No.15)・荒砥大日塚遺跡C区 (No.20)・荒砥下押切II遺跡 (No.23)・中島遺跡 (No.61)・荒砥洗橋遺跡 (No.83)・梅木遺跡などでAs-Bに埋没した水田や畠が検出されており、広く耕地開発が行われていたことを物語る。また東原B遺跡 (No.34)・富士山I遺跡 (No.46) での鍛冶遺構や、荒子小学校校庭遺跡 (No.87) での須恵器窯の検出はこの地での多様な生産活動を裏付けるものと言えよう。

【参考・引用文献】

- 群馬県史編さん委員会 1990・1991 『群馬県史』通史編1・2
 前橋市史編さん委員会 1971 『前橋市史』1
 小島敦子ほか 1995 『荒砥上ノ坊遺跡』I 群埋文

I 発掘調査と遺跡の概要



遺跡分布図 (25000分の1)

周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	文献
★	西大室上諏訪遺跡	本報告	
1	丸山遺跡	縄文住居1、古墳前期住居8・円形周溝墓3、中期居館1・住居44、後期住居15、古墳溝1	『丸山・北原』 県教委 '87
2	北原遺跡	古墳前期住居7・円形周溝墓2、中期住居33、後期住居33・円墳1	No.1に同じ
3	諏訪遺跡	古墳前期周溝墓7、平安溝6、時期不明土坑1・炭窯1	『柳窪遺跡群』 II・III 前橋市教委 '85・'86 『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』 県教委 '98
4	寺東遺跡	古墳住居3・溝1	『昭和60年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』 県教委 '86
5	昆布替戸遺跡	時期不明掘立柱建物1・土坑5	『昭和61年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』 県教委 '86
6	東前田北遺跡	古墳住居4、時期不明溝6・塚1・土坑3	No.4に同じ
7	東原西遺跡	古墳住居2、時期不明溝1・土坑3	No.4に同じ
8	新山遺跡	古墳後期円墳3、古墳方形周溝状遺構1、時期不明溝1・土坑3	No.4に同じ
9	上鶴谷遺跡	古墳溝1、近代以降炭窯1、時期不明集石1	No.5に同じ
10	前山遺跡	縄文陥し穴4・土坑3、古墳後期溝2、平安以前溝2、平安B下水田?	『前山遺跡』 前橋市教委 '86
11	向原遺跡	古墳後期円墳1・住居3、奈良住居1、平安住居12、時期不明住居2・炭窯1・溝1・土坑2	『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』 県教委 '98
12	上西原遺跡	奈良～平安基壇建物を持つ方形区画1・掘立柱建物50・住居87	『上西原遺跡』 県教委 '99
13	川籠皆戸遺跡	古墳前期周溝墓1、奈良住居6、平安住居22・掘立柱建物1、時期不明住居2	No.11に同じ
14	堤東遺跡	古墳前期前方後方形周溝墓1・方形周溝墓2、古墳後期住居1、平安住居11・小鍛冶1	『堤東遺跡』 県教委 '85
15	柳久保遺跡	縄文土坑5、古墳前期住居9・中期住居20・中期竪穴状遺構8・後期住居7・円墳5、奈良住居24・竪穴状遺構2・井戸4、平安溝2・B下水田・炭窯2、古代土坑51、時期不明道1・掘立柱建物25・井戸2・溝7	『柳久保遺跡群』 I～IV・VII・VIII 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 '85～'88、No.11に同じ
16	中鶴谷遺跡	縄文土坑14、古墳住居18・古墳2、奈良～平安住居63・掘立柱建物13・井戸12・溝4・炭窯1	『柳久保遺跡群』 II・VI 前橋市教委 '85・'88
17	大久保遺跡	古墳住居3、奈良住居20、平安住居28・掘立柱建物5	『昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』 県教委 '84
18	頭無遺跡	弥生中期後半住居3、古墳後期住居1、平安住居25、近代以降炭窯3	No.17に同じ、『柳久保遺跡群』 II '85
19	下鶴谷遺跡	縄文住居20（花積下層・諸磯aを含む）・集石2・土坑97、奈良～平安住居14・炭窯8、近世以降土坑60	『柳久保遺跡群』 I・II・IV・V 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 '85・'87・'88
20	荒砥大日塚遺跡群C区	古墳中期住居2・後期住居3、平安B下水田、時期不明溝2	『荒砥大日塚遺跡』 群埋文 '94
21	鶴谷遺跡群	弥生住居2、古墳住居104、奈良～平安住居61・溝2、中世墓20	『鶴谷遺跡群』『鶴谷遺跡群II』 前橋市教委 '80・'81
22	荒砥下押切I遺跡	奈良住居2	No.23に同じ
23	荒砥下押切II遺跡	古墳中～後期住居12、後期円墳1・井戸1、平安住居1・B下水田・溝10	『荒砥下押切II遺跡・荒砥中屋敷II遺跡』 群埋文 '99
24	荒砥中屋敷II遺跡	古墳中～後期住居6、平安住居2・小鍛冶1・土坑2・溝2	No.23に同じ
25	中屋敷I遺跡	弥生後期～古墳前期住居5	『中屋敷I遺跡・明神山遺跡・伊勢山遺跡・中島遺跡・西裏遺跡』 群埋文 '03
26	荒砥上ノ坊遺跡	縄文諸磯b住居3、古墳初頭住居31・周溝墓6・土坑4・サク溝群2、古墳中～後期住居29・土坑1、奈良住居86、平安住居100・溝1・井戸2・土坑14、中世掘立柱建物18、近世溝43、時期不明井戸39・土坑256・火葬墓4	『荒砥上ノ坊遺跡』 I～IV 群埋文 '95～'98
27	荒砥大日塚遺跡群A区	古墳後期住居7、古墳時代以前井戸1、奈良住居11、平安住居3・B下水田、時期不明住居2・溝7・土坑13	No.20に同じ
28	荒砥大日塚遺跡群B区	古墳後期住居2、奈良住居2、平安B下水田、時期不明土坑5・柵列3・井戸2・溝6	No.20に同じ
29	上諏訪山B遺跡	平安住居9、中世地下式土坑4、時期不明溝3・土坑30	No.34に同じ
30	東原A遺跡	古墳後期住居2、近世溝1	No.29に同じ

I 発掘調査と遺跡の概要

31	大道遺跡	縄文住居1、古墳住居8、平安住居4	『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』 県教委 '88
32	山王遺跡	古墳住居24、平安住居2・土坑259・炭窯1	No.31に同じ
33	阿弥陀井戸道上遺跡	古墳住居2・土坑168	No.31に同じ
34	東原B遺跡	古墳前期住居27・前方後方形周溝墓5・円形周溝墓3・方形周溝墓8、平安住居19・掘立柱建物1・製鉄1、時期不明溝5・井戸1・土坑110	『上諏訪山A・B 中山A・東原A・B』 県教委 '93
35	中山A遺跡	古墳前期住居4・前方後方形周溝墓1・方形周溝墓1、平安住居8・溝2・土坑4	No.34に同じ
36	村主遺跡	縄文集石1、古墳前期住居27・中期住居1・後期住居2、古墳住居5、奈良住居3、平安住居15・掘立柱建物5・井戸1、中世?溝1、近世炭窯2、縄文～近世土坑112、時期不明住居4・石組5	『村主遺跡・谷津遺跡』 県教委 '00
37	中山B遺跡	古墳前期住居16・後期住居2、平安住居12、中世地下式土坑1、近世建物1、時期不明溝9・井戸3・土坑11	『北田下遺跡・中畑遺跡・中山B遺跡』 県教委 '01
38	北田下遺跡	古墳前期住居1、平安住居17、平安以前溝1、時期不明溝8・土坑24	No.37に同じ
39	中畑遺跡	平安住居2、平安以前溝1、時期不明溝6・土坑13	No.37に同じ
40	明神山遺跡	弥生後期～古墳前期住居31・周溝墓1、平安住居2、中世以降溝2・炭窯1	No.25に同じ
41	水口山遺跡	古墳11、周溝墓2、炭窯1	No.31に同じ
42	伊勢山遺跡	古墳後期前方後円墳1・円墳15、平安住居11、平安以降掘立柱建物1・土坑7、時期不明井戸3	No.25に同じ
43	阿久山遺跡	古墳住居1・円墳16、平安住居2	『下境Ⅰ・天神』 県教委 '90
44	下境Ⅰ遺跡	古墳以前土坑3、古墳前期～中期住居91・中期～後期住居5、古墳後期円墳22、中世寺院1、古墓7、古墳以降溝2・土坑4	『下境Ⅰ・Ⅱ遺跡』 県教委 '96
45	下境Ⅱ遺跡	古墳前期以前住居1、中期住居3、中世館、時期不明溝2	No.44に同じ
46	富士山Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳～平安住居32、古墳終末期円墳1、平安住居4・製鉄遺構1、近世塚1・溝5	『富士山Ⅰ遺跡1号古墳』
47	稲荷山Ⅱ遺跡	平安住居4・溝1	
48	舞台遺跡	古墳後期帆立貝式古墳1・円墳2	『舞台遺跡』 県教委 '95
49	舞台西遺跡	中近世井戸3	『昭和57年度実績報告』 群埋文 '83
50	稲荷山遺跡	奈良～平安住居3	No.43に同じ
51	地田栗Ⅲ遺跡	古墳前期住居4、後期円墳3・住居3、奈良～平安住居14、近世以降井戸4、時期不明住居2・土坑30	『地田栗Ⅲ遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 '94
52	荒砥東原遺跡	古墳住居4、奈良～平安住居18	『荒砥東原遺跡』 群埋文 '79
53	荒砥荒子遺跡	古墳中期居館1・住居4・堅穴状遺構2・井戸1・溝2・土坑1、古墳後期住居10、奈良住居3、平安住居3、古代溝14・井戸2・土坑52	『荒砥荒子遺跡』 群埋文 '00
54	元屋敷遺跡	古墳住居16、平安住居13・溝15	No.43に同じ
55	西大室丸山遺跡	古墳後期円墳3・巨石祭祀	『西大室丸山遺跡』 県教委 '97
56	葭沼遺跡	平安住居1・溝1	No.43に同じ
57	上蛭沼遺跡	弥生住居1、古墳住居15・古墳1	No.43に同じ
58	天神遺跡	古墳住居8・帆立貝式古墳1・円墳39、平安住居4	No.43に同じ
59	小稲荷遺跡	縄文陥し穴2、後期古墳5、奈良住居3、時期不明土坑3	『小稲荷遺跡』 前橋市教委 '87
60	大稲荷遺跡	古墳住居10・古墳2	『富田遺跡群 西大室遺跡群 清里南部遺跡群』 前橋市教委 '80
61	中島遺跡	古墳後期円墳8・住居17、平安B下水田、掘立柱建物1	No.25に同じ
62	北山遺跡	弥生住居15、古墳住居108、奈良～平安住居40	『西大室遺跡群』Ⅱ 前橋市教委 '81
63	上縄引遺跡	古墳周溝墓12・円墳9・埴輪棺2	No.62に同じ
64	大室城遺跡	中世館	山崎一 '78 『群馬県古城址の研究』
65	下縄引遺跡	縄文埋甕1、古墳円墳1・住居11、窯2	No.62に同じ
66	小二子古墳	古墳後期前方後円墳	『後二子古墳・小二子古墳』『小二子古墳』 前橋市教委 '92 '97
67	後二子古墳	古墳後期前方後円墳	No.66に同じ
68	中二子古墳	古墳後期前方後円墳	『中二子古墳』 前橋市教委 '95
69	前二子古墳	古墳後期前方後円墳	『前二子古墳』 前橋市教委 '93

2. 遺跡の地理的歴史的環境

70	荒砥上諏訪遺跡	古墳後期円墳1・住居2、平安掘立柱建物1、近世以降溝5	『荒砥上諏訪遺跡』 県教委 '77
71	荒砥五反田遺跡	古墳前期住居2・後期住居4、平安住居10、平安以前溝1、平安以降溝4、時期不明掘立柱建物1	『荒砥五反田遺跡』 県教委 '78
72	荒砥上川久保遺跡	古墳前期住居2・周溝墓6、古墳後期住居17、奈良住居10、平安住居54	『荒砥上川久保遺跡』 群埋文 '82
73	梅木遺跡	弥生後期住居2、古墳前～中期住居22・円形周溝墓1、奈良～平安住居16・B下畑・水田、中世井戸2、時期不明住居10・溝7・土坑37	『梅木遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 '86
74	久保皆戸遺跡	弥生後期住居3、古墳住居2、奈良～平安住居22	No.62に同じ
75	赤堀茶白山古墳	古墳中期帆立貝式古墳	後藤守一 '32 『上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳』 帝室博物館
76	三騎堂古墳群	古墳後期円墳4	『深津地区遺跡群』 粕川村教委 '87
77	多田山古墳群	古墳後期帆立貝式古墳1・円墳11、埴輪棺3、石槨墓2、竪穴1、終末期円墳10	『多田山古墳群』 群埋文 '04
78	南原古墳群	後期群集墳	松村一昭 '66 『赤堀村大字南原古墳発掘調査報告』 『群馬文化』 86 『群馬県史』 資料編3 群馬県史編さん委員会 '81
79	寺前遺跡	古墳時代中期住居4、時期不明井戸4・溝6・土坑30	No.4に同じ
80	五反田遺跡	弥生後期～平安住居174、集石遺構	『深津地区遺跡群』 粕川村教委 '87
81	打越前遺跡	平安住居5、時期不明溝1	No.80に同じ
82	前原遺跡	弥生中期後半住居3	No.80に同じ
83	荒砥洗橋遺跡	古墳後期住居24、奈良住居23・井戸1、平安住居29・B下水田、中近世井戸1、近世溝1、時期不明掘立柱建物5、柱穴列5・溝4・土坑18	『荒砥洗橋・宮西遺跡』 群埋文 '89
84	荒砥宮西遺跡	古墳後期住居9、奈良住居7、平安住居4、時期不明井戸1・溝4・土坑10	No.83に同じ
85	中並木遺跡	古墳時代中期住居3	『中並木遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 '94
86	大室小学校校庭遺跡、同II遺跡、同III・IV遺跡、大室小学校農場遺跡	縄文諸磯b住居1、古墳中～後期住居、平安住居	『大室小学校校庭III遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 '99 『市内遺跡発掘調査報告書』 前橋市教委 '00 『前橋市城南地区の土師器使用遺跡』 荒砥史談会 前橋市教委 '68 『勢多郡史』 勢多郡史編纂委員会 '58
87	荒子小学校校庭遺跡同II・III遺跡	古墳後期住居、奈良～平安住居26・須恵器窯、時期不明掘立柱建物4・井戸5・土坑33	『前橋市城南地区の土師器使用遺跡』 荒砥史談会 前橋市教委 '68 『荒子小学校校庭II・III遺跡』 山武考古学研究所 '90
88	西原遺跡	弥生後期末～古墳時代初頭住居5、集落を囲む溝1	No.80に同じ
89	三ヶ尻遺跡	古墳前期～平安住居41、古墳前期方形周溝墓2、後期円墳1	No.80に同じ
90	西迎B遺跡	縄文陥し穴8、弥生中期後半住居15、弥生後期末～古墳初頭住居1・方形周溝墓1、古墳中～後期住居10、時期不明炭窯1・溝1	No.80に同じ
91	石山片田・庚塚古墳群	前方後円墳を含む後期群集墳	『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報』 『下触片田古墳群発掘調査概報』 赤堀町教委 '89・'90
92	今井赤坂南遺跡	古墳後期住居13・古墳?1、時期不明土坑10	『今井赤坂南遺跡発掘調査概報』 赤堀町教委 '90
93	今井学校遺跡	古墳前期住居3・後期住居8・古墳周溝	『町内遺跡発掘調査概報』 赤堀町教委 '90
94	北原遺跡	古墳前期住居1、平安溝1、時期不明住居1・土坑6	『今井北原古墳及び住居跡発掘調査概報』 『北原遺跡第II地点の発掘調査概報』 『町内遺跡発掘調査概報』 赤堀町教委 '80・'89・'90
95	下触向井遺跡	縄文集石1、古墳後期住居43、奈良～平安住居14・掘立柱建物5	『町内遺跡発掘調査概報』 『下触向井遺跡発掘調査概報』 赤堀町教委 '81・'89
96	下触下寺遺跡	古墳方形周溝墓1、古墳後期～平安住居47、近世井戸5・溝1、時期不明土坑3	『下触下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報』 赤堀町教委 '87
97	中畑遺跡	古墳中期住居7・後期住居28、時期不明土坑群	『中畑遺跡、女堀用水遺構発掘調査概報』 赤堀町教委 '87

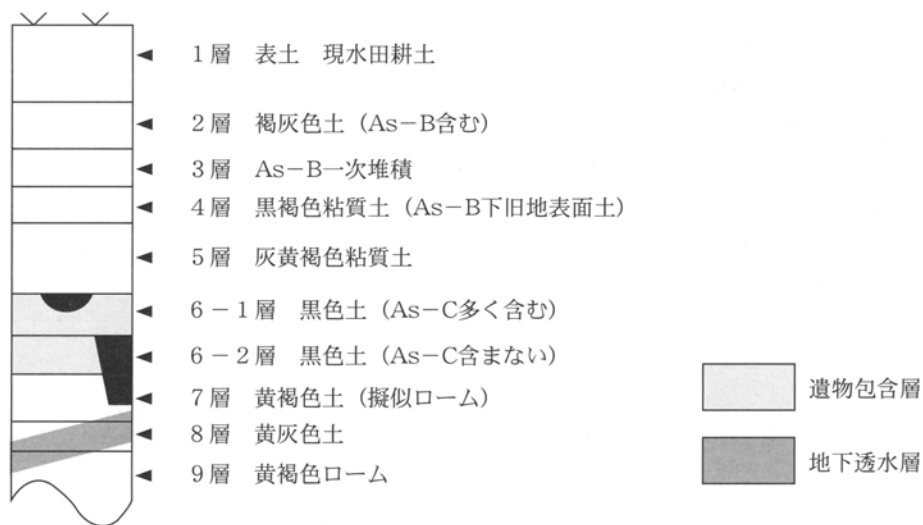
I 発掘調査と遺跡の概要

98	女堀	中世用水路	No.103に同じ、『中畑遺跡、女堀用水遺構発掘調査概報』赤堀町教委'87 『女堀』 県教委'80 『女堀』 群埋文'86
99	吉沢峯古墳群	後期群集墳	『吉沢峯古墳発掘調査概報』赤堀町教委'86
100	今井柳田遺跡	縄文諸磯住居1・堀之内住居9・土坑13、縄文集石1、古墳後期～平安住居21・土坑26、時期不明石組4	『今井柳田遺跡発掘調査概報』赤堀村教委'82
101	今井田向遺跡	縄文加曾利E住居1、古墳中期住居3・後期住居26、古墳土坑8、平安住居12、時期不明溝3	No.100に同じ
102	多田山東遺跡	縄文諸磯住居7、縄文土坑11、弥生末～古墳前期住居2、古墳前～中期住居8、古墳後期住居26、奈良～平安住居10、時期不明土坑7・溝3	『多田山東遺跡発掘調査概報』赤堀村教委'82
103	川上遺跡	古墳前期住居9・後期住居21、奈良～平安住居18・有礎建物? 1・掘立柱建物1・溝1・土坑2、時期不明井戸1	『川上遺跡、女堀遺構発掘調査概報』赤堀村教委'80
104	今井南原遺跡	縄文諸磯住居1、縄文土坑1、弥生末～古墳前期住居36、古墳前期方墳? 1、古墳後期住居99・土坑2、奈良住居15、古代土坑5、中世以降溝2、時期不明掘立柱建物4	『今井南原遺跡発掘調査概報』赤堀村教委'81
105	新屋遺跡	古墳前期住居1	『前橋市城南地区の土師器使用遺跡』荒砥史談会 前橋市教委'68
106	東道	中世幹線道	『歴史の道調査報告書』16 県教委'83
107	荒砥保育所遺跡	古墳後期住居1	No.105に同じ

3. 基本層序

本遺跡は、神沢川左岸の北から南に延びる細長い台地上東南端に立地する。東には台地と並行して南北に延びる低地を臨む。基本となる土層は、A・B両調査区ともロームとその上に堆積する黒色土及び褐色土である。中位にAs-Bの一次堆積を確認し、直下を調査したが水田畦畔などの遺構は確認できなかった（「II-5 As-B下旧地表面」参照）。全ての遺構は6-1層、6-2層及び7層から検出され、

遺構外遺物としたものもほとんどがこれらの層位からの出土である。遺構外遺物には縄文時代中期を中心とする土器が少なからず含まれており、7層又は8層を縄文時代の遺構確認面とする可能性もある。しかし、この層位付近からは地下水の噴出が甚だしく精緻な発掘調査が出来なかった。同じ理由で旧石器の調査も行っていない。なお、テフラについては「III-1 火山灰分析」を参照されたい。



基本層序概念図

4. 遺跡の概要

本遺跡では、主に古墳時代～平安時代にかけての遺構及び縄文時代以降の遺物が確認された。以下、時代ごとに概要を説明する。

平安時代

水田相当面がA・B区で検出された。この遺構面はAs-B（1108年降下）に覆われているため、当時の生活面と理解した。生活面には畦畔状の高まりは検出されなかったが、土師器破片などの生活具の出土は多少認められた。このほか溝跡がA区で5条検出された。

古墳時代

竪穴住居跡5軒が検出され、調査を実施した。

1号住居は、A区において東半分のみ検出された。1辺約6m（推定）の方形の住居である。柱穴は2箇所確認されたが、竈や炉は未検出である。また、焼失住居であり、屋根材の炭化したものが床面より出土した。出土遺物は土師器類などである。出土遺物からみて、古墳時代前期のものと考えられる。

2号住居は、B区において検出された。1辺約6mの方形の住居である。柱穴は4箇所確認され、竈や貯蔵穴も検出された。竈は残存状況が良好であり、支脚に土師器高坏を逆置した状態で検出された。出土遺物は土師器類などである。出土遺物からみて、古墳時代後期前半のものと考えられる。

3号住居は、B区においては西半分のみ検出された。1辺約6.7m（推定）の方形の住居である。柱穴は

2箇所確認され、竈や貯蔵穴は未検出である。また、焼失住居であり、屋根材の炭化したものが床面より出土した。出土遺物は土師器類などである。出土遺物からみて、古墳時代中期後半のものと考えられる。

4号住居は、A区において約9割が検出された。1辺約6m（推定）の隅丸方形の住居である。柱穴は5箇所確認され、炉や貯蔵穴が検出された。出土遺物は土師器類などである。出土遺物からみて、古墳時代前期のものと考えられる。

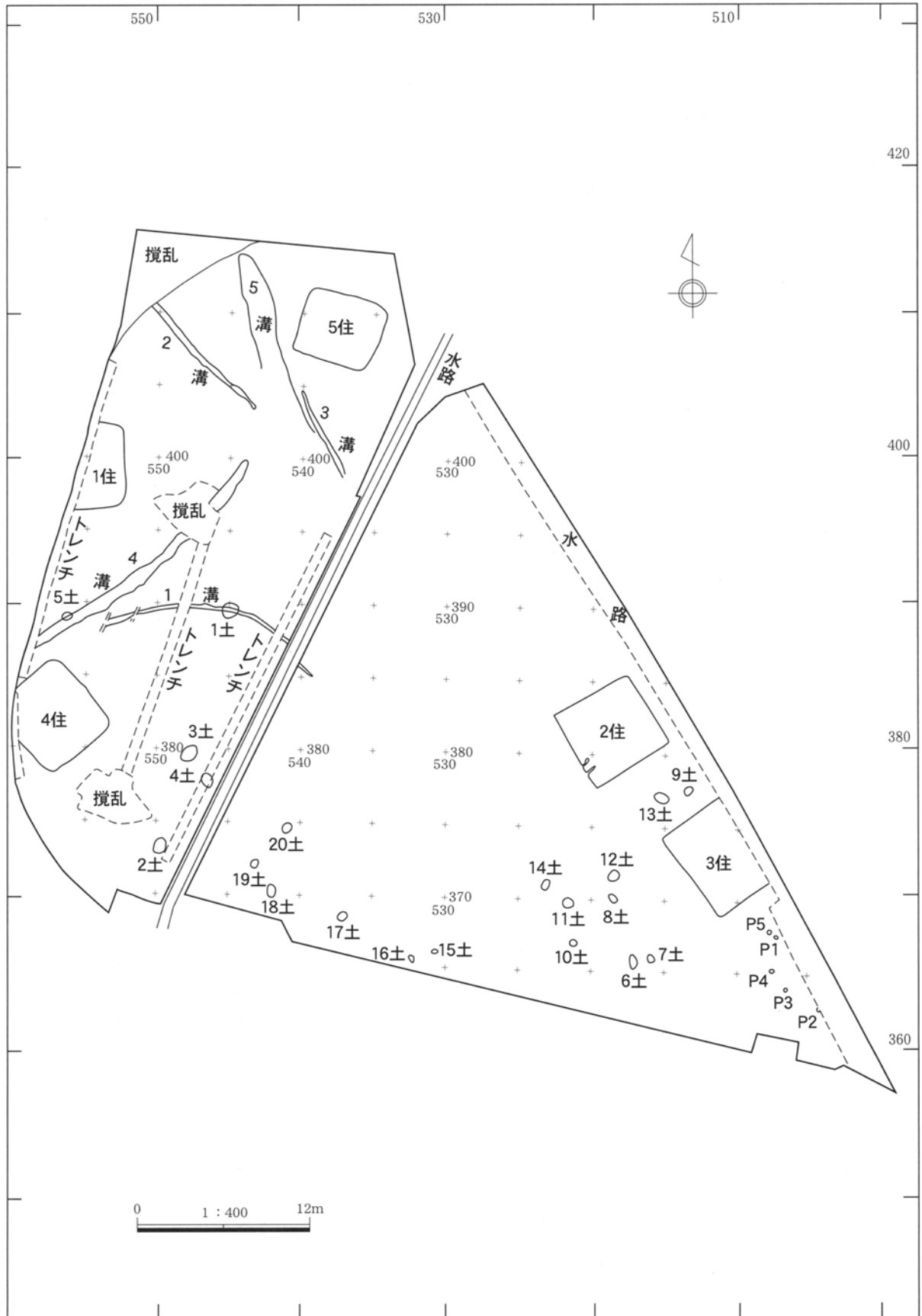
5号住居は、A区において検出された。1辺約5mの隅丸方形の住居である。柱穴は3箇所確認され、炉や貯蔵穴が検出された。出土遺物は土師器類などである。出土遺物からみて、古墳時代前期のものと考えられる。

住居以外の遺構としては、土坑が20基検出された。何れも直径0.5～1.3m程度のものである。また、何らかの有機的関連が考えられるピット群をB区で1箇所検出した。

さらに古墳時代関連としては、A区・B区に共通して、層厚10～50cmの古墳時代遺物包含層が存在した。この層の中からは古墳時代遺物が多く出土し、遺物収納箱約10箱の土器破片が出土した。この中には縄文時代中期を中心とする土器も少なからず認められる（「II-6 遺構外出土遺物」参照）。

遺構分布については、次ページに掲げる「西大室上諏訪遺跡遺構全体図」の通りである。

I 発掘調査と遺跡の概要



西大室上諏訪遺跡遺構全体図

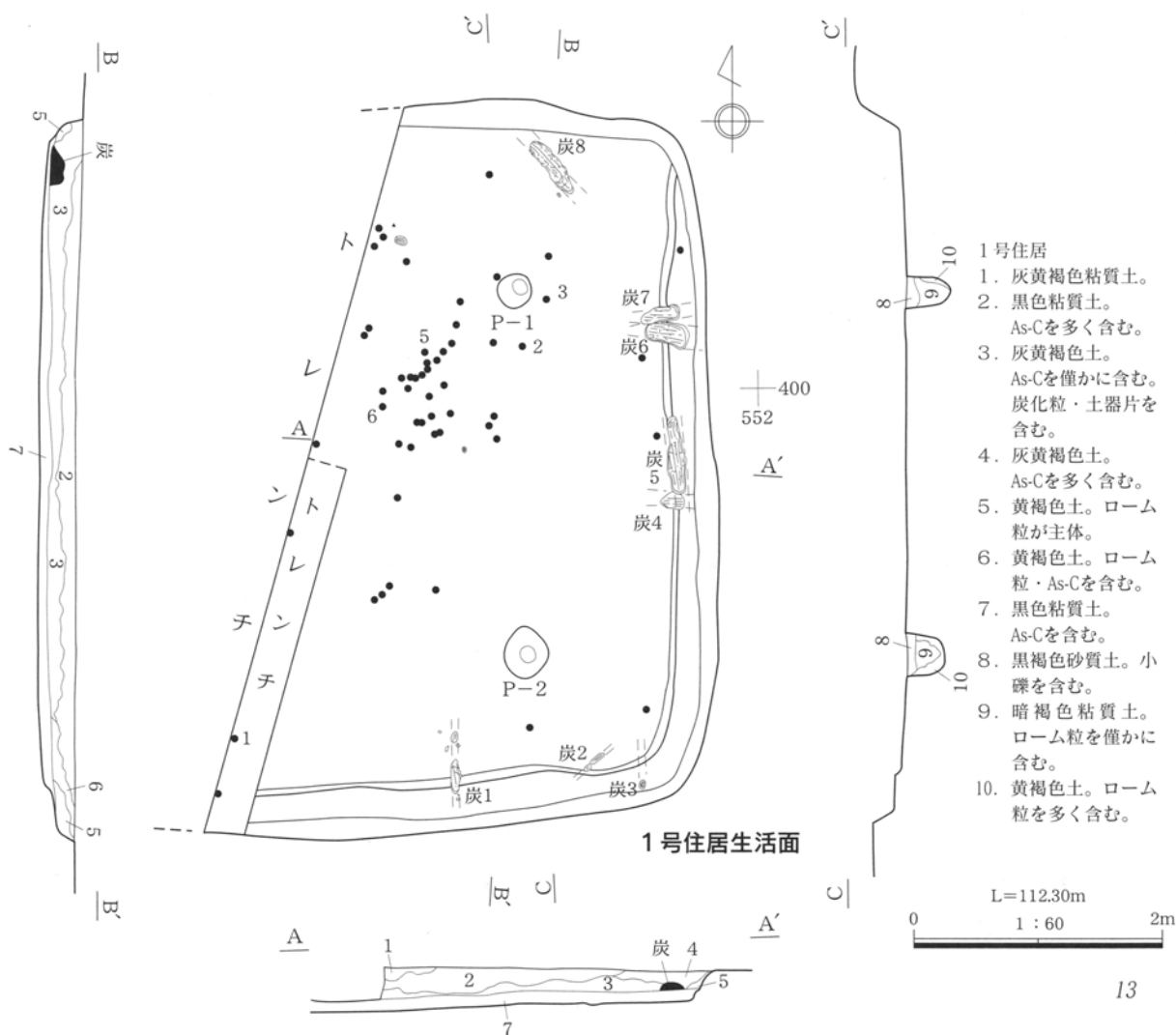
II 検出された遺構と遺物

1. 住居

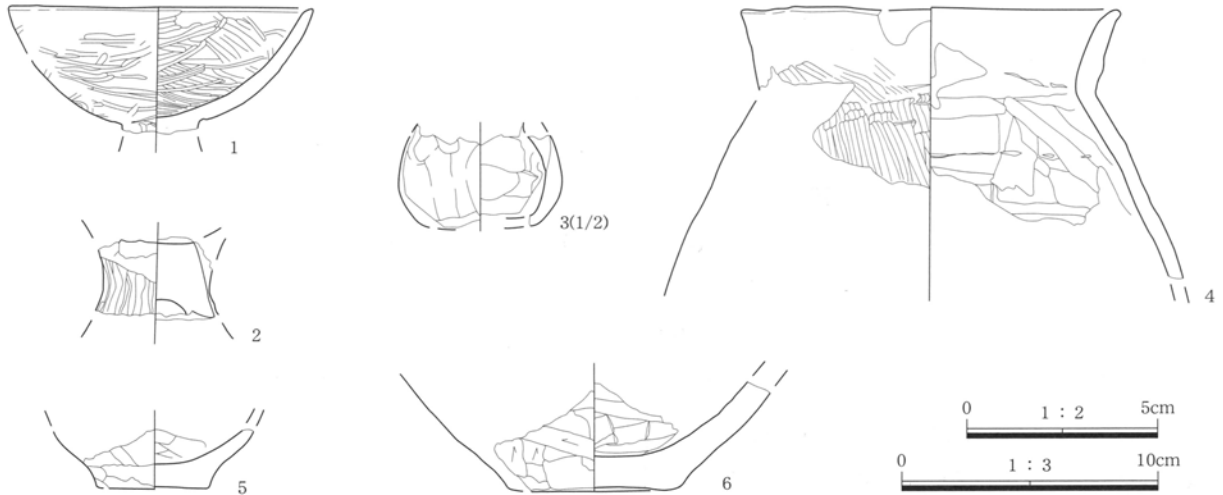
1号住居 (P.L. 1・16)

位置 A区 (X=396~402, Y=552~556) **検出状況** 基本土層の6-1および6-2層を除去して、平面プランを確認。**覆土** As-Cを含む黒色土が主体。**規模** 平面では、5.95m×4.10+mを測り、方形を呈する。断面では、確認壁高が0.27m。**面積** 16.6+m² **柱穴** 2箇所を検出。P-1は直径30cm、深さ30cm。P-2は直径35cm、深さ30cm。ともに、柱痕は未検出。**壁溝** なし。**床面状況** 張床なし。張床と思われた最下層覆土(1号住居覆土7層)は、柱穴を完全に覆い隠している状況から考えて、張床土ではないと判断。また、この最下層覆土

を除去した床面では、南壁際と東壁際において壇状遺構を検出。壇状遺構は平面で幅20~28cm、高さが5cmであり、地山(この場合は基本土層7層)のケズリだして形作られている。**炉・貯蔵穴** 調査範囲内では、なし。**屋根構造関連施設** 調査範囲内では、未検出。**出土遺物** 屋根材と思われる炭化材が出土(「Ⅲ-2 炭化材樹種同定」参照)。出土分布は、層位的には床面および覆土下層、平面的には壁と柱穴の間のみである。土器は土師器甕・高坏などが出土。出土分布は層位的には覆土下層、平面的には住居中央付近(柱穴に囲まれた内側)に集中。**帰属時期** 出土遺物から、古墳時代前期と考える。



II 検出された遺構と遺物



1号住居出土遺物

1号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	土師器 高杯	+17	口径 (12.1) 底径 - 器高 5.0+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/4	口縁端部に内斜面をもつ。 外面 体部横方向・脚部最上位縦方向篋磨き。 内面 口縁部横撫で後斜方向篋磨き。	体部中位以上 1/2・体部下位 ～脚部上位残
2	土師器 高杯	+5	口径 - 底径 - 器高 3.1+	①軽石、赤褐色鉱物 ②普通 ③橙5YR6/6	脚部と杯部の連結に表面撫で整形で断面台形状の部品を充て、この表面に内外面とも粘土を貼り付けて成形する。外面 縦方向篋削り後篋磨き。内面 脚部撫で、杯部篋磨き。	杯部最下位～ 脚部上位残。
3	土師器 壺? ミニチュア	+7	口径 - 底径 (2.5) 器高 2.4+	①軽石、石英、黒色 鉱物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR5/4	外面 撫で・単位不明瞭、一部に削り状の擦痕がある。 内面 雑な撫で。	胴部1/3残。
4	土師器 甕	埋没土	口径 (15.1) 底径 - 器高 10.6+	①軽石 ②普通 ③鈍い橙7.5YR7/4	外面 口縁部中位以下斜方向刷毛目後口縁部横撫で。 内面 横方向篋撫で後斜方向撫で、口縁部横撫で、胴部及び口縁部に輪積み痕あり。	口縁部・胴部 上位3/4残。
5	土師器 甕	+1	口径 - 底径 (4.4) 器高 2.3+	①軽石 ②普通 ③鈍い黄褐10YR4/3	外面 胴部斜方向篋削り後胴部最下位横方向篋削り、底部篋削り。 内面 横方向篋撫で。	胴部下位～底 部1/4残。
6	土師器 甕?	+3	口径 - 底径 (6.6) 器高 4.3+	①軽石、黒色鉱物 ②普通 ③灰黄褐10YR4/2	外面 篋削り。 内面 篋撫で。	胴部下位1/4・ 底部1/2残。

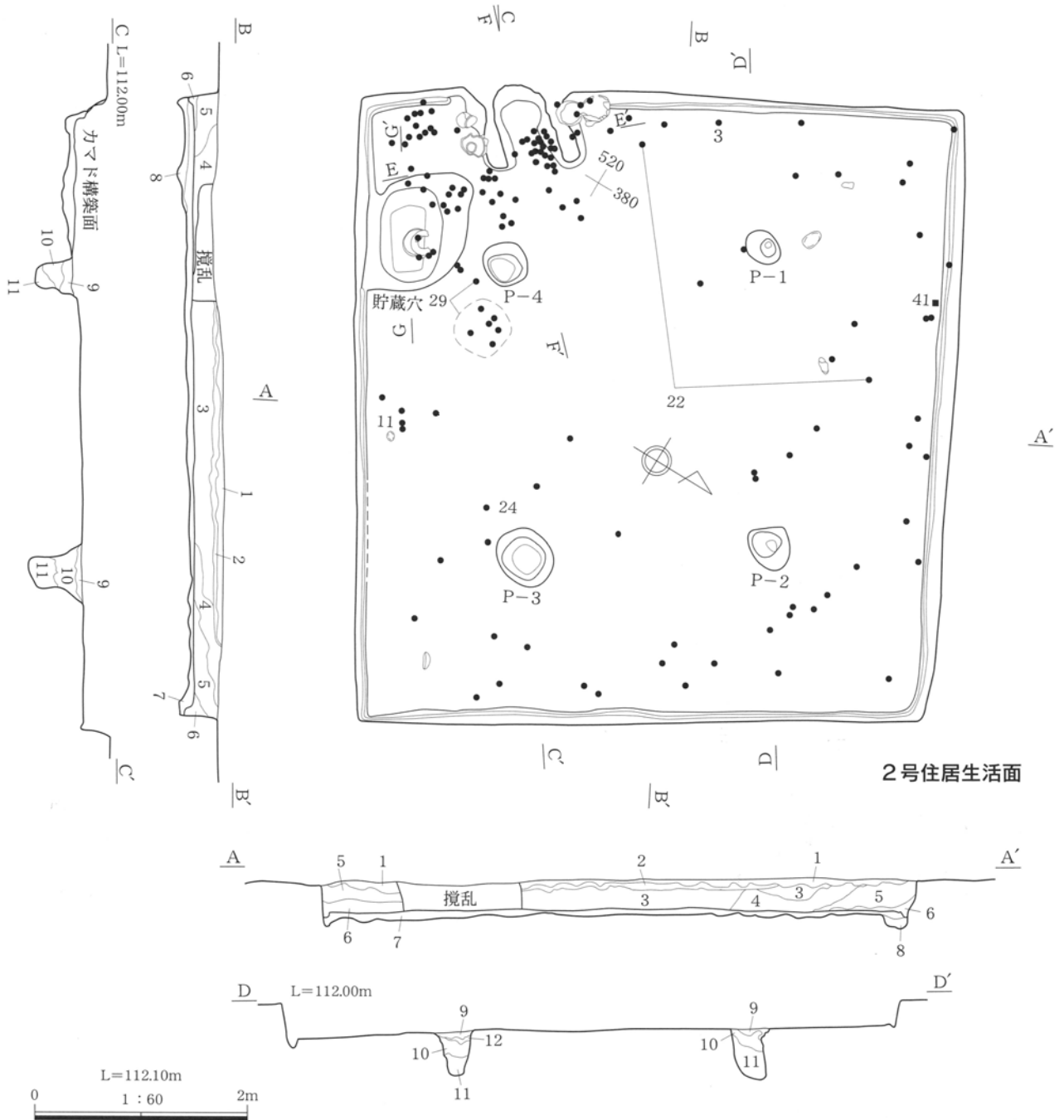
2号住居 (P.L. 2～5・16～19)

位置 B区 (X=377～385、Y=514～522) **検出状況** 基本土層2層を除去すると、その下からは基本土層7層が露出。そして、この基本土層7層において平面プランを確認。**覆土** FAを含む黒色土が主体。**規模** 平面では、6.00m×5.68mを測り、方形を呈する。断面では、確認壁高が0.35m。**面積** 25.3㎡ **柱穴** 4箇所検出。P-1は直径34cm、深さ46cm。P-2は直径40cm、深さ42cm。P-3は直径59cm、深さ52cm。P-4は直径40cm、深さ41cm。すべての柱穴で、柱痕は未検出。**壁溝** 張床面で幅5～8cmの溝が壁沿いに全周。なお、溝底面でのピット列は未検出。**床面状況** 張床あり。

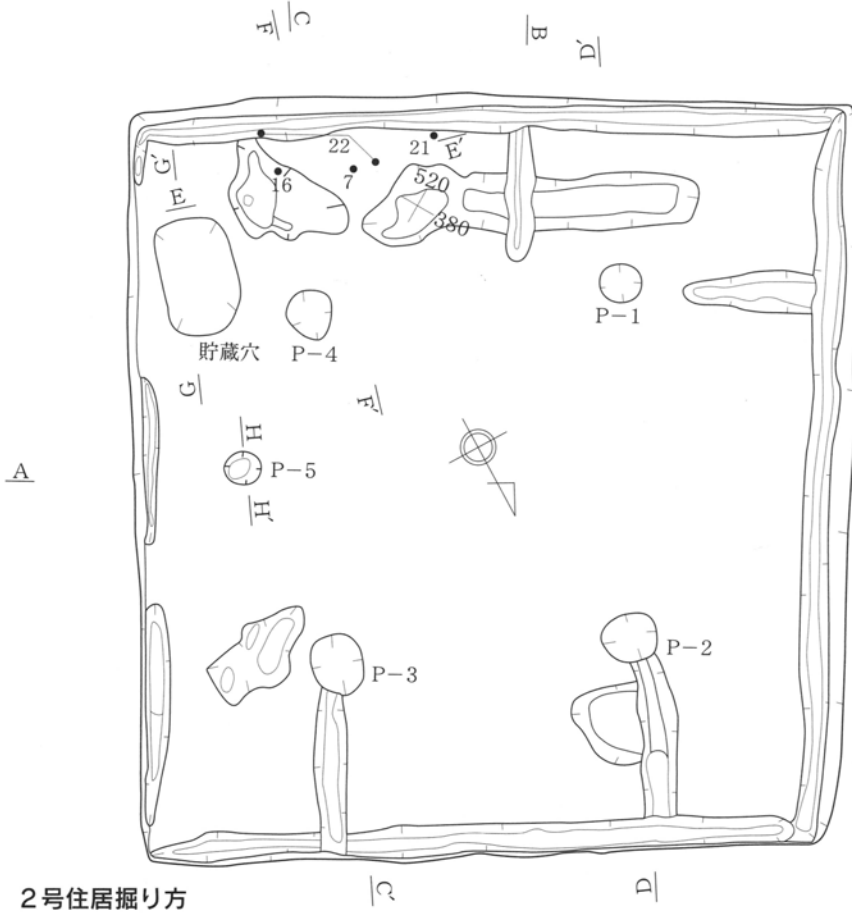
ロームを多く含む暗褐色土(2号住居覆土7層)で形成。掘り方面では壁と柱穴の間で幅8～15cm、深さ3～6cmの間仕切り溝4条検出。なお、この間仕切り溝底面でのピット列は未検出。**貯蔵穴** 住居の南隅、南壁に接する位置で検出。平面形は歪んだ長方形を呈し、長軸108cm×短軸84cm×深さ66cm。平面プランは明瞭に確認できたが、貯蔵穴上面を覆う板蓋の痕跡は未確認。**カマド** 住居の南隅、西壁に接する位置で検出。灰白色粘土を用いての作り付けカマドで、煙道の壁面へのケズリこみはなし。天井部は完全崩落。袖部は、袖部残存長は右(北)袖が70cm、左(南)袖が80cm、袖残存高はともに15～20cm。焚き口部は最大幅が55cmで、支脚として高

坏2つ (No.12・13) を逆位で設置。煙道は検出面では15°の斜度。袖部内面及び煙道部は激しく焼土化し、焚き口部全面(東側)には灰層が分布。**屋根構造関連施設** 未検出。**出土遺物** 土器は土師器甕・壺・高坏・坏・甕、手捏土器と須恵器坏蓋が出土。また、その他に土製模造品鏡、土製紡錘車・錘、磨石が出土。出土分布は層位的には床面および覆土下層で、平面的には壁と柱穴の間に多く分布。床面出土としては、土師器甕 (No.20・21・26)・壺 (No.22)・

坏 (No.4) がある。カマド内出土としては、土師器高坏 (No.12・13)・甕 (No.28)・甕 (No.31) がある。貯蔵穴内出土としては、土師器坏 (No.9)・甕 (No.25・29・30) がある。その他にも、カマド内出土と貯蔵穴出土及び住居内出土の破片資料が接合したものが多くある。**帰属時期** FAが覆土中に存在することと、出土遺物の様相から、古墳時代後期前半と考える。



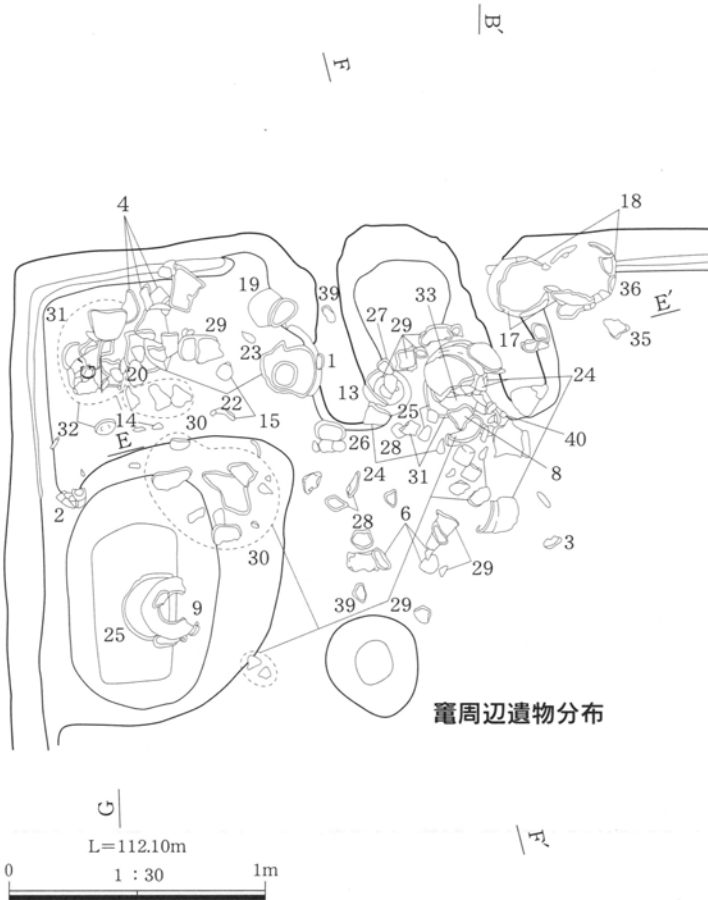
II 検出された遺構と遺物



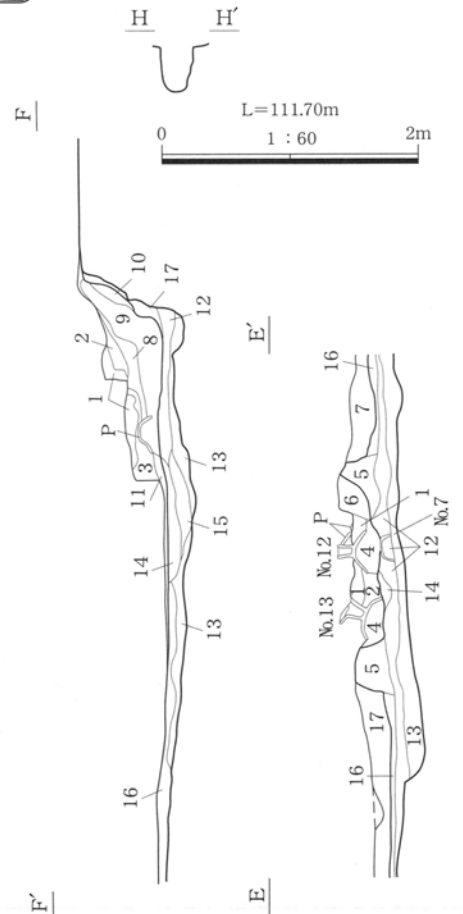
2号住居掘り方

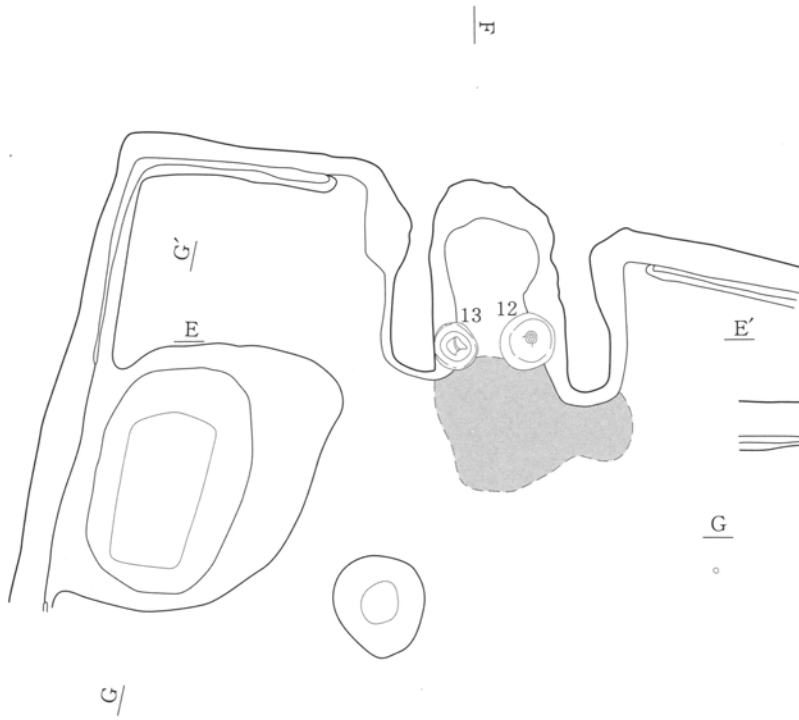
2号住居

1. 黒褐色粘質土。
FA・ローム粒を多く含む。
2. 黒色土。FAを含む。
3. 黒色土。パミスは含まない。
4. 黒褐色粘質土。
FA・焼土粒を僅かに含む。ローム粒を多く含む。
5. 褐灰色土。FA・焼土粒を含む。
6. にぶい黄褐色土。ローム粒が主体。FA・焼土粒・炭化粒を含む。
7. 暗褐色土。ローム粒を多く含む。黒色土粒を含む(張床土)。
8. 暗褐色土。ローム粒が主体。黒色土粒を含む。
9. 黒褐色粘質土。FAを含む。
10. 灰黄褐色砂質土。
11. にぶい黄褐色粘質土。黒色土粒を含む。



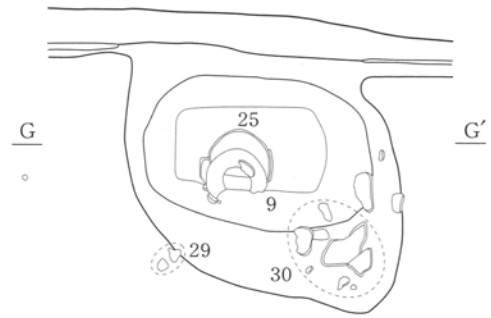
竈周辺遺物分布





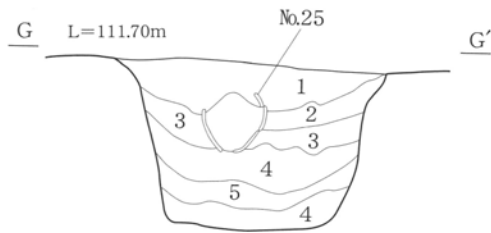
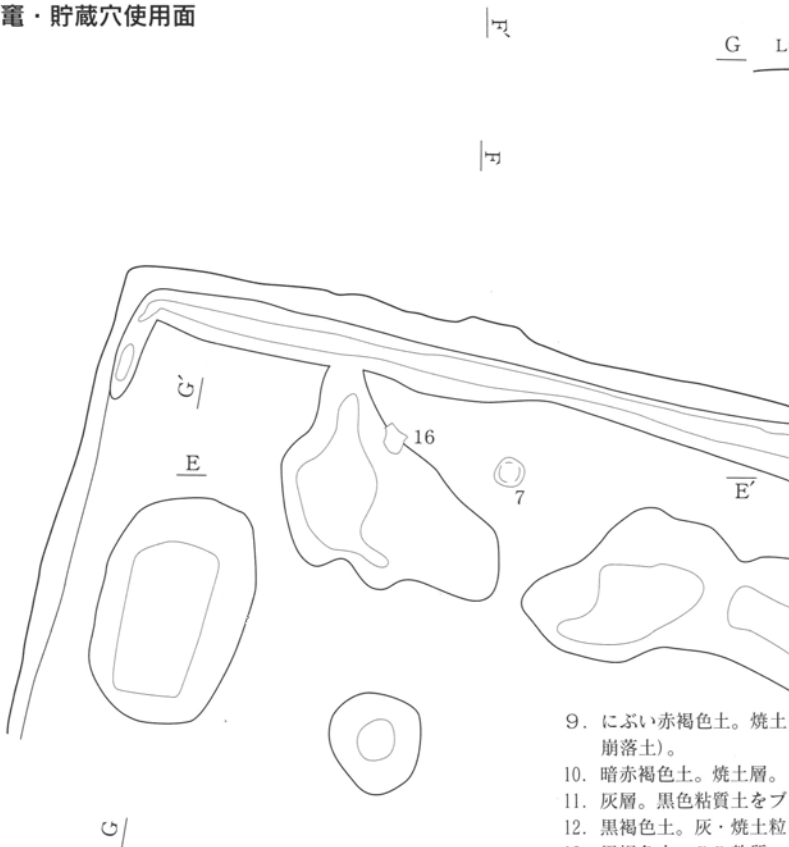
2号住居貯蔵穴

1. 黒色砂質土。FAを含む。
2. 黒褐色粘質土。焼土・シルトブロックを含む（かまどの解体土）。
3. 灰黄褐色粘土。シルトブロックを多く含む。焼土粒も含む（かまどの解体土）。
4. 黒褐色粘質土。焼土を僅かに含む。
5. 灰黄褐色粘質土。ローム粒を多く含む。



貯蔵穴遺物分布

竈・貯蔵穴使用面



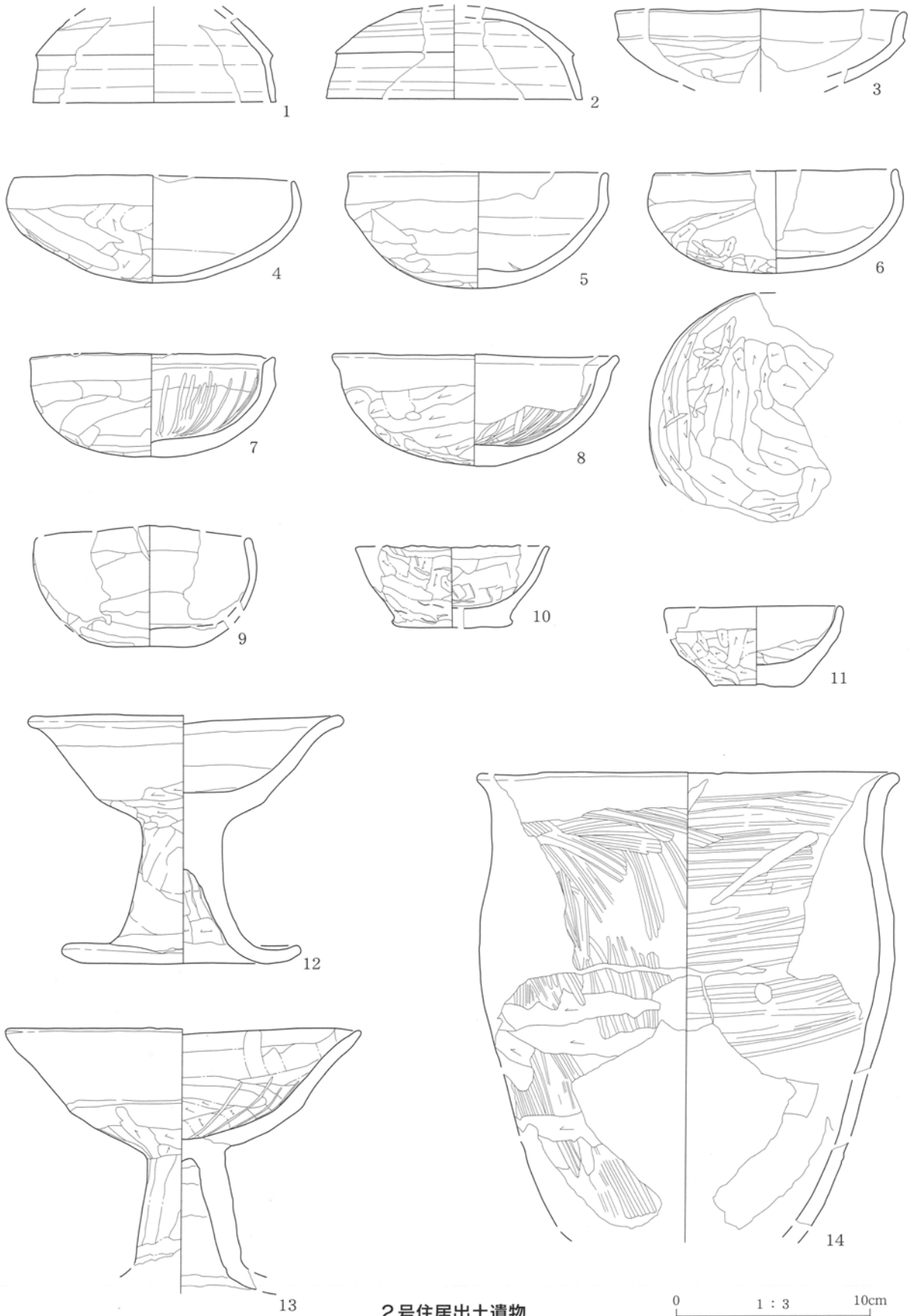
2号住居カマド

1. 黒褐色土。焼土ブロック・粘土ブロックを含む（天井崩落土）。
2. 暗褐色土。焼土ブロックを含む。
3. 褐灰色土。焼土ブロック・粘土ブロックを多く含む。
4. 赤褐色土。焼土ブロック・粘土ブロックを多く含む。
5. 灰白色粘土。
6. にぶい赤褐色粘土。
7. 黒褐色土。やや軟質黄色シルトブロック・焼土ブロックを多く含む。
8. 灰白色粘土。焼土粒を多く含む（天井崩落土）。
9. にぶい赤褐色土。焼土ブロックが主体。灰白色粘土を僅かに含む（天井崩落土）。
10. 暗赤褐色土。焼土層。
11. 灰層。黒色粘質土をブロック状に含む。
12. 黒褐色土。灰・焼土粒を多く含む。
13. 黒褐色土。やや軟質。黄色シルトブロック・焼土ブロックを多く含む。
14. 黒褐灰層。焼土粒を僅かに含む。
15. 黒褐色土。黄色シルトブロック・焼土粒を多く含む。
16. 暗褐色土。硬い。ロームが主体。黒色土粒を含む（張床）。
17. 褐色土。ソフトロームを多く含む。焼土粒を含む。

竈周辺掘り方



II 検出された遺構と遺物

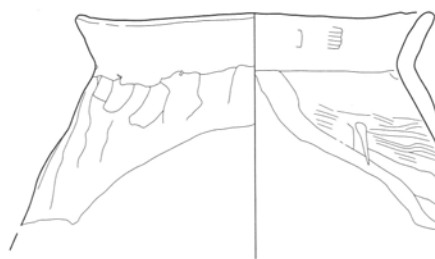


2号住居出土遺物

1. 住居



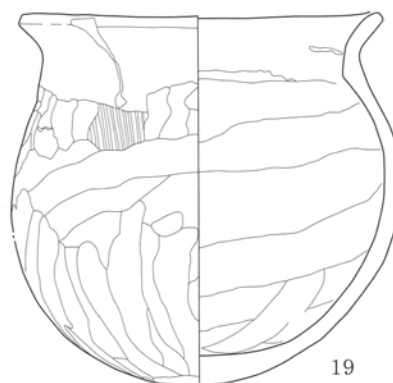
15



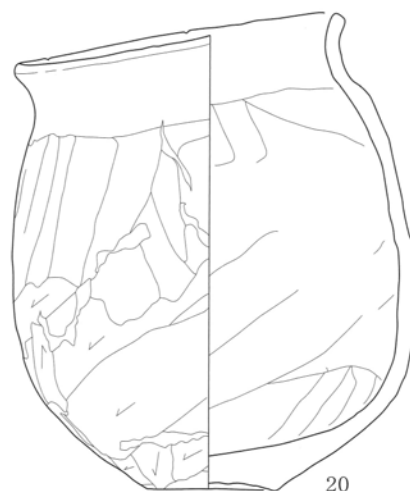
16



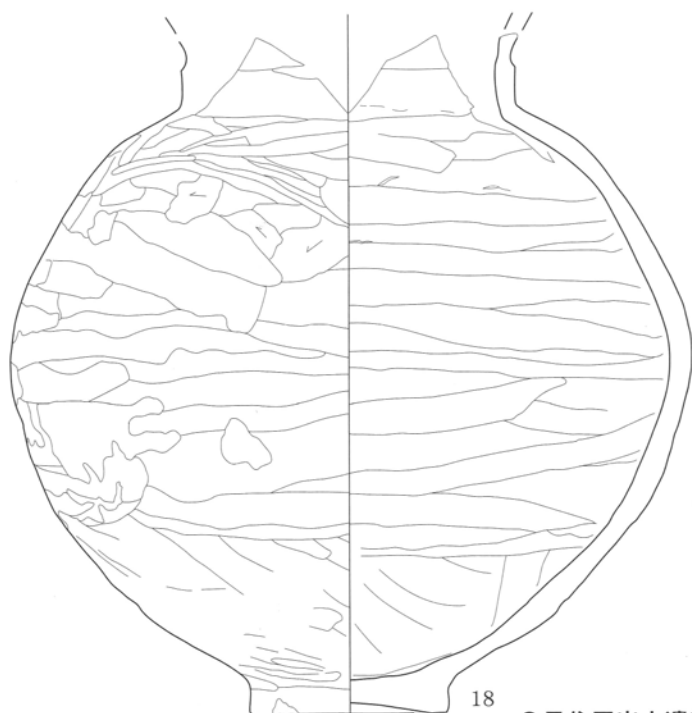
17



19



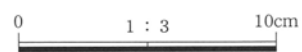
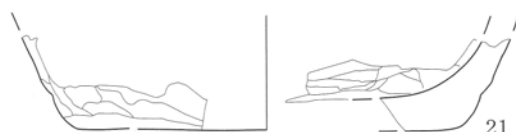
20



18

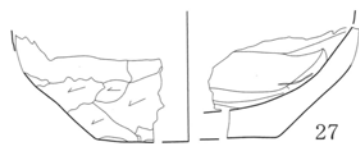
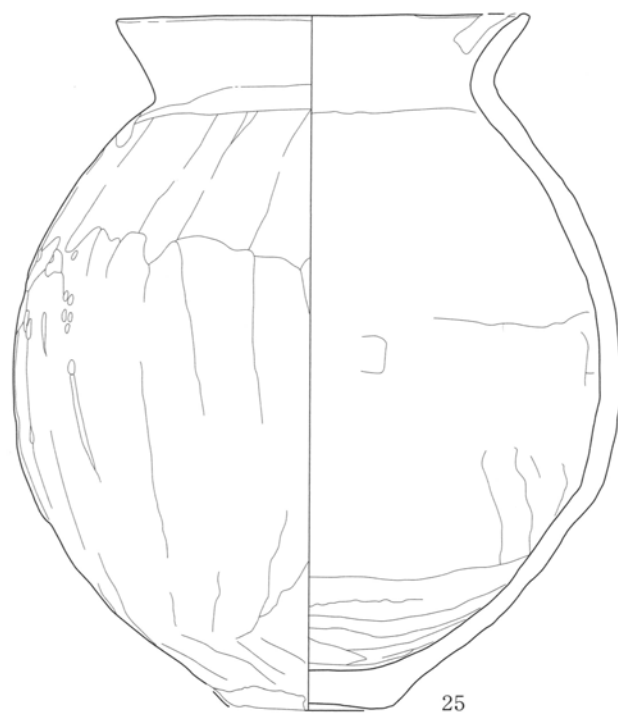
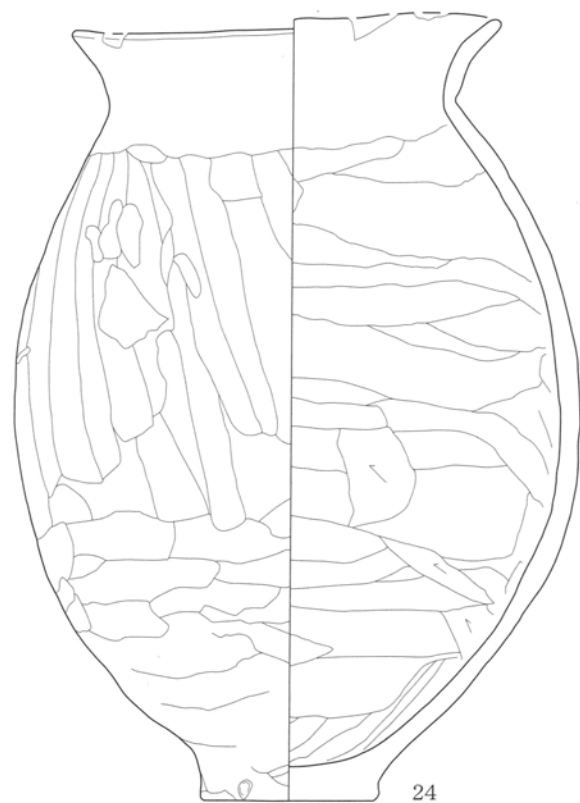
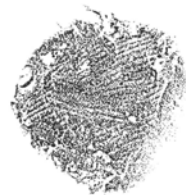
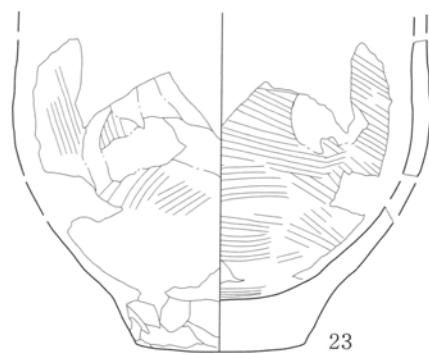
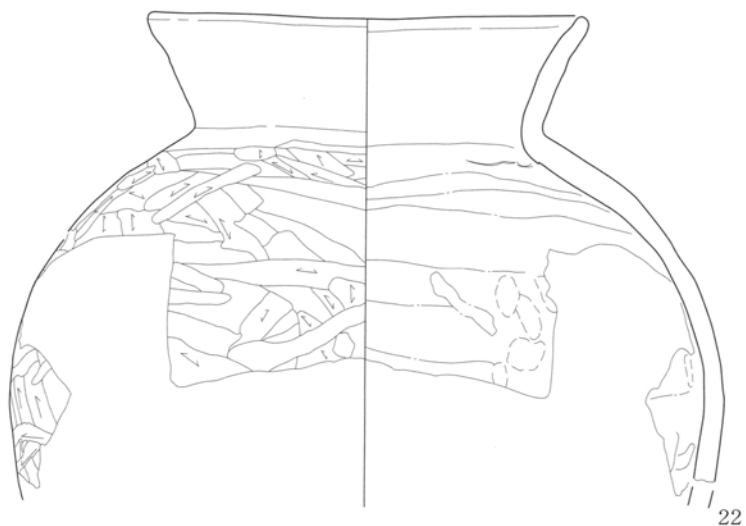


21



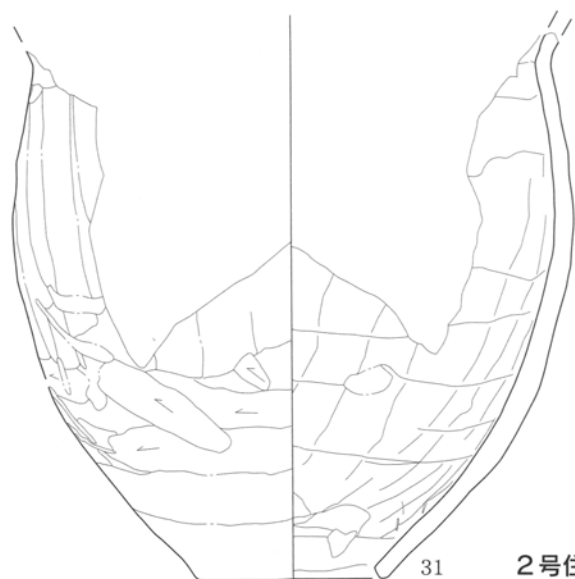
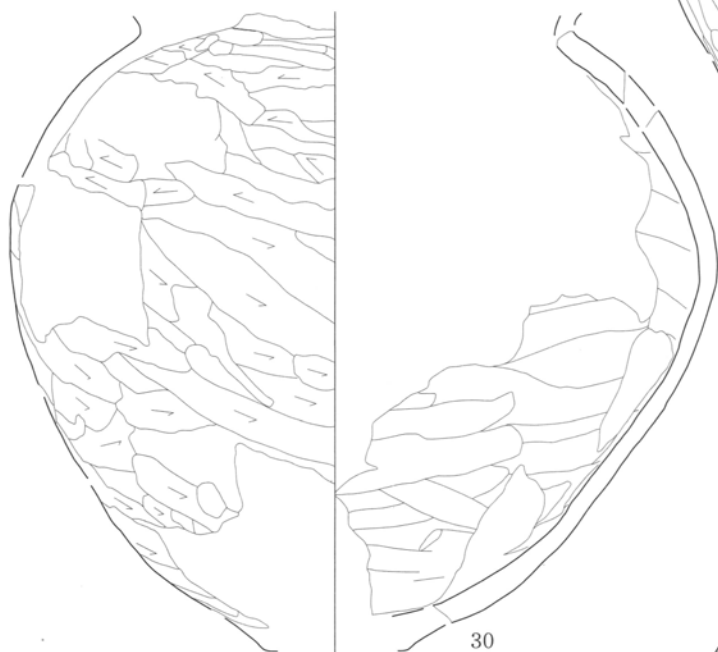
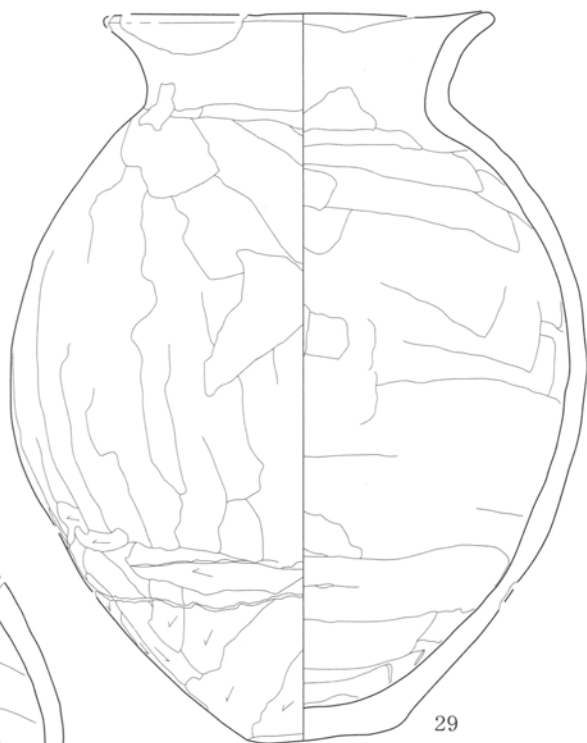
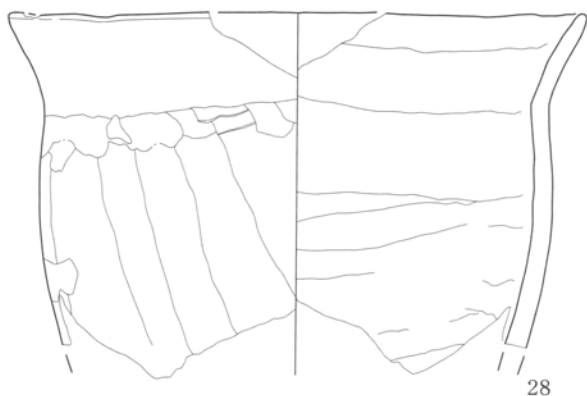
2号住居出土遺物

II 検出された遺構と遺物



0 1 : 3 10cm

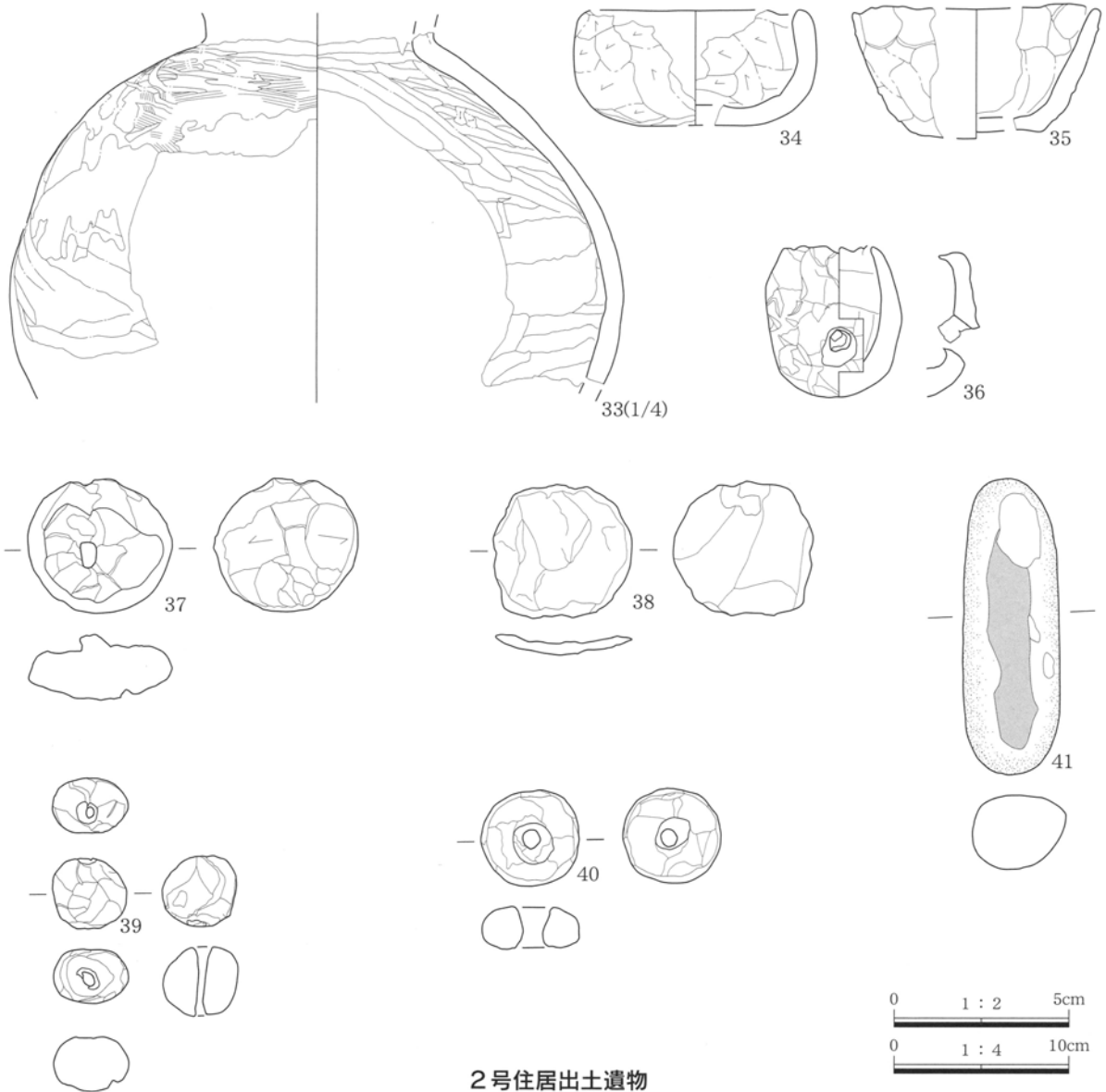
2号住居出土遺物



2号住居出土遺物

0 1 : 3 10cm

II 検出された遺構と遺物



2号住居出土遺物

2号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	+17	口径 (12.7) 底径 - 器高4.3+	①乳白色鉱物、きめ細かく軽い ②還元焰、普通 ③N7/	口唇部面取。 外面 轆轤成形後天井部回転篋削り。 内面 轆轤整形。	天井部下半～ 口縁部1/8残。 在地産。
2	須恵器 蓋	+27、埋没 土	口径 (13.4) 底径 - 器高 4.8+	①乳白色鉱物、きめ細かく軽い ②還元焰、普通 ③N7/	口唇部面取。 外面 轆轤成形後天井部左回転篋削り。 内面 轆轤整形。	3/8残。 在地産。
3	土師器 杯	+5～11	口径 (15.3) 底径 - 器高 3.9+	①軽石、石英 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/6	外面 体部左方向篋削り、口縁部横撫で。 内面 体部横方向撫で、口縁部横撫で。	口縁～体部外 縁1/8残。
4	土師器 杯	+1～2	口径 14.7 底径 - 器高 5.6	①軽石、石英、きめ細かい ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/3	外面 体部主に左方向篋削り・一部体部上位上方向撫で後口縁部横撫で。 内面 体部下半撫で後体部上半以上横撫で。	体部下位一部 欠。
5	土師器 杯	埋没土	口径 13.6 底径 - 器高 6.0	①赤褐色鉱物、石英、軽石 ②普通 ③橙5YR6/6	外面 左方向篋削り後口縁部横撫で。 内面 体部下半篋撫で後上半以上横撫で。	口縁～体部上 位1/4欠。
6	土師器 杯	+5～18	口径 (12.8) 底径 - 器高 5.3	①軽石、乳白色鉱物 ②良好 ③明赤褐2.5YR5/6	外面 篋削り、体部上位の一部未調整、口縁部横撫で。 内面 体部下位縦方向撫で、口縁～体部中位横撫で。	口縁～体部上 半1/4・下半 1/2残。

1. 住居

7	土師器杯	竈-5	口径 底径 器高	12.9 — 5.4	①軽石、赤褐色鉱物、 重い ②普通 ③赤褐2.5YR4/6	底部が平坦。外面 体部下位から上位へ主に左方向に削り、後口縁部横撫で。内面 体部中位以下撫で後体部最上位～口縁部横撫で後体部放射状に磨き。	完形。
8	土師器杯	竈+14、貯蔵穴埋没土	口径 底径 器高	15.0 — 5.9	①軽石、赤褐色鉱物、 きめ細かい ②良好 ③橙5YR6/6	外面 体部削り・体部上位の一部撫で又は無調整、口縁部横撫で。内面 体部中位以下撫で後上位～口縁部横撫で後放射状に磨き。	口縁部～体部上半3/8欠。
9	土師器杯	貯蔵穴-12 ~-13	口径 底径 器高	11.4 4.3 6.3	①軽石、石英 ②普通 ③暗赤褐2.5YR3/4	外面 体部左方向に削り後口縁部横撫で、底部削り。内面 底部撫で後体部下位横方向撫で、体部中位以上横撫で。	口縁～体部3/8欠。
10	土師器杯	埋没土	口径 底径 器高	(10.2) (6.4) 4.3	①軽石 ②良好 ③明褐7.5YR5/8	外面 体部撫で、口縁部横方向撫で、口唇部面取、底部削り後撫で。成形時の亀裂あり。内面 体部削撫で、口縁部横撫で。	口縁～体部上半1/8・体部下半以下1/4残。
11	土師器杯	+4	口径 底径 器高	(9.4) 4.2 4.2	①軽石 ②良好 ③橙5YR6/6	外面 体部左又は上方向撫で後口縁部横撫で、底部一部撫でで蛇の目状に中央が凹む。内面 体部削撫で後口縁部横撫で。	口縁部1/2・体部上半5/8欠。
12	土師器高杯	+14、埋没土、竈+8 ~19	口径 底径 器高	16.5 12.5 12.9	①乳白色鉱物、石英 ②良好 ③鈍い褐7.5YR5/4	脚端部が強く捲れる。外面 杯体部下半削り後後より上位を横方向撫で、口縁部横撫で、脚柱状部削り後斜方向撫で、端部横撫で。内面 杯部中位以上横撫で、下位撫で、脚柱状部横方向削り後、端部横撫で。	口縁部一部欠。
13	土師器高杯	竈+6~14	口径 底径 器高	18.6 — 13.6+	①軽石、黒色鉱物 ②良好 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 杯部後より下位を縦方向に削り後後直下を横方向に削り後後上位を中心に横撫で。脚部縦方向撫で後下位横方向撫で。内面 杯部横撫で後放射状に磨き、横撫では一周して口縁方向に跳ねる。脚部横方向撫で後外反部横撫で。	脚端部欠。
14	土師器甕	+6~23、竈・貯蔵穴埋没土	口径 底径 器高	(22.1) — 23.6+	①軽石、石英 ②普通 ③黒褐色10YR2/2	外面 胴部中位以下縦方向・上位斜方向に刷毛目後胴部中位左方向削り・口縁部横撫で。内面 胴部下半削撫で、上半刷毛目後口縁部横撫で。	口縁部～胴部下位1/4残。
15	土師器甕?	+20~26、埋没土	口径 底径 器高	(20.5) — 10.2+	①軽石、石英、赤褐色 鉱物 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 胴部縦・斜方向に刷毛目後口縁部横撫で、頸部付近に輪積み痕あり。内面 胴部左方向に刷毛目後口縁部横撫で。刷毛目が深く口縁部に残る。	口縁部1/8・胴部上位1/4残。
16	土師器甕	竈-5	口径 底径 器高	(14.1) — 8.8+	①軽石、石英 ②普通 ③灰黄褐10YR6/2	外面 胴部上位左上方削り後胴部最上位上方削り後口縁部横撫で、削りはその後の撫でにより単位不明瞭。内面 横方向削撫で・刷毛目が残る、一部斜方向に口縁部まで撫で、口縁部横撫で一部筒状工具痕・刷毛目残る。	口縁～胴部上位1/4残。
17	土師器甕	+7~9	口径 底径 器高	— — 20.7+	①軽石、乳白色鉱物、 石英 ②普通 ③明黄褐10YR7/6	外面 削り後縦方向に刷毛目後胴部最上位横撫で、横撫での下半が浅く刷毛目が残る。内面 横方向削撫で、胴部最上位及び頸部に輪積み痕あり。	頸部～胴部上位・胴部中位1/2残。
18	土師器壺	+7~9	口径 底径 器高	— 7.7 27.6+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/4	口縁が直に立ち上がった後、強い横撫でにより湾曲して外反する。外面 胴部左方向削り後口縁部横撫で、胴部最下位撫で。内面 胴部下位斜方向削撫で後中位以上横方向削撫で、口縁部横撫で。	口縁部大部分と胴部上半1/2欠。
19	土師器甕	+7	口径 底径 器高	14.3 2.5 14.7	①軽石、石英 ②普通 ③褐7.5YR4/4	底部の意識はあるが丸底に近い。外面 胴部上位縦・斜方向削り後胴部中位左方向削り後胴部下半及び上位左方向削り、口縁部横撫で。内面 主に横方向削撫で、口縁部横撫で。	ほぼ完形。
20	土師器甕	+1~10	口径 底径 器高	13.2 5.1 18.8	①軽石、石英 ②普通 ③暗赤褐5YR3/6	外面 胴部主に左方向削り後縦方向削撫でか、口縁部横撫で、底部削り・工具の角部を使用したか単位が細かい。内面 胴部下位～底部縦方向削り後胴部中位以上横方向削撫で後口縁部横撫で。	胴部一部欠。
21	土師器甕	床面直上、埋没土	口径 底径 器高	— (16.0) 3.6+	①軽石、石英 ②普通 ③暗褐7.5YR3/3	外面 胴部横方向削り、底部削り。内面 胴部左方向削り、底部撫で。	胴部下位～底部外縁1/4残。
22	土師器壺	床面直上~ +8	口径 底径 器高	17.4 — 18.9+	①軽石 ②良好 ③橙7.5YR7/6	外面 体部削り後上半を主に横方向撫で後口縁部丁寧な横撫で。内面 体部横方向撫で・肩部付近に指頭圧痕あり、口縁部丁寧な横撫で頸部付近に和積み痕あり。	口縁部・体部上位1/2・中位1/4残。
23	土師器甕	+16~29、埋没土	口径 底径 器高	— 6.6 12.2+	①黒色鉱物、軽石 ②普通 ③橙5YR6/6	外面 胴部及び底部刷毛目後雑な撫で、胴部最下位削り、器表の摩滅により単位不明瞭。内面 刷毛目、一部に撫で。	胴部下半1/4・底部残。
24	土師器甕	+2~14、竈9~26、埋没土	口径 底径 器高	17.0 7.1 30.9	①軽石 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 胴部下半左方向削り後胴部上半縦方向撫で状の弱い削り後口縁部横撫で、底部削り。内面 胴部下位縦方向削撫で後中位以上横方向削撫で、口縁部横撫で。	口縁部・胴部一部欠。
25	土師器甕	竈+13~22埋没土、貯蔵穴-37	口径 底径 器高	16.3 6.5 27.3	①軽石 ②普通 ③橙7.5YR7/6	胴部中位の器表が一部剥離。外面 胴部上位斜方向撫で後胴部中位縦方向撫で・整形とは別の工具圧痕が粒状又は線状に残る、胴部下位斜方向撫で、口縁部横撫で、底部磨き。内面 削撫で後胴部下位右上方削り、口縁部横撫で。	口縁部と胴部の一部欠。
26	土師器甕	床面直上~ +3	口径 底径 器高	— 8.6 3.6+	①軽石、赤褐色鉱物 ②普通 ③黒褐色10YR3/1	外面 胴部最下位縦方向・下位斜方向削り、底部削り。内面 底部削撫で後胴部下位刷毛目。	胴部下位～底部残。
27	土師器甕	+19	口径 底径 器高	— (7.0) 4.3+	①軽石、乳白色鉱物 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 胴部左方向削り、底部削り。内面 左方向削撫で。	胴部下位～底部1/4残。

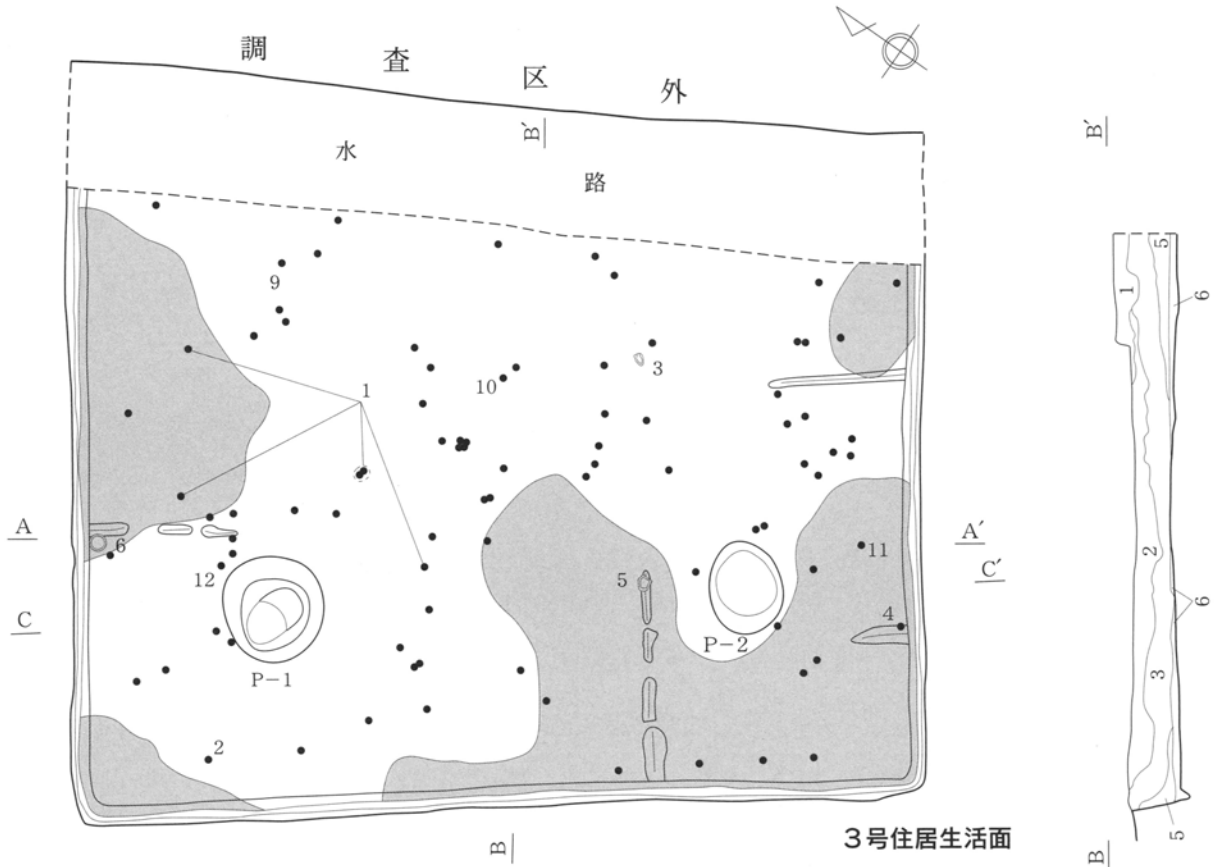
II 検出された遺構と遺物

28	土師器甕	+19、埋没土、甕+1~22	口径 (22.8) 底径 — 器高 13.1+	①石英、軽石、黒色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR7/6	外面 縦方向撫で、胴部最上位縦方向撫で及び横方向撫で、口縁部横撫で。内面 縦方向に筒削り後横方向撫で、胴部最上位以上横撫で。	口縁部1/4・胴部上位3/8残。
29	土師器甕	+1~23、甕+6~22、貯蔵穴-1~-10	口径 15.2 底径 6.0 器高 28.4	①軽石、石英 ②普通 ③赤褐2.5YR4/6	外面 胴下位下又は左方向・胴部中位上方向・胴部上位左上方向に筒削り後口縁部横撫で。内面 胴部横撫で後口縁部横撫で、頸部の一部に輪積み痕あり。	口縁部1/4欠。
30	土師器甕	+15~25、貯蔵穴-10~0	口径 — 底径 — 器高 24.1+	①軽石、黒色鉱物 ②普通 ③赤褐5YR5/6	外面 胴部中位以下右下方に筒削り後胴部上位左上方向に筒削り後頸部横撫で。内面 主に横方向に筒削り後横撫で。	頸部下位~胴部上半1/4・胴部下半1/2残。
31	土師器甕	+2~3、埋没土、甕+1~22	口径 — 底径 7.6 器高 21.3+	①石英、軽石、黒色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR7/6	外面 胴部左方向に筒削り後胴部中位以上縦方向・最下位横方向撫で、頸部横撫で。内面 縦方向に筒削り後横方向撫で、頸部横撫で。	頸部~胴部上半1/4・胴部下半以下1/2残。
32	土師器甕	+13~22、P4埋没土	口径 17.1 底径 7.0 器高 29.2	①軽石 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	胴部全面に斑状に砂が付着。外面 体部筒削り後体部上半を中心に斜方向撫で。撫での単位は不明瞭。後内面横撫で。内面 体部下半斜方向・上半横方向に筒削り後横撫で、口縁部横撫で。	体部中位~下位1/2欠。
33	土師器甕	+4~7、甕+14~22、埋没土	口径 — 底径 — 器高 19.9+	①軽石、乳白色鉱物 ②良好 ③浅黄橙7.5YR8/3	外面 胴部筒削り後横・斜方向撫で。内面 胴部横方向に筒削り後上位縦方向撫で後頸部横方向に筒削り後横撫で。頸部割れ口に輪積み痕あり。	胴部上位3/4・中位1/2残。
34	手捏土器杯	埋没土	口径 (6.4) 底径 — 器高 3.2	①— ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 平滑な撫で。内面 粗い撫でで稜が目立つ。	1/4残。
35	手捏土器杯	+7	口径 (7.0) 底径 (3.8) 器高 3.6	①軽石 ②普通 ③橙5YR6/6	乾燥若しくは焼成による亀裂が顕著。外面 体部~底部不定方向撫で、口縁部揃む。内面 体部~底部縦方向撫で、口縁部揃む。	1/4残。
36	手捏土器甕	+9	口径 2.5 底径 — 器高 4.4	①軽石 ②普通 ③明黄褐10YR5/6	外面 底部付近に筒削り後全面撫で、口縁は揃みにより成形、孔は外面側より竹管状の工具で刺突・管内の粘土が内面側に残る。内面 縦又は横方向撫で。	完形。
37	土製模造品鏡	甕埋没土	径3.8~4.1 器高 1.8	①軽石 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	鏡背は放射状に撫でて平坦にし、鈕は揃み上げて成形する。側面は横方向に撫でる。鏡面は筒削りと撫でて整形、一部砂礫が外れて穴が空く。	完形。
38	土製模造品鏡	埋没土	径3.7~4.1 器高 0.6	①石英 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/3	平面隅丸方形を呈す。鏡背(凹面)は雑な撫でで稜が目立ち、鏡面(凸面)は平滑な撫で。鈕の表現は無いが、形状から鏡を模したものと考える。	端部一部欠。
39	土製品錘	埋没土	長さ 2.0 幅 2.2 孔径 0.6	①軽石、乳白色鉱物 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	扁平な球形を呈する。孔は片側から刺突。器表は撫でて、焼成により亀裂が入る。	完形。
40	土製品紡錘車	甕+1	径 2.8 孔径0.9~1.2 器高 1.2	①— ②良好 ③明黄褐10YR7/6	平面円形で、側面及び上下面はやや平坦に撫でる。孔は両側から穿孔又は調整。	完形。
41	石器磨石	+2	長さ8.4 幅2.8 厚さ2.1 重量83.2 石材 黒色頁岩		断面半円形の平坦面を主に用い、面の中心部に磨面が広がる。	器表一部欠。

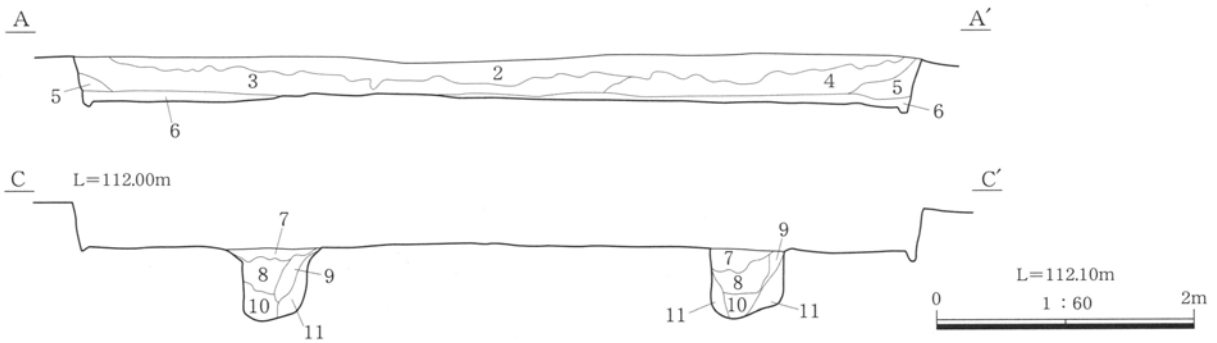
3号住居 (P L. 5・6・19)

位置 B区(X=368~377、Y=507~514) **検出状況** 基本土層2層を除去すると、その下からは基本土層7層が露出。そして、この基本土層7層において平面プランを確認。覆土 As-Cを含む黒褐色土が主体。**規模** 平面では、6.70m×5.0m+を測り、方形を呈する。断面では、確認壁高が0.40m。**面積** 28.70+m² **柱穴** 2箇所検出。P-1は直径84cm、深さ60cm。P-2は直径72cm、深さ55cm。ともに、柱痕は未検出。**壁溝** 床面で幅4~10cmの溝が壁沿いに全周。なお、溝底面からのピット列は未検出。**床面状況** 張床なし。張床と思われた最下層覆土(3号住居覆土6層)は、柱穴を完全に覆い隠している状況から考えて、張床土で

はないと判断。壁と柱穴の間で幅5~18cm、深さ2~7cmの間仕切り溝3条を検出。なお、この間仕切り溝底面からのピット列は未検出。**カマド・貯蔵穴** 調査範囲内では、なし。**屋根構造関連施設** 調査範囲内では、なし。**出土遺物** 炭化物及び焼土が出土。出土分布は層位的には床面直上(3号住居覆土6層)で、平面的には壁と柱穴の間に多く確認。焼失の痕跡と推定。土器は土師器甕・壺・坏等が出土。出土分布は層位的には床面および覆土下層で、平面的には住居全域に分布。床面出土としては、土師器坏(No.2・4・6)・蓋(No.12)がある。**帰属時期** 出土遺物の様相から、古墳時代中期後半と考える。



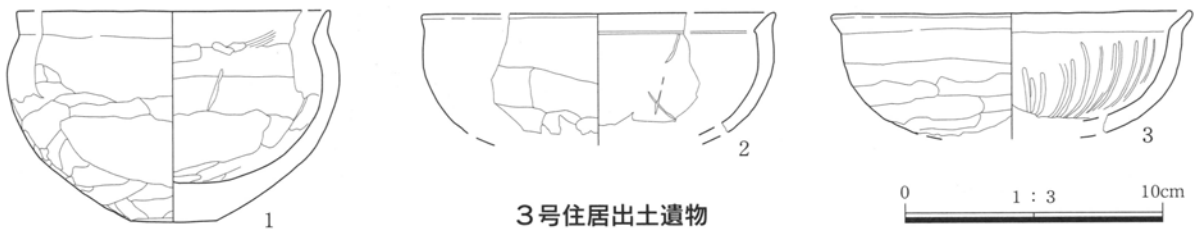
3号住居生活面



3号住居

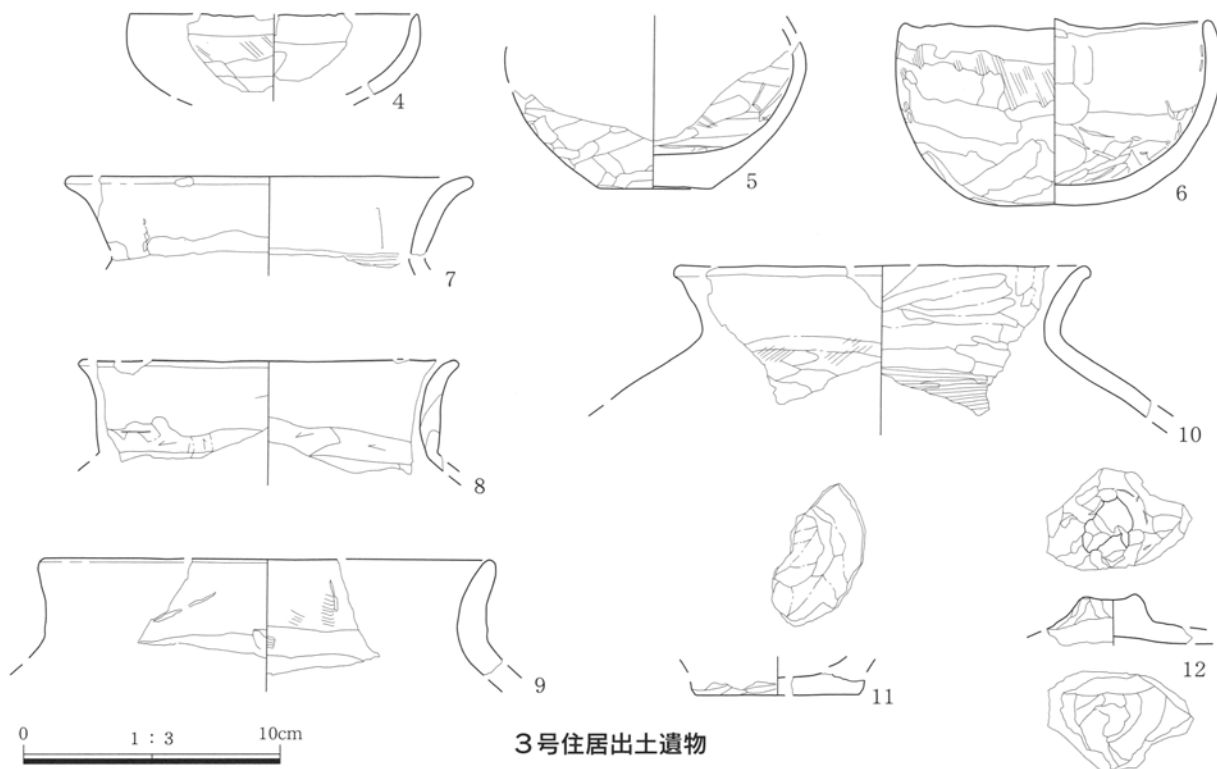
- 1. 黒色砂質土。As-C・FAを多く含む。
- 2. 黒褐色粘質土。As-C・FA・ローム粒を多く含む。焼土粒を僅かに含む。
- 3. 黒褐色粘質土。As-C・FA・焼土粒を僅かに含む。ローム粒を含む。
- 4. にぶい黄褐色粘質土。ローム粒が主体。

- 5. 灰黄褐色粘土。ローム粒を僅かに含む。炭化粒を含む。
- 6. 黒褐色粘質土。焼土粒・炭化粒を含む。
- 7. 黒色粘質土。焼土を含む。
- 8. 黒色砂質土。砂礫を多く含む。
- 9. 褐色砂質土。ローム粒を含む。
- 10. にぶい黄褐色粘質土。ローム粒を多く含む。
- 11. 黄褐色砂質土。ローム粒が主体。黒色土粒を含む。



3号住居出土遺物

II 検出された遺構と遺物



3号住居出土遺物

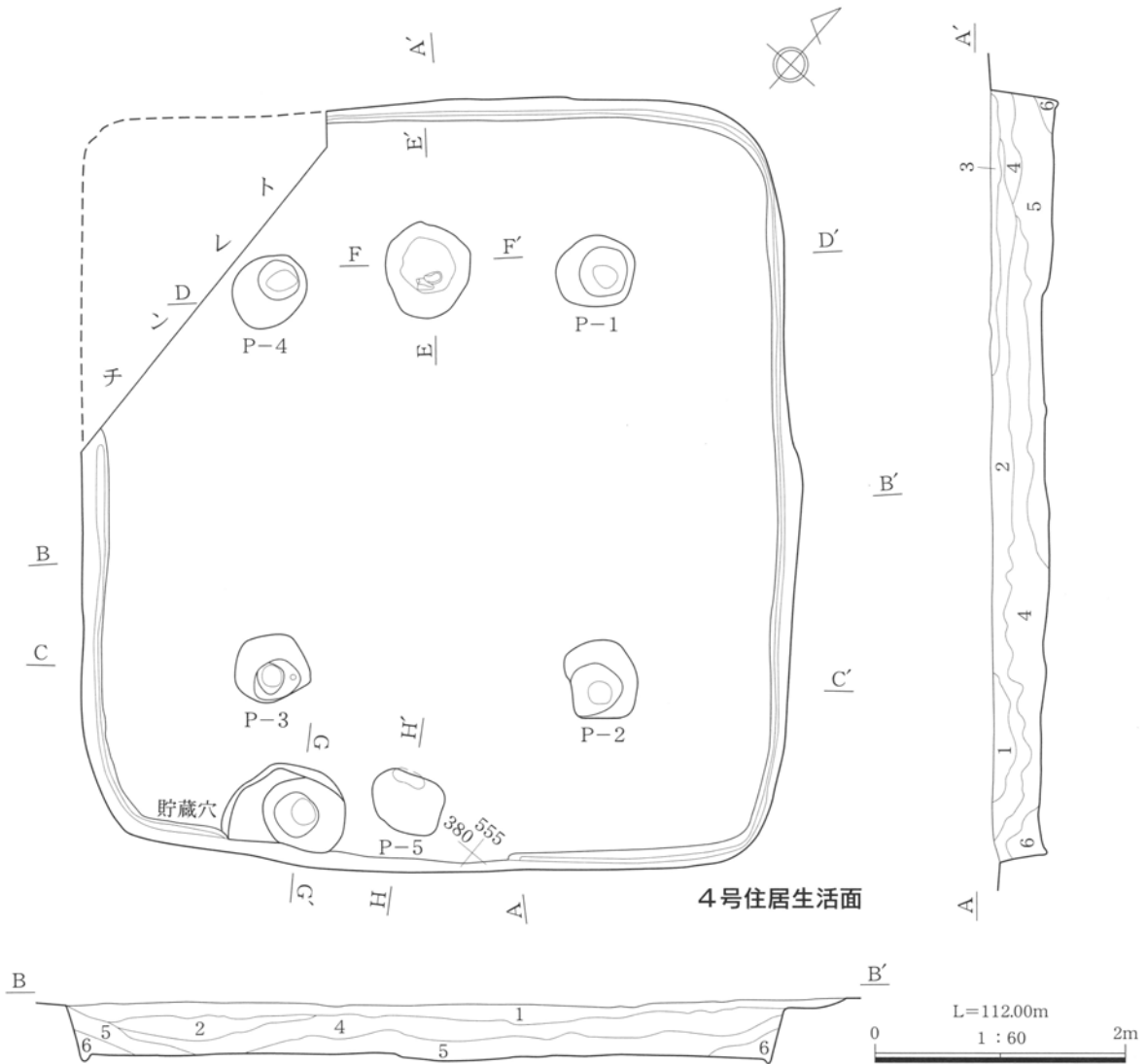
3号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	土師器甕	+1~4	口径 (12.4) 底径 (3.5) 器高 8.3	①軽石、黒色鈷物 ②普通 ③赤褐5YR4/6	外面 胴部左方向篋削り後口縁部~胴部上位横撫で、底部篋削り。内面 胴部以下篋撫で後口縁部~胴部上位横撫で・部分的に刷毛目残る。	胴部中位以上1/4・胴部下位以下1/2残。
2	土師器杯	床面直上、埋没土	口径 (14.0) 底径 - 器高 4.7+	①軽石、黒色鈷物 ②普通 ③赤褐2.5YR4/6	外面 体部右方向篋削り後口縁部~体部上位横撫で。内面 体部篋撫で、口縁部横撫で。	口縁部~体部中位1/6残。
3	土師器杯	+3	口径 (14.2) 底径 - 器高 4.8+	①石英、軽石、赤褐色鈷物 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/8	外面 体部左方向篋削り後口縁部~体部上位横撫で。内面 体部撫で後放射状篋磨き、口縁部横撫で後内斜面横方向篋磨きか。	口縁部~体部上半1/4残。
4	土師器杯	床面直上	口径 (11.3) 底径 - 器高 3.2+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い橙7.5YR7/4	外面 体部左方向篋削り後口縁部横撫で。内面 体部横方向撫で、口縁部横撫で。	口縁部~体部上半1/9残。
5	土師器壺	+8	口径 - 底径 4.4 器高 5.8+	①軽石、石英、黒色・乳白色鈷物 ②普通 ③褐7.5YR4/3	外面 胴部左方向篋削り、底部撫で。内面 主に横方向篋撫で。	胴部下半3/4・底部残。
6	土師器杯	床面直上	口径 12.2 底径 3.8 器高 7.4	①軽石、石英、黒色鈷物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面 体部以下横方向篋削り後口縁部横撫で、体部上位に斜方向の刷毛目は篋削り前と後がある。内面 体部下半以下斜方向単位の細い篋撫で後体部上半横方向篋撫で後口縁部~体部上位横撫で。	完形。
7	土師器甕	埋没土	口径 (16.0) 底径 - 器高 3.6+	①軽石、赤褐色鈷物 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 横撫で、下位に撫で痕があるか前後関係不明。内面 胴部最上位横方向刷毛目、口縁部篋撫で後横撫で。	口縁部1/6残。
8	土師器甕	埋没土	口径 (15.0) 底径 - 器高 4.4+	①軽石 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面 頸部主に左方向撫で後口縁部横撫で。内面 胴部最上位左方向篋撫で後口縁部下位左方向篋撫で後口縁部中位以上横撫で。	口縁部~頸部1/4残。
9	土師器甕	+1	口径 (18.1) 底径 - 器高 4.6+	①軽石、黒色鈷物 ②普通 ③灰黄褐10YR4/2	外面 頸部横方向撫で、口縁部横撫で。内面 胴部横方向撫で、口縁部横方向刷毛目後横撫で。	口縁部~頸部1/10残。
10	土師器甕	+14	口径 (16.5) 底径 - 器高 5.9+	①軽石、石英 ②普通 ③明褐7.5YR5/8	外面 胴部左上方向篋削り後斜方向刷毛目後頸部横方向撫で・口縁部横撫で。内面 胴部左方向篋削り後左方向刷毛目・口縁部横撫で後横方向撫で。	口縁部~胴部上位1/6残。
11	土師器甕	+14	口径 - 底径 (6.4) 器高 0.8+	①石英 ②普通 ③黒褐10YR2/2	外面 胴部横方向篋磨きか、底部篋削り後撫で。内面 底部撫で、剥離により露出した底部粘土板接合面は撫で成形。	底部1/3残。
12	弥生土器? 蓋	床面直上	口径 - 摘み径 2.2 器高 2.0+	①軽石、赤褐色鈷物 ②普通 ③赤褐5YR4/6	外面 撫で、摘みは下方から撫で上げて整形。内面 同心円状の単位で撫で。	摘み付近破片。

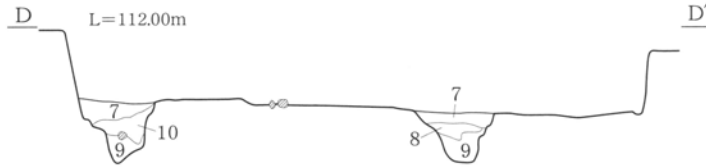
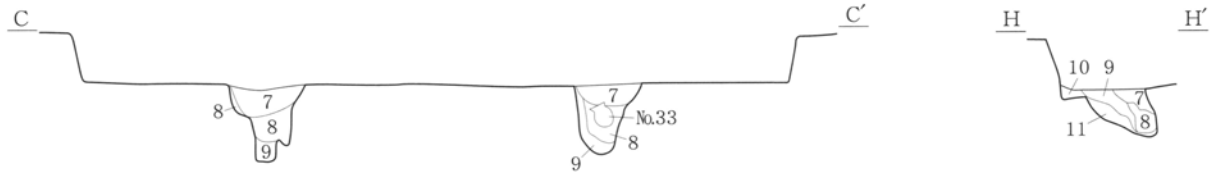
4号住居 (P L. 7~9・19~21)

位置 A区 (X=378~386, Y=553~559) **検出状況** 基本土層の6-1層を除去して、平面プランを確認。**覆土** ローム粒を含む黄褐色土およびぶい黄橙色粘質土が主体。**規模** 平面では、5.80m×6.30mを測り、隅丸方形を呈する。断面では、確認壁高が0.50m。なお、西隅は調査区外のため未調査。**面積** (29.3)m² **柱穴** 5箇所検出。P-1は直径65cm、深さ38cm。P-2は直径70cm、深さ57cm。P-3は直径60cm、深さ62cm。P-4は直径65cm、深さ50cm。P-5は直径60cm、深さ40cm、梯子穴の可能性。全ての柱穴で、柱痕は未検出。**壁溝** 床面検出部においては、南東壁中央付近を除き、ほぼ全周。幅は4~8cm、深さは3~5cm。**床面状況** 張床なし。最下層覆土(4号住居覆土5

層)が断面ではレンズ状堆積を示し、かつ柱穴覆土を完全に覆い隠している状況から考えて、張床土ではないと判断。**貯蔵穴** 1箇所検出。南東壁に接する位置で、貯蔵穴と推定される落ち込みを検出。平面形状は不整形円形を呈し、長軸100cm、短軸65cm、深さ45cm。**炉** 1箇所検出。P-1とP-4の中間位置で検出。平面形状は不整形円形を呈し、長軸75cm、短軸60cm、深さ6cm。焼土のほかは拳大の垂円礫が2個存在。**屋根構造関連施設** 調査範囲内では、なし。**出土遺物** 土器は土師器甕・台付甕・壺・高坏・器台・鉢などが出土。出土分布は層位的には床面および覆土層で、平面的には壁と柱穴の間の範囲に比較的集中。床面遺物としては、甕(No.18・52)、壺(No.43)、高坏(No.13)などがある。また甕(No.33)はP-2の覆土内から出土。**帰属時期** 出土遺物から、古墳時代前期と考える。

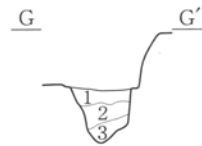
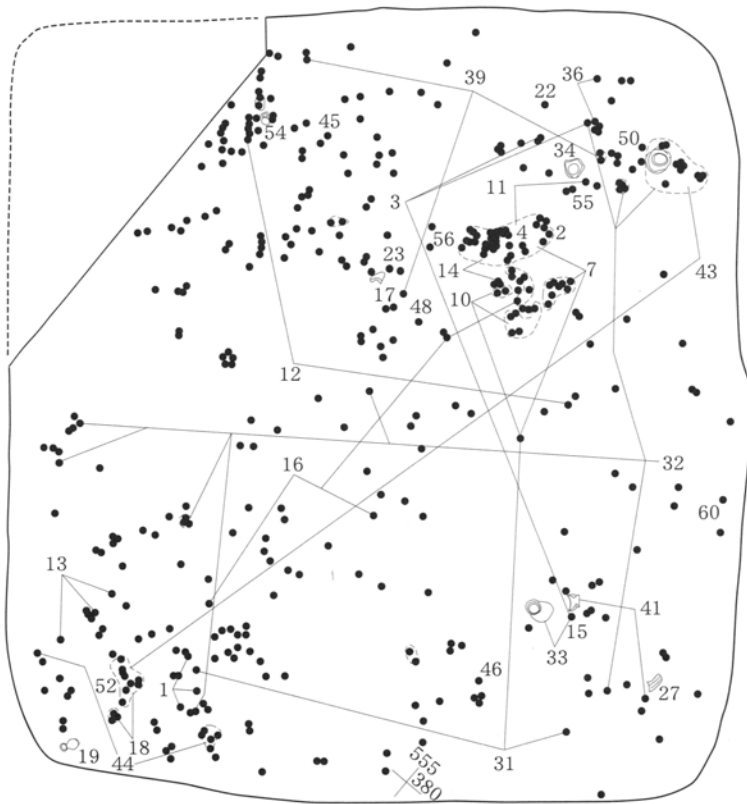


II 検出された遺構と遺物



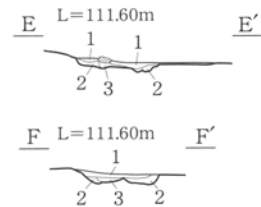
4号住居

1. 黒褐色砂質土。As-Cを含む。
2. 黒褐色土。ローム粒を含む。
3. 黒色粘質土。As-Cを含む。
4. にぶい黄褐色土。ローム粒を多く含む。土器片を含む。
5. にぶい黄褐色粘質土。パミスは含まない。
6. 黒褐色粘質土。As-Cを僅かに含む。
7. 黒褐色砂質土。ローム粒を僅かに含む。
8. 黒色砂質土。砂を多く含む。ローム粒を含む。
9. 黒褐色粘質土。炭化物を含む。
10. 褐色粘質土。ローム粒を多く含む。
11. 褐色砂質土。砂とロームが主体。



4号住居貯蔵穴

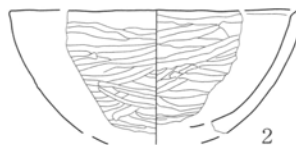
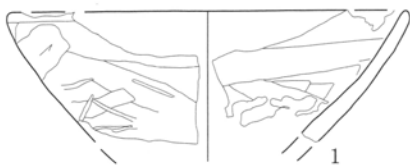
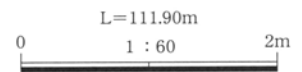
1. 黒褐色粘質土。As-Cを含む。
2. 褐灰色砂質土。砂を多く含む。
3. 黒褐色砂質土。ローム粒を多く含む。



4号住居炉

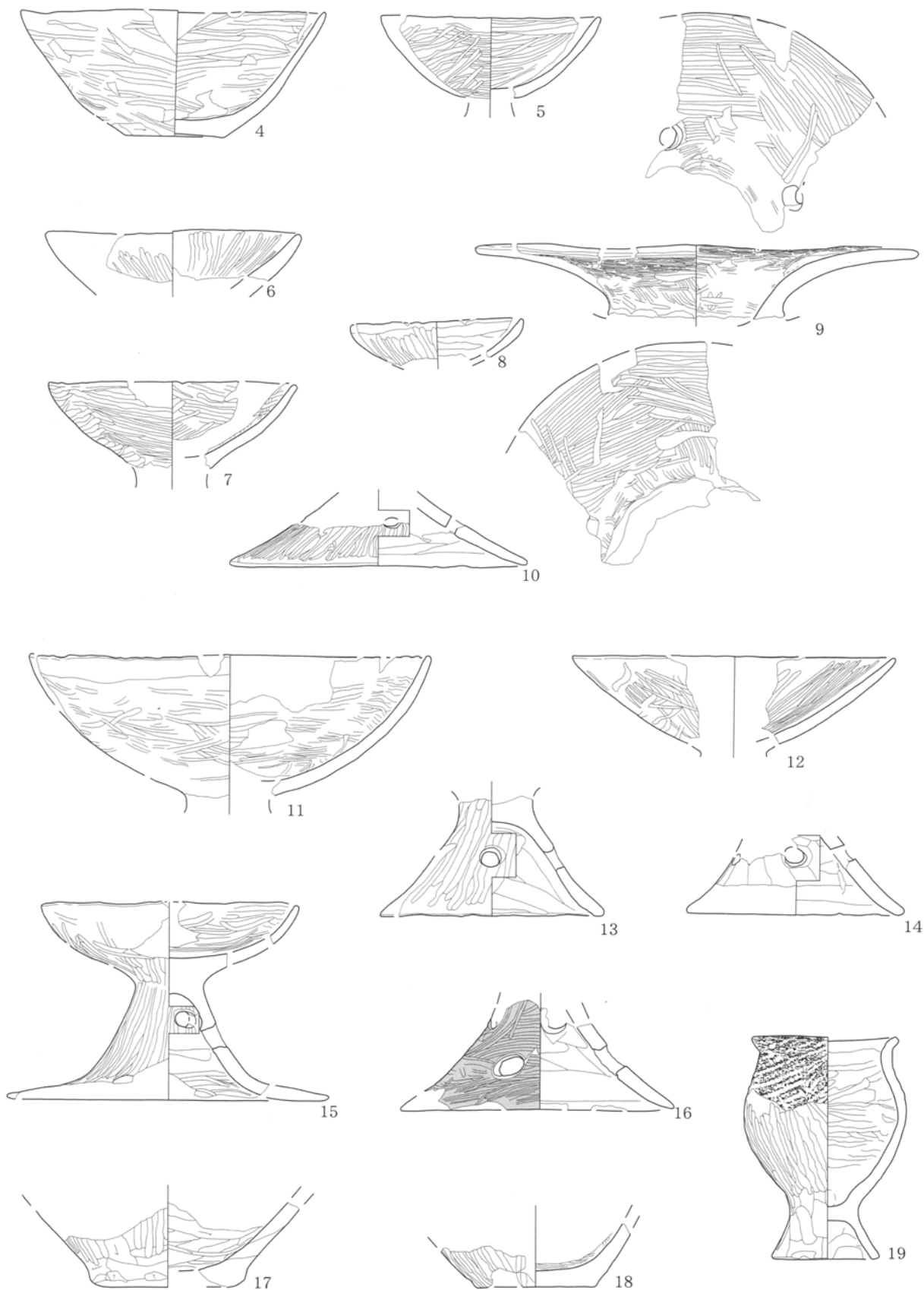
1. 黒色粘質土。焼土ブロックを多く含む。
2. 黒褐色土。ローム粒を多く含む。焼土粒を僅かに含む。
3. 赤褐色土。焼土粒が主体。

4号住居遺物分布



4号住居出土遺物

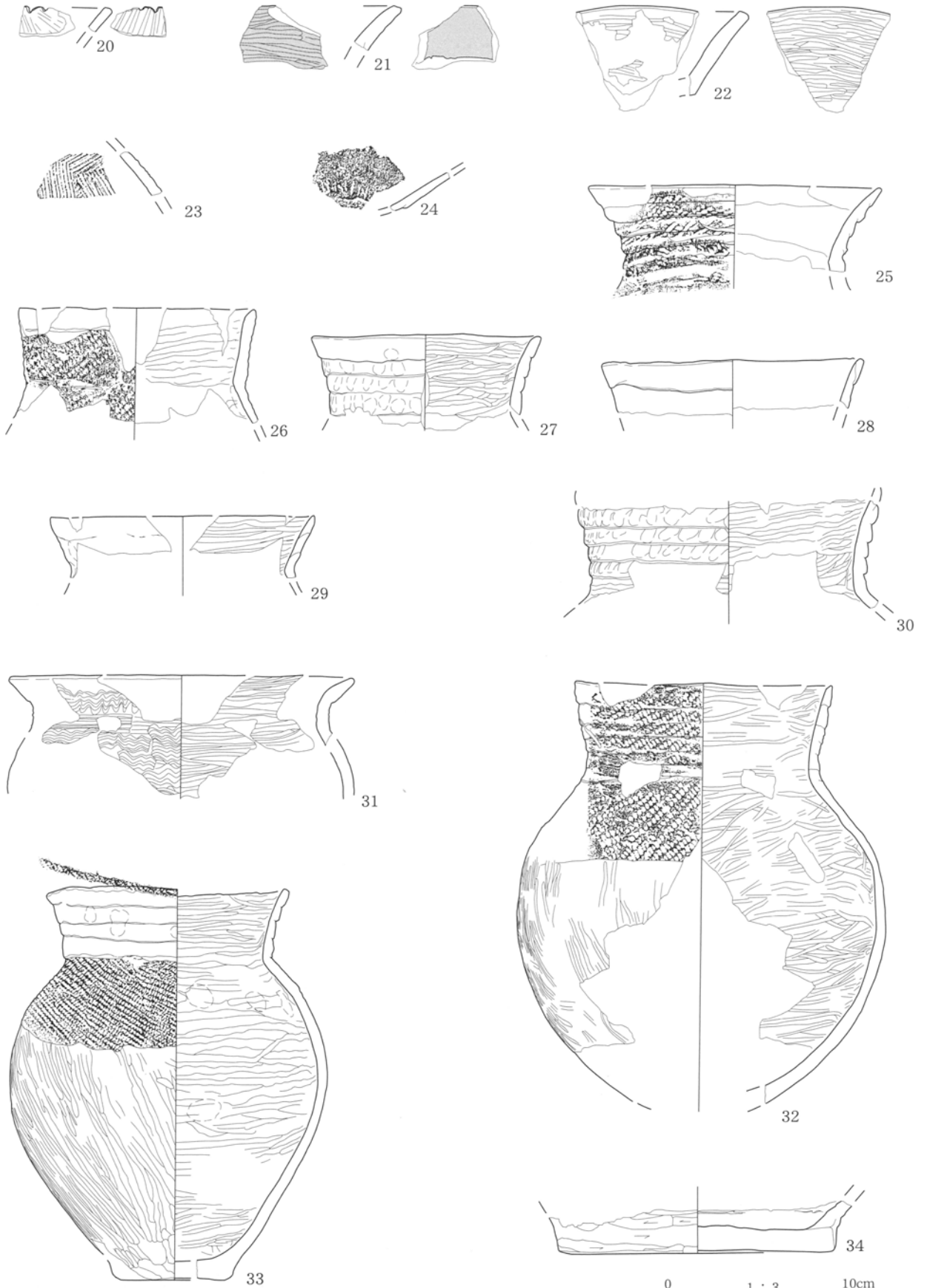




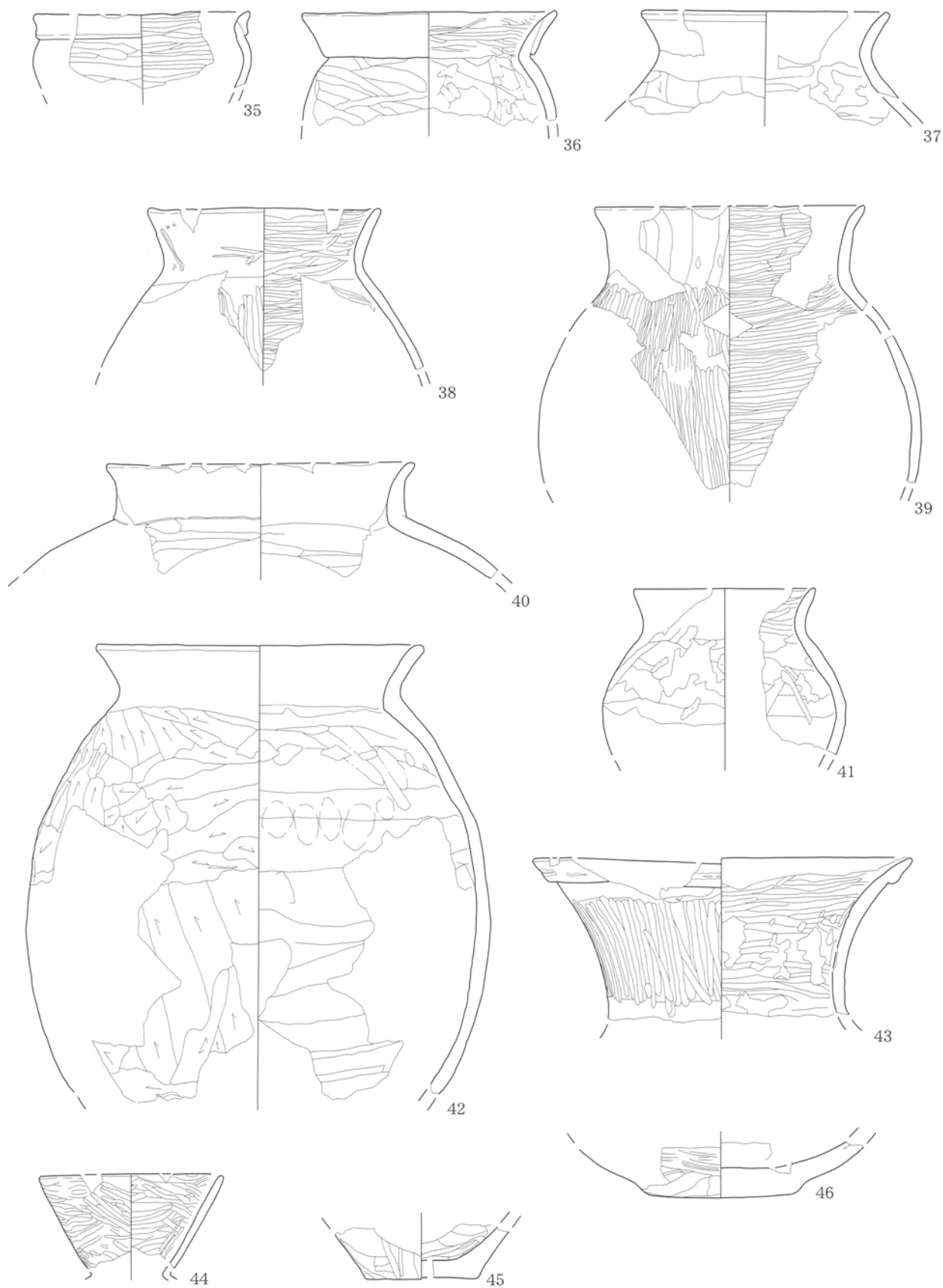
4号住居出土遺物

0 1 : 3 10cm

II 検出された遺構と遺物



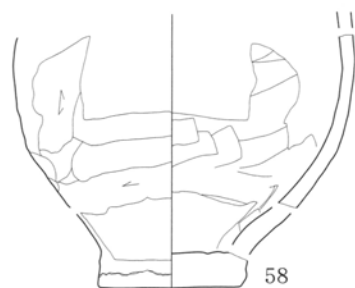
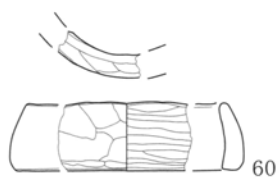
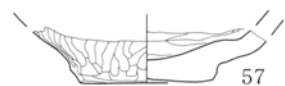
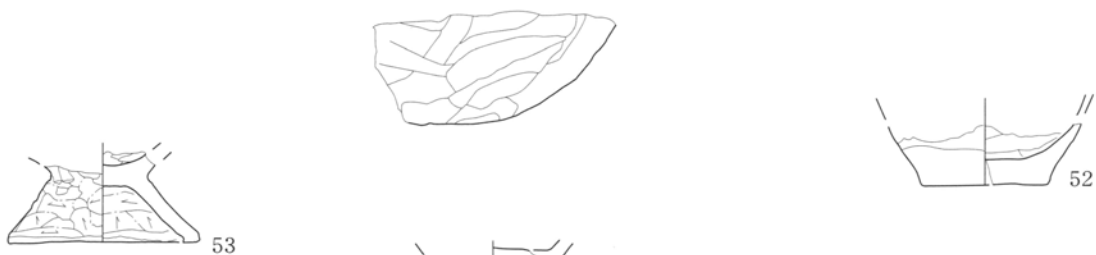
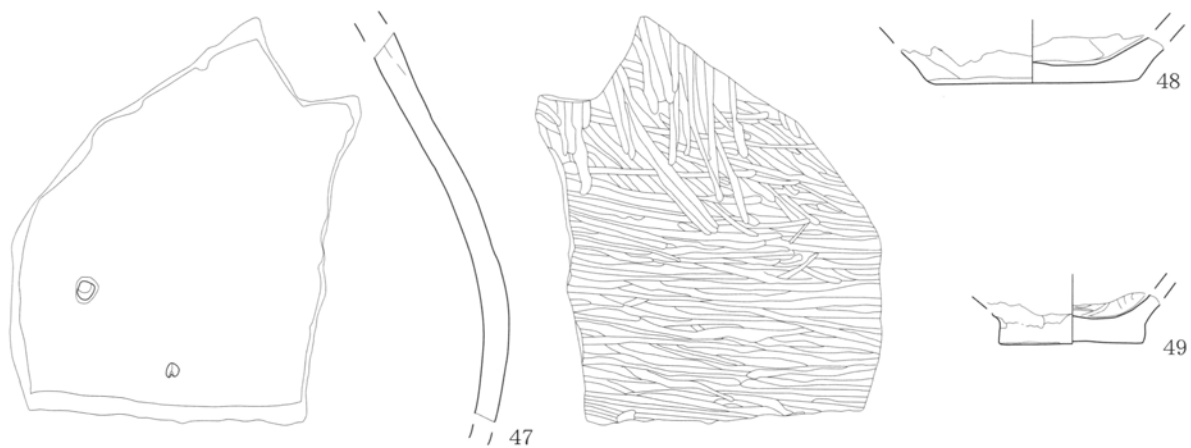
4号住居出土遺物



4号住居出土遺物

0 1 : 3 10cm

II 検出された遺構と遺物



0 1 : 2 5cm

0 1 : 3 10cm

4号住居出土遺物

4号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 鉢?	+1~17	口径 (16.0) 底径 - 器高 5.2+	①軽石、黒色鋳物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/2	器表の剥離が顕著。 外面 体部篋削り後部分的に篋磨き、口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で、体部篋撫で。	口縁部1/8・体 部1/4残。高 杯か。
2	土師器 高杯?	+3	口径 (11.6) 底径 - 器高 4.9+	①軽石、石英 ②普通 ③明赤褐5YR4/6	口縁端部に内斜面をもつ。 外面 横方向篋磨き。 内面 横方向篋磨き。	口縁部~体部 中位1/6残。
3	土師器 鉢	+8~29、埋 没土、P1-1 層	口径 (13.0) 底径 4.2 器高 4.5	①軽石、黒色鋳物 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 体部主に横方向篋削り後横方向篋磨き・口縁部横撫 で、底部篋削り。内面 体部下半縦方向・上半横方向篋磨 き、口縁部横撫で、底部器表が剥離。	口縁部~体部 中位3/4欠。
4	土師器 鉢	+4、埋没土	口径 15.9 底径 5.2 器高 6.6	①軽石、石英 ②良好 ③橙7.5YR6/6	外面 体部篋削り・口縁部横撫で後主に横方向篋磨き、底部 篋削り後篋磨き。 内面 外面より密な横方向篋磨き。	口縁部1/2・体 ~底部一部 欠。
5	土師器 高杯	埋没土	口径 (11.4) 底径 - 器高 4.2+	①赤褐色・白色鋳物、 軽石 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 横方向篋磨き後斜方向篋磨き。 内面 主に底部から口縁部へ横方向篋磨き。	口縁部~体部 1/6残。
6	土師器 高杯	385- 550G6層	口径 13.3 底径 - 器高 2.4+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/3	器表が摩滅。 外面 口縁部横撫で後縦方向篋磨き。 内面 口縁部横撫で後縦方向篋磨き。	杯部上半5/8 残。
7	土師器 高杯	+4~10、6 層、埋没土	口径 13.0 底径 - 器高 4.6+	①軽石、石英 ②良好 ③橙7.5YR6/6	器表が摩滅し、内面は一部剥離。 外面 斜方向篋磨き。 内面 斜方向篋磨き。	杯部3/4残。
8	土師器 器台?	埋没土	口径 (9.0) 底径 - 器高 2.3+	①軽石 ②普通 ③灰黄褐10YR6/2	外面 縦方向篋磨き。 内面 右方向篋削り。	口縁部残。
9	土師器 器台	埋没土、380 -555G6層	口径 (23.1) 底径 - 器高 3.8+	①軽石、赤褐色鋳物 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	結合器台か。円孔2ヶ所残存。底部との接着面が残存し、 撫で状の造作で平坦面を呈し輪積み痕あり。外面 口縁端 部を除いて下半縦方向・上半横方向篋磨き。内面 口縁端 部を除いて横方向篋磨き。	上半部1/4残。
10	土師器 高杯?	+4~10	口径 - 底径 (15.4) 器高 4.0+	①軽石、石英 ②普通 ③橙7.5YR6/6	円孔90°に2ヶ所残存。 外面 縦方向篋磨き。 内面 横方向撫で。	脚下半1/2残。
11	土師器 高杯	+4~12、埋 没土、P1埋 没土	口径 (20.9) 底径 - 器高 7.3+	①白色鋳物、軽石、石 英 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	器表が摩滅。 外面 篋削り後口縁部横撫で、体部横方向篋磨き。 内面 下位斜方向・中位以上横方向篋磨き。	口縁部3/8、 体部3/4残。
12	土師器 高杯	+3~12	口径 (16.6) 底径 - 器高 4.5+	①軽石、石英 ②普通 ③浅黄橙10YR8/3	外面 縦・横方向篋磨き。 内面 縦方向篋磨き。	杯部1/4残。
13	土師器 高杯	床面直上~ +12、埋没 土	口径 - 底径 11.8 器高 6.2+	①軽石、石英 ②普通 ③浅黄橙10YR8/3	外面 縦方向篋磨き。 内面 斜方向・縦方向篋撫でか。	脚1/2残。
14	土師器 高杯?	+4~7	口径 - 底径 11.3 器高 4.1+	①軽石、石英、黒色鋳 物 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	円孔4ヶ所残存。 外面 上方向篋削り後裾部横撫で。 内面 横方向篋撫で後裾部横撫で。	脚部下半残。 器台の可能 性。
15	土師器 高杯	+8、埋没 土、380- 550G5・6層、 380-555G6 層	口径 (13.4) 底径 (16.8) 器高 10.3	①軽石、石英、黒色鋳 物 ②良好 ③浅黄橙10YR8/4	杯部浅く、脚部大きく外反する。円孔互目に上下3箇所す ずつ。外面 杯部篋削り後口縁部横撫で後主に縦方向篋磨 き、脚部篋削り後縦方向篋磨き・裾部横撫で、篋磨きは杯 と脚で単位が分かれるか前後関係不明。内面 杯口縁部横 撫で・体部撫で後横方向篋磨き、脚部篋削り後撫で後中位付 近横方向篋磨き。	杯部1/4・脚部 上半1/2・下半 一部残。
16	土師器 器台?	+2~9、埋 没土、P3- 41	口径 - 底径 14.2 器高 5.9+	①軽石、石英、白色鋳 物 ②普通 ③暗赤褐2.5YR2/4	円孔互目に上下3ヶ所すずつ。 外面 外面密な横方向篋磨き・赤彩。 内面 横・斜方向強い篋撫で。	脚部中位以下 残。
17	土師器 甕	+1	口径 - 底径 (8.0) 器高 4.4+	①軽石、赤褐色鋳物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面 胴部下位縦方向篋削り後胴部最下位横方向篋削り後 胴部下位縦方向粗い篋磨き。 内面 斜方向弱い篋削り・一部細い沈線状。	胴部下位~底 部外縁3/8残。
18	土師器 甕	床面直上~ +1	口径 - 底径 6.2 器高 3.3+	①軽石、黒色・乳白色 鋳物、石英 ②普通 ③橙5YR6/6	外面 篋削り後縦方向篋磨き、底部篋削り。 内面 底部斜方向・胴部横方向篋磨き。	胴部最下位 1/2・底部残。
19	弥生土器 台付甕	+1	口径 7.6 底径 5.6 器高 11.6	①軽石、石英 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	外面 胴部篋削り・台部縦方向篋削り後胴部中位・下位縦 方向篋磨き後胴部上位~口縁部単節の縄文施文後口縁部横 撫で。内面 胴部横方向篋削り後横方向篋磨き、口縁部横 撫で、底部指頭押圧により広げる、台部左方向篋削り、端部 平坦、胴部中位に輪積み痕あり。	完形。
20	弥生土器? ?	埋没土	口径 - 底径 - 器高 1.3+	①赤褐色鋳物 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 縦方向篋磨き。 内面 斜方向刷毛目。口縁部と思われる箇所に焼成後に行 われた斜方向の刻みをもつ。	口縁部破片。
21	土師器 壺	埋没土	口径 - 底径 - 器高 2.4+	①軽石、石英 ②普通 ③地は橙7.5YR6/6	折り返し口縁。口唇部は平坦で中央がやや窪む。 外面 左方向撫で後折り返し部に赤彩。 内面 横方向篋磨き・赤彩。	口縁部破片。

II 検出された遺構と遺物

22	土師器壺	+17	口径 - 底径 - 器高 4.6+	①黒色鈹物 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁端部は平坦となり篋磨き。 外面 横方向密な篋磨き。 内面 器表が剥離、横方向篋磨き。	口縁部破片。 二重(有段)口縁か。
23	弥生土器壺?	+3	口径 - 底径 - 器高 2.3+	①軽石、赤褐色鈹物 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/4	外面 右に開く櫛描き羽状文。 内面 撫で。	肩部破片。
24	土師器? 壺?	埋没土	口径 - 底径 - 器高 1.8+	①軽石、石英、黒色鈹物 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	器厚が薄い。 外面 段をもち、全体を撫で後段上位に縦方向の刻み。 内面 主に横方向篋磨き。	口縁部?破片。
25	弥生土器甕	埋没土、375-555G6層	口径 (15.6) 底径 - 器高 4.5+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/3	外面 5段の輪積み痕を残し、RL縄文を横位に施文後横方向撫で。 内面 中位以下横方向篋撫で、上位横撫で。	口縁部1/4残。
26	弥生土器甕	埋没土	口径 (12.7) 底径 - 器高 6.1+	①黒色鈹物、石英 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/4	外面 口縁部以下単節縄文施文後口縁部横撫で、口縁部に輪積み痕2段あり。 内面 横方向篋磨き、胴部最上位指頭圧痕あり。	口縁~胴部上位3/8残。
27	弥生土器甕	+16	口径 (12.2) 底径 - 器高 5.1+	①軽石、白色鈹物 ②普通 ③暗褐10YR3/4	外面 横方向撫で・輪積み痕最上位段特に強い、上から2段目以下を中心に指頭圧痕残る。 内面 横方向篋磨き。	口縁部1/4・胴部最上位一部残。
28	土師器甕	埋没土、385-550G5層	口径 (14.0) 底径 - 器高 2.7+	①白色鈹物、石英 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	折り返し口縁、又は輪積み痕1段残。 外面 横撫で。 内面 横撫で。	口縁部1/4残。
29	弥生土器甕	埋没土	口径 (14.1) 底径 - 器高 3.3+	①軽石、白色・黒色鈹物、石英 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 横撫で、指頭圧痕・2段の輪積み痕あり。 内面 横方向篋磨き、2段の輪積み痕あり。	口縁部1/4残。
30	弥生土器甕	埋没土	口径 (15.9) 底径 - 器高 5.8+	①軽石、石英、白色・黒色鈹物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面 口縁部最下位刷毛状の工具により横方向3条の沈線、残存する4段の輪積み痕は横方向撫で・指頭圧痕残る。 内面 横方向篋磨き。	口縁端部を除く口縁部3/8・頸部一部残。
31	弥生土器甕	+2~10、380-550G6層	口径 (18.6) 底径 - 器高 6.6+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 口縁部横撫で後波状文、頸部3連止め簾状文後胴部波状文、櫛描は6本単位。 内面 横方向篋磨き。	口縁部1/8・胴部上位1/2残。台付か。
32	弥生土器甕	+1~17、6層、貯蔵穴-14	口径 (13.7) 底径 - 器高 22.3+	①軽石 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 口縁部輪積み6段で胴部縦方向篋磨き後口縁部~胴部上位横位の単節RL縄文後口縁部中位に斜方向の篋状工具による沈線。内面 横方向篋磨き、頸部付近に磨き前の横方向篋削りが残る。	底部を除いて1/3残。
33	弥生土器甕	+8、埋没土、P2-38~-14	口径 12.9 底径 5.6 器高 20.8	①軽石、黒色鈹物 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 縦方向篋磨き後胴部上位から口縁最下位単節RLの縄文施文、口縁部4段の輪積み痕に横撫で後口唇部に胴部と同じ縄文施文、胴部最下位に磨き前の篋削り残る。内面 横方向篋磨き。口縁部外面・胴部内面に指頭圧痕あり。胴部下半に炭化物付着。	胴部最下位1/4・底部3/4欠。
34	土師器甕	+6	口径 - 底径 14.7 器高 2.6+	①石英、軽石 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/3	外面 胴部横方向篋削り、底部不定方向篋削り後撫でか、胴部・底部とも部分的に鈍い赤褐色を呈する。内面 器表の摩滅が顕著、輪積み痕あり。	胴部最下位~底部残。
35	土師器甕	6層、埋没土	口径 (11.3) 底径 - 器高 4.0+	①軽石、黒色鈹物 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/2	折り返し口縁で湾曲し、胴部側接着面に観察できる横方向沈線はヤキヤブリか。外面 口縁端部摘み上げて成形後口縁部横撫で、胴部横方向磨き状の篋撫で。内面 横方向篋磨き。	口縁部1/4・胴部上位1/8残。
36	土師器甕	+16~23	口径 (13.4) 底径 - 器高 5.9+	①軽石、黒色鈹物 ②普通 ③褐7.5YR4/4	折り返し口縁。外面 胴部横方向撫で状の篋削り、口縁部横撫で。内面 横方向篋撫で・指頭圧痕状の撫で、口縁部横撫で後単位の細かい磨き状の撫で。	口縁部~胴部上位1/4残。
37	土師器甕	埋没土	口径 (13.0) 底径 - 器高 5.9+	①軽石、石英 ②普通 ③暗褐7.5YR3/4	外面 胴部縦・横方向撫で後口縁部横撫で。 内面 胴部横方向撫で、口縁部横撫で、胴部に炭化物付着。	胴部上位以上1/4残。
38	土師器甕	埋没土、380-550G6層	口径 (12.2) 底径 - 器高 8.5+	①軽石、黒色鈹物 ②普通 ③褐7.5YR4/6	外面 胴部篋削り後縦方向篋磨き、頸部以上横撫で、篋痕・刷毛目痕が残る。 内面 横方向篋磨き。	口縁部1/2・胴部上位1/4残。
39	土師器甕	+5~22、埋没土	口径 (14.1) 底径 - 器高 14.8+	①軽石、石英、黒色鈹物 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	口縁部が直立した後、端部外反する。外面 口縁部上方篋削りで刷毛目状の細かい擦痕後胴部縦方向篋磨き。 内面 横方向篋磨き。	口縁部1/4・胴部1/8残。
40	土師器甕	埋没土	口径 (16.2) 底径 - 器高 6.1+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/2	外面 胴部横方向撫で、口縁部横撫で、頸部に輪積み痕あり。 内面 胴部横方向撫で、口縁部横撫で。	口縁部~胴部上位1/4残。
41	土師器甕	+13、P2-2	口径 (9.5) 底径 - 器高 8.7+	①軽石 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/3	外面 器表の剥離が顕著、胴部主に横方向篋削り、口縁部横撫で。内面 胴部横方向篋撫で、口縁部単位の細かい磨き状の篋撫で。	口縁部3/8・胴部上位1/2残。
42	土師器甕	6層、380-555G6層	口径 (17.2) 底径 - 器高 23.9+	①軽石、石英 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 胴部下半縦方向・上位横方向・頸部左上方向篋削り後口縁部横撫で。内面 胴部横方向篋撫で、胴部上位に指頭圧痕あり・部分的に縦方向撫で、口縁部横撫で。	口縁部1/4・胴部上半1/3・下半1/8残。
43	弥生土器壺	床面直上~+4	口径 19.9 底径 - 器高 8.4+	①白色鈹物、石英 ②普通 ③浅黄橙10YR8/3	器表が摩滅し、内面は剥離する。外面 横方向撫で後縦方向篋磨き、折り返し口縁中位に扁平な棒状工具?による刺突・一部連続し沈線後横撫で。内面 横方向撫で後横方向篋磨き。	折り返し部3/4を欠いて口縁部残。

44	土師器壺	+2、埋没土、P6-26 ~-12	口径 (9.6) 底径 - 器高 4.9+	①軽石、石英、黒色鉱物 ②良好 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 縦方向に筒削り後斜方向に筒磨き。 内面 主に横方向に筒磨き。	口縁部1/3残。
45	土師器甕	+4	口径 - 底径 (5.8) 器高 2.9+	①赤褐色鉱物 ②普通 ③黒褐色10YR2/2	外面 右方向に筒削り後部分的に縦方向に筒磨き。 内面 主に横方向に撫で、浅黄橙色を呈す。	胴部下位~底部1/4残。
46	土師器甕	+4、埋没土	口径 - 底径 7.7 器高 2.9+	①軽石 ②普通 ③鈍い橙5YR6/4	器表が摩滅。 外面 胴部筒削り後部分的に筒磨き、底部筒削り後撫で。 内面 撫で。	胴部下位~底部1/4残。
47	土師器甕	P4埋没土	口径 - 底径 - 器高 16.8+	①軽石、赤褐色鉱物 ②普通 ③内面明黄褐10YR7/6	外面 胴部横方向に筒磨き後肩部縦方向に筒磨き、全面吸炭により黒色を呈す。内面 横方向に撫で、棒状工具?による用途不明の刺突痕2ヶ所。	肩部~胴部破片。
48	土師器甕	+7	口径 (8.4) 底径 - 器高 1.8+	①軽石、石英 ②普通 ③暗赤褐5YR3/6	外面 右方向に筒削り後筒磨きか・単位不明、底部筒削り後筒磨きか・器表の剥離が顕著。内面 撫で、灰白色を呈す。	胴部下位~底部1/4残。
49	土師器甕	埋没土	口径 5.6 底径 - 器高 2.0+	①軽石、石英 ②普通 ③褐7.5YR4/4	外面 胴部横方向に筒削り後最下位横方向に撫で、底部筒削り。 内面 粗い筒磨き、吸炭により黒色を呈す。	胴部下位~底部3/4残。
50	土師器甕	+26、埋没土	口径 (16.2) 底径 - 器高 9.3+	①軽石、石英 ②普通 ③内面灰白10YR8/2	外面 胴部刷毛目後粗い筒磨き後胴部最下位横方向に筒削り、底部筒削り後撫でか、全面吸炭により黒色を呈す。 内面 横方向に撫でか、器表の摩滅が顕著。	胴部下位~底部外縁1/5残。
51	土師器甕	埋没土	口径 6.5 底径 - 器高 2.3+	①軽石 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	外面 胴部横方向に筒削り、底部筒削り後撫でか。 内面 底部不定方向に筒削り後胴部主に縦方向に筒削り。	胴部最下位~底部1/2残。
52	土師器甕	床面直上、385-550G6層	口径 (5.0) 底径 - 器高 2.3+	①軽石、黒色鉱物、石英 ②普通 ③灰黄褐10YR4/2	外面 胴部右方向に筒削り、底部筒削り。 内面 縦方向・横方向に筒削り。	胴部下位~底部3/8残。
53	土師器台付甕	6層	口径 7.5 底径 - 器高 3.6+	①軽石、石英、乳白色鉱物 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	外面 胴部最下位縦方向に筒削り、台部縦又は横方向に撫で。 内面 縦又は横方向に撫で、台部末端は平坦で歪んだ粘土が内面側にはみ出る。	胴部最下位~台部残。
54	土師器台付甕	+9	口径 7.8 底径 - 器高 6.6+	①軽石、黒色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 胴部縦方向に筒削り後部分的に縦方向に筒磨き、台部縦方向に筒削り後縦方向に筒削り後筒磨き。内面 横方向に筒削り後撫で。台端部は平坦で歪んだ粘土が内側にはみ出す。	胴部最下位・台部1/2残。
55	土師器台付甕	P1-2	口径 - 底径 - 器高 4.1+	①軽石、白色鉱物 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	外面 斜方向に刷毛目。 内面 縦方向に撫で後横方向に強い撫で。	S字甕。底部~台部上半残。
56	土師器台付甕	+8、埋没土	口径 (8.8) 底径 - 器高 2.2+	①軽石、黒色鉱物 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/6	外面 筒削り後縦方向に刷毛目後横方向に撫で。 内面 横方向に筒削り後撫で、端部は平坦で砂が多く付着、端部の内面側にはみ出た粘土を内面側に折り返す。	単口縁か。台部下半1/2残。
57	土師器甕	埋没土	口径 (5.2) 底径 - 器高 2.3+	①軽石 ②普通 ③鈍い黄橙10YR6/4	外面 胴部下方向に筒削り後縦方向に筒磨き、底部筒磨き。 内面 横方向に撫で。	胴部最下位3/4・底部1/2残。
58	土師器甕	6層、埋没土、385-550G6層	口径 - 底径 5.6 器高 10.0+	①軽石、黒色鉱物 ②普通 ③鈍い橙7.5YR7/7	器表が摩滅。外面 主に胴部下位横方向・中位縦方向に筒削り、底部筒削り後撫で。 内面 胴部横方向に筒削り後撫で、底部筒削り後撫で。	胴部中位以下1/4・底部残。
59	土師器鉢? ミニチュア	埋没土	口径 (3.8) 底径 - 器高 2.9+	①軽石、石英、黒色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 下方向に筒削り。 内面 左方向に筒削り。	体部下位1/4・底部1/2残。
60	土師器器台?	+7	口径 (7.9) 底径 (8.8) 器高 2.7	①軽石、石英 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	内外面とも内湾し、底面は平坦。 外面 左方向に筒削り。 内面 横方向に筒磨き。底面は撫でか。	破片。

5号住居 (P.L. 9~11・22)

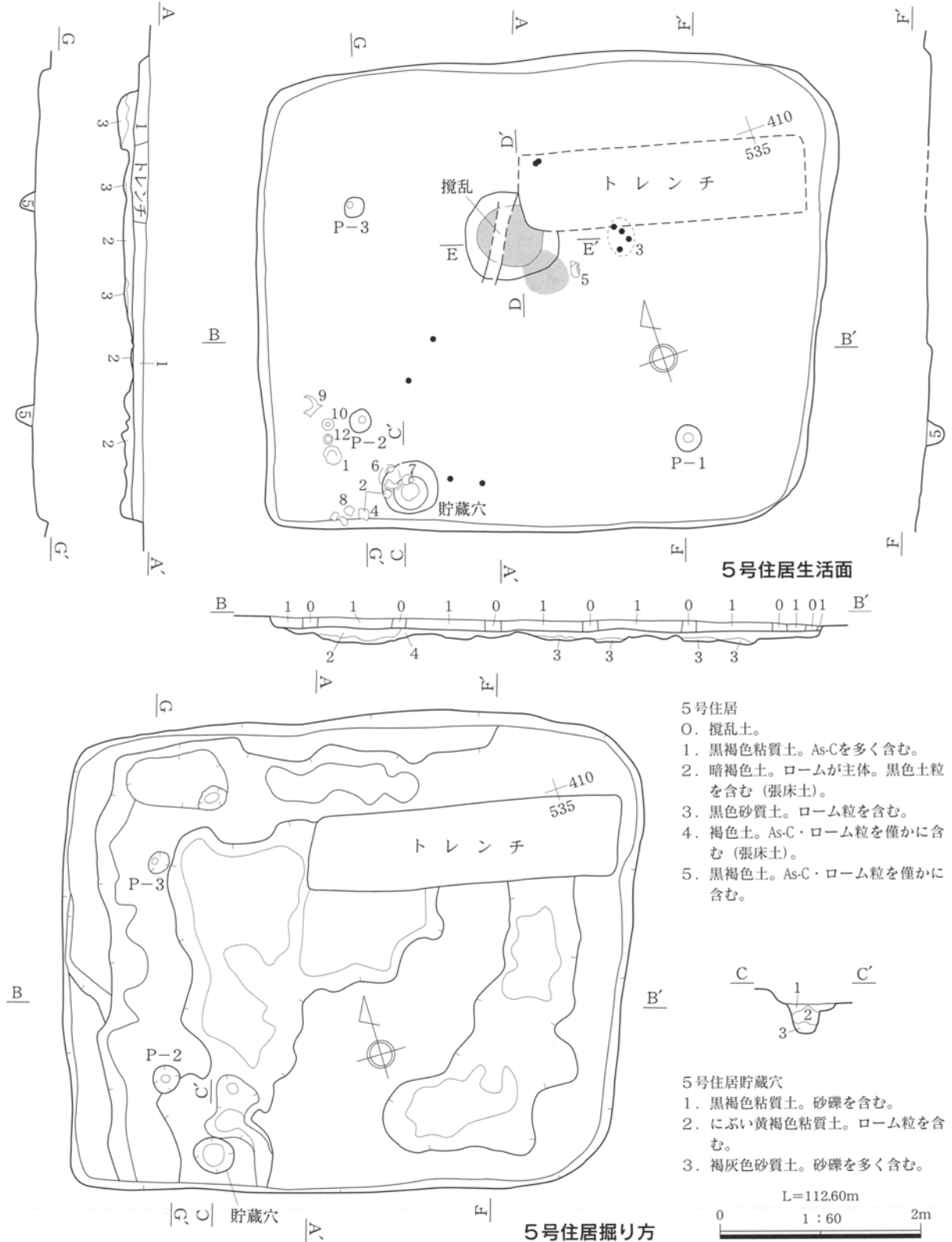
位置 A区 (X=404~411, Y=534~540) **検出状況** 基本土層の5層を除去して、平面プランを確認。
覆土 As-Cを含む黒褐色粘質土が主体。**規模** 平面では、5.70m×4.80mを測り、方形を呈する。
断面では、確認壁高が0.12m。**面積** 24.9㎡ **柱穴** 3箇所検出。P-1は直径26cm、深さ15cm。P-2は直径25cm、深さ16cm。P-3は直径22cm、深さ18cm。いずれの柱穴も、柱痕は未検出。なお、ほか1

箇所が試掘トレンチ内に存在したと推定。**壁溝** なし。**床面状況** 張床あり。ロームを多く含む暗褐色土 (5号住居土層断面での2層) とAs-C・ロームを含む褐色土 (5号住居土層断面での4層) で形成。**炉** 1箇所検出。住居中央やや北寄りの位置で検出。平面形状は不整円形を呈し、長軸82cm、短軸80cm、深さ11cm。焼土のみが存在。**貯蔵穴** 1箇所検出。南西隅の南壁に接する位置で検出。平面形状は円形を呈し、長軸55cm、短軸50cm、深さ

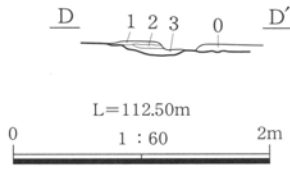
II 検出された遺構と遺物

30cm。屋根構造関連施設 検出部では、なし。出土遺物 土器は土師器甕・壺・鉢・片口が出土。出土分布は層位的には床面およびその直上で、平面的には貯蔵穴および炉の周辺に集中。床面遺物として

は、甕 (No.4・8・9)、壺 (No.2)、鉢 (No.1) がある。また甕 (No.7) は貯蔵穴の覆土内から出土。帰属時期 出土遺物から、古墳時代前期と考える。

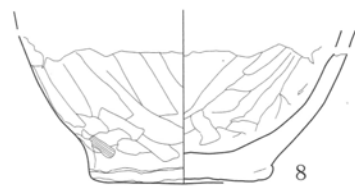
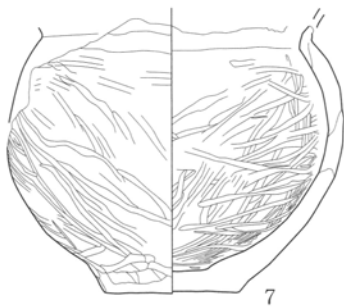
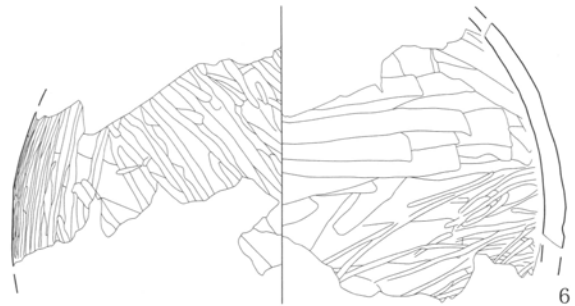
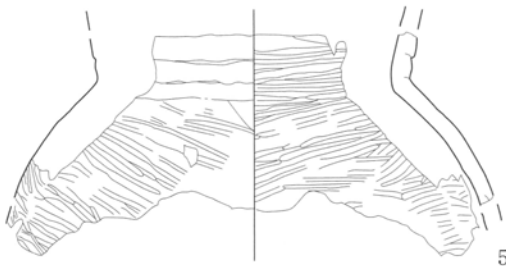
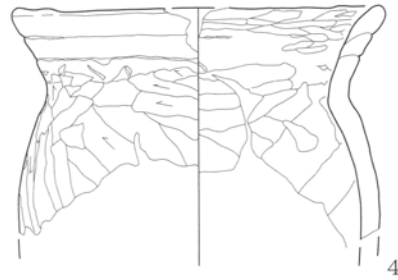
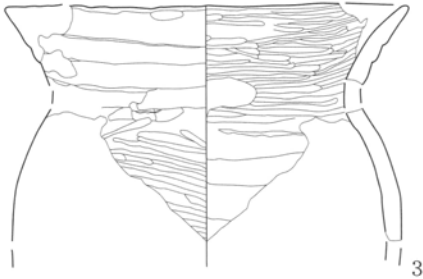
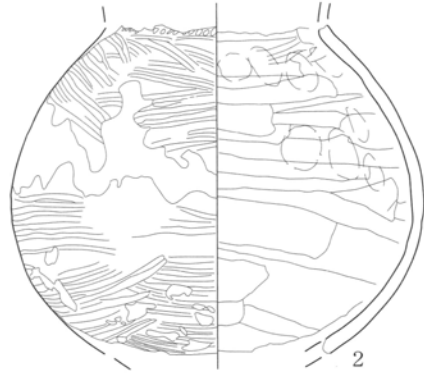
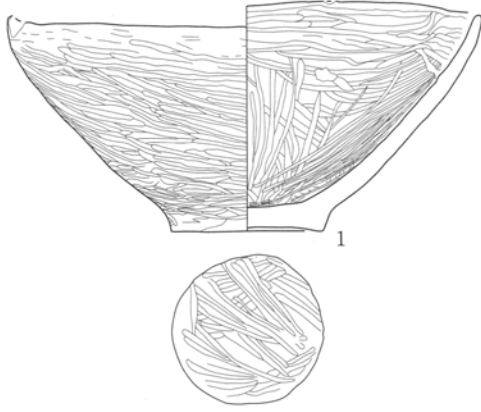


1. 住居



5号住居炉

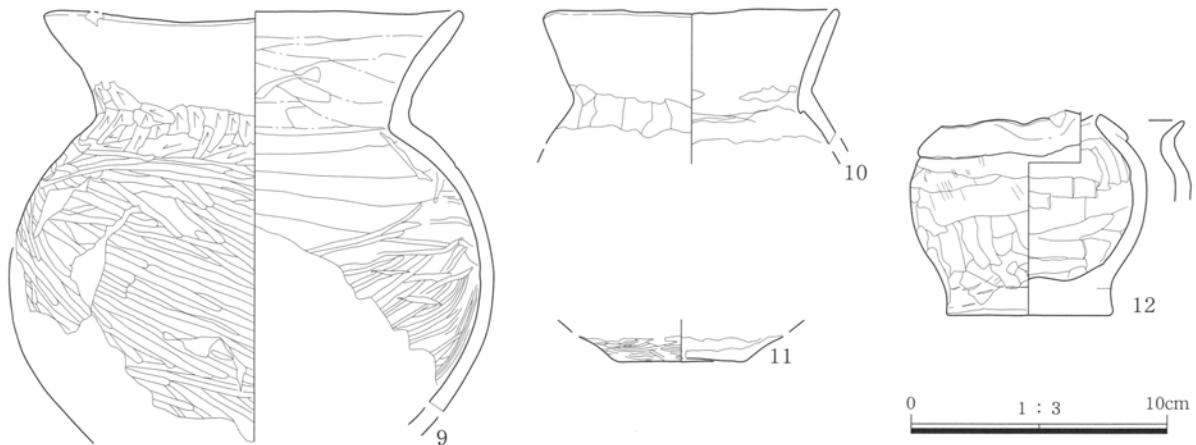
- 0. 攪乱土。
- 1. 暗褐色土。焼土ブロックを多く含む。
- 2. にぶい黄褐色土。焼土・炭化粒を含む。
- 3. 赤褐色土。焼土が主体。



5号住居出土遺物



II 検出された遺構と遺物



5号住居出土遺物

5号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態備考
1	土師器鉢	床面直上	口径 18.7 底径 6.0 器高 9.0	①石英 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	外面 篋削り後横方向篋磨き、口縁部に篋削りに因るか刷毛目状の擦痕残る、底部篋削り後篋磨き。 内面 主に上半横方向・下半縦方向篋磨き。	口縁部1/3欠。
2	土師器壺	床面直上～+4、貯蔵穴-3	口径 - 底径 - 器高 12.8+	①軽石、石英、黒色鉍物 ②普通 ③暗褐7.5YR3/3	外面 器表の剥離が顕著、胴部横方向篋磨き、頸部左斜め方向から刺突。 内面 胴部左方向篋撫で・指頭圧痕あり、口縁部篋磨き。	頸部1/4・胴部1/3残。
3	弥生土器甕	+1	口径 16.0 底径 - 器高 9.3+	①軽石、石英、黒色鉍物 ②普通 ③黒褐10YR2/3	外面 輪積み4段だが最下段は撫でられて輪積み痕はわずかに残存、胴部縦方向篋削り後横方向篋磨き、口縁部横撫で。内面 胴部横方向撫で、口縁部横方向篋磨き。	口縁部1/4・胴部上位1/8残。
4	弥生土器甕	床面直上	口径 14.8 底径 - 器高 9.2+	①軽石 ②普通 ③鈍い黄橙10YR	外面 胴部斜方向・胴部～頸部斜・縦方向篋削り、口縁部輪積み3段・横方向撫で。内面 胴部斜方向篋撫で、口縁部横方向撫で後部分的に単位の細かい篋撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
5	弥生土器甕?	+3、埋没土	口径 - 底径 - 器高 8.7+	①軽石、石英、黒色鉍物 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	口縁部輪積み2段残存。 外面 胴部斜方向篋削り後斜方向篋磨き頸部以上横方向撫で。内面 横方向篋撫で後横方向篋磨き。	口縁部下半1/8・胴部上位1/3残。
6	土師器甕	+3	口径 - 底径 - 器高 10.7+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 斜方向篋削り後斜方向やや粗い篋磨き。内面 胴部下半主に左方向篋撫で後斜方向篋磨き、上半左上方向篋撫で。	胴部中位残。
7	土師器甕	貯蔵穴-4	口径 - 底径 5.4 器高 10.5+	①軽石、石英、黒色鉍物 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	外面 篋削り後斜方向篋磨き、部分的に刷毛目状の擦痕が残る。内面 胴部以下撫で後縦方向篋磨き後横方向篋磨き、口縁部撫で、底部と胴部の境及び胴部に輪積み痕あり。	口縁部～胴部上半3/4欠。
8	土師器甕	床面直上、埋没土	口径 - 底径 7.1 器高 5.8+	①石英、軽石、黒色鉍物 ②普通 ③鈍い赤褐5YR5/4	外面 胴部最下位横方向撫で後胴部左上方向篋削り・一部刷毛目状擦痕、底部蛇の目状に中央が浅く窪み全面に砂付着。内面 胴部最下位以下横方向篋撫で後胴部斜方向篋撫で。	胴部下位1/2・底部3/4残。
9	土師器甕	床面直上	口径 16.4 底径 - 器高 16.9+	①軽石、石英 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	外面 胴部横方向・頸部以上斜方向篋削り後胴部斜方向篋磨き・口縁部横撫で、頸部付近に篋削りが残る。内面 胴部横方向篋撫で後下半を中心に斜方向篋磨き、口縁部横方向撫で。	口縁部・胴部3/4残。
10	土師器甕	+2	口径 11.7 底径 - 器高 5.3+	①石英、軽石、黒色鉍物 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/3	外面 胴部下方向篋削り後口縁部横撫で。 内面 胴部横方向篋撫で後口縁部横方向撫で、胴部上位及び頸部に輪積み痕あり。	口縁部～胴部上位残。
11	土師器甕?	埋没土	口径 (4.8) 底径 - 器高 1.0+	①軽石、石英 ②普通 ③褐7.5YR4/3	外面 胴部篋削り後横方向篋磨き、底部篋削り後篋磨き。 内面 器表が剥離。	胴部下位～底部1/3残。壺の可能性。
12	弥生土器片口	+5	口径 6.2 底径 6.5 器高 8.0	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/3	外面 胴部篋削り後撫で又は弱い篋削り後折り返し口縁～胴部上位横撫で、底部篋削り後撫で。内面 胴部以下左方向篋撫で後内斜面を中心に横撫で。	完形。

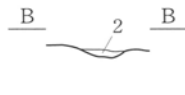
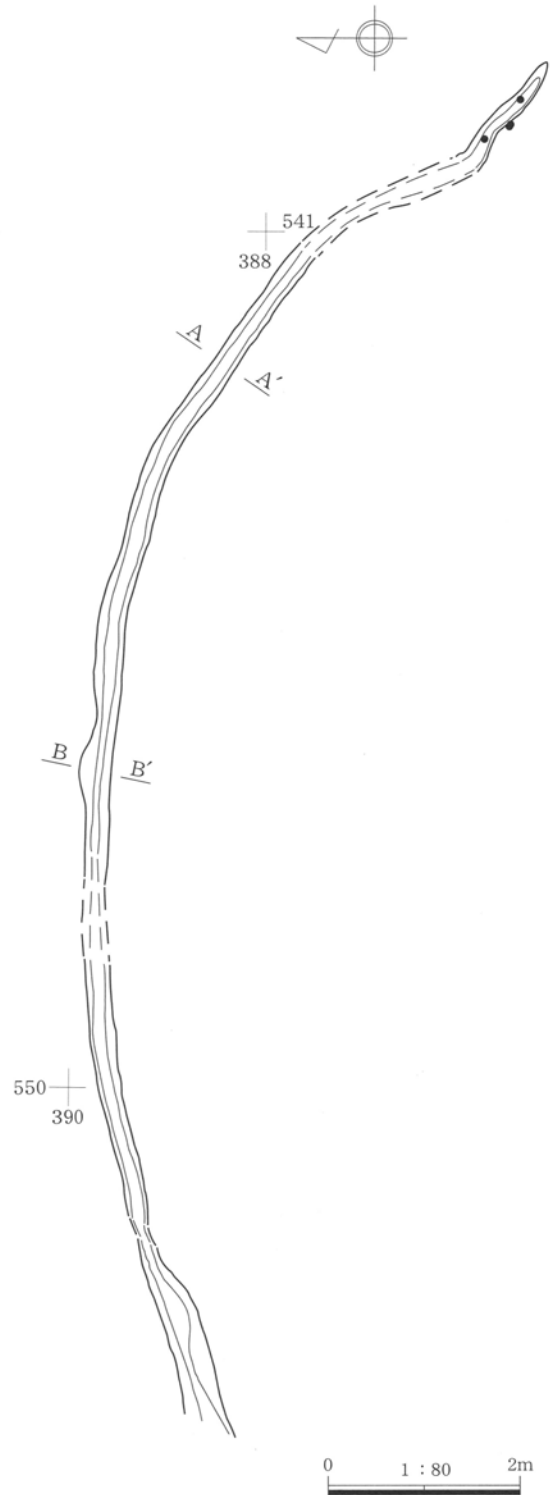
2. 溝

1号溝 (P.L. 14・22)

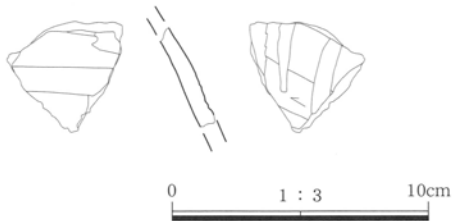
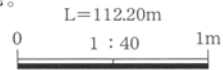
位置 A・B区 (X=384~389、Y=539~553)

検出状況 基本土層5層を除去して、平面プランを確認した。遺構は基本土層6-1層を掘りこんでいる。覆土 FAおよび砂礫を含む灰褐色土を主体とする。As-Cも僅かに混入するが、本遺構における基盤層(基本土層6-1層)に含まれたパミスが混入したものとおもわれる。規模 (平面) 長さ16.30m 幅0.15~0.42m:東西方向に弧状に走行。

(断面) 深さ0.10~0.18m: 椀形 底面 東から西への下り勾配。出土遺物 縄文時代の可能性のある土器片(No.1)、土師器小片などが出土した。他遺構との新旧関係 1号土坑→1号溝 帰属時期 古墳時代後期~平安時代 (FA降下以降からAs-B降下以前)。その根拠は、(1)基本土層4層ではその存在が確認できず、(2)基本土層5層の除去によってその存在が確認され、(3)覆土にFAを含む灰褐色土が存在するという3点。



- 1号溝
 1. 灰黄褐色粘質土。
 2. 灰褐色砂質土。FAおよび砂礫を含む。



1号溝出土遺物

1号溝

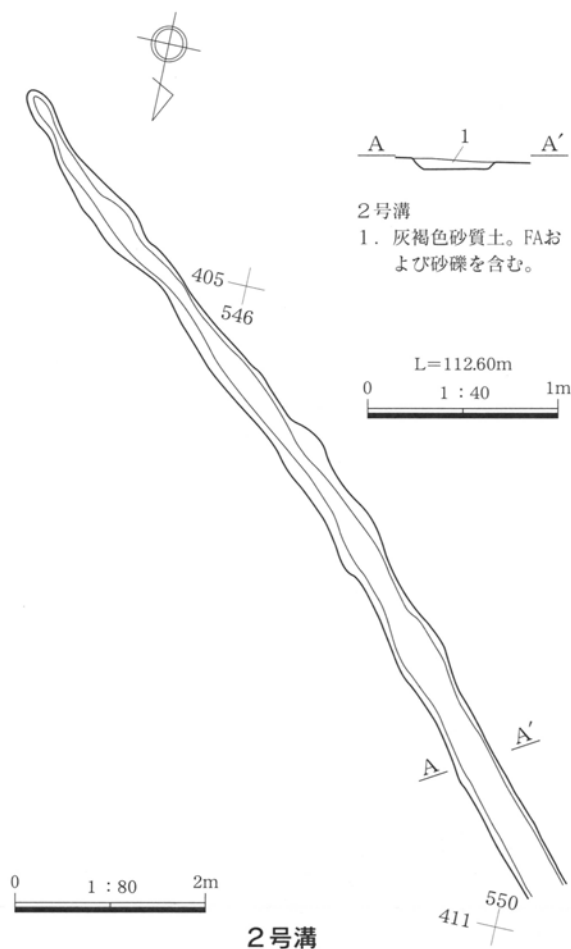
1号溝出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	?	埋没土	口径 - 底径 - 器高 4.0+	①石英 ②やや軟質 ③暗褐10YR3/4	外面 左上方向篋削り後暗赤褐色の物質が縦方向帯状に附着するが人為か不明。内面 横方向篋撫でか。縄文晩期~弥生か。器種不明。	胴部破片。

II 検出された遺構と遺物

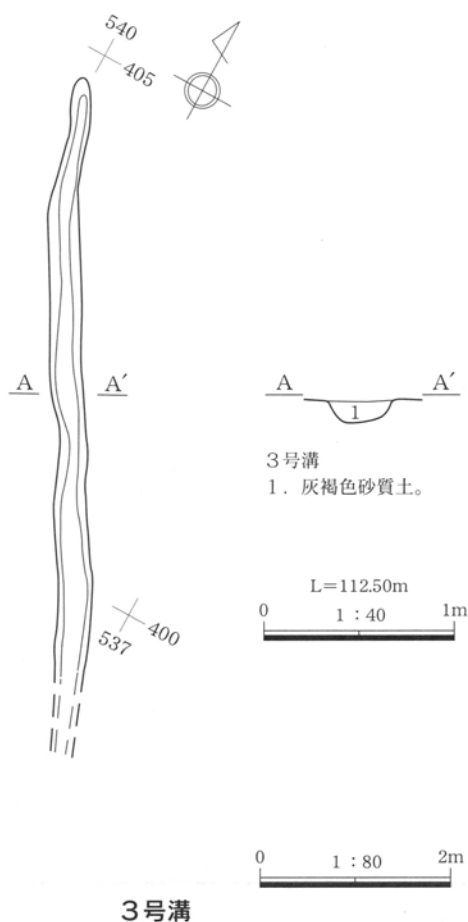
2号溝 (P L. 14・22)

位置 A区 (X=404~410, Y=543~551) **検出状況** 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の5層が露出する状況にある中、この基本土層5層において平面プランを確認した。**覆土** FAおよび砂礫を含む灰褐色土を主体とする。As-Cも僅かに混入するが、本遺構における基盤層(基本土層6-1層)に含まれたパミスが混入したものとおもわれる。**規模** (平面) 長さ10.05m 幅0.12~0.52m:北西~南東方向に直行。(断面) 深さ0.05~0.13m:台形 **底面** 北西から南東への下り勾配。**出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 古墳時代後期~平安時代 (FA降下以降からAs-B降下以前)。その根拠は、(1) 基本土層5層を掘りこむ状態で検出され、(2) 覆土にFAを含む灰褐色土が存在するという2点。



3号溝 (P L. 14)

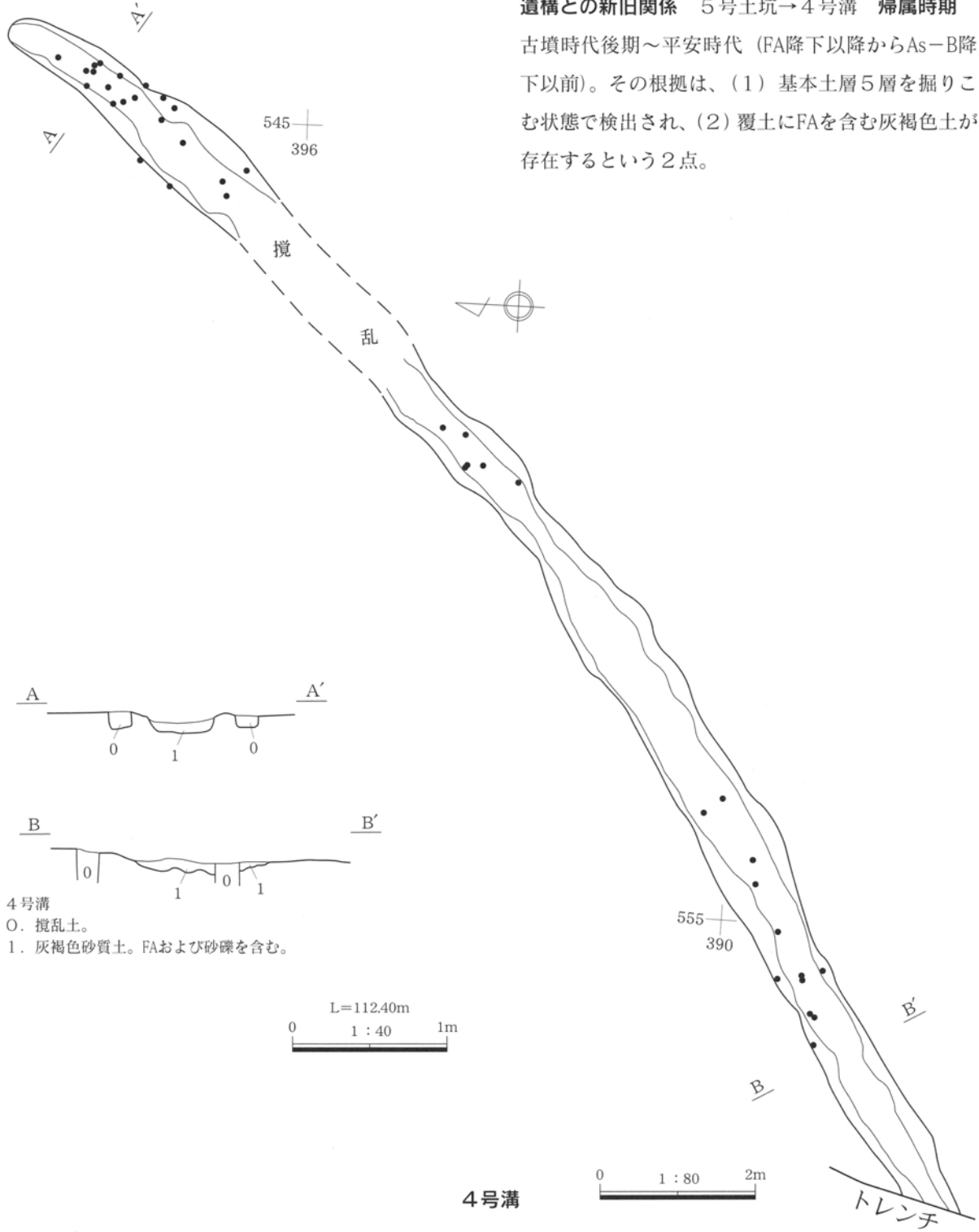
位置 A区 (X=398~404, Y=537~540) **検出状況** 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の5層が露出する状況にある中、この基本土層5層において平面プランを確認した。**覆土** 砂礫を多く含む灰褐色土を主体とする。As-CおよびFAも僅かに混入するが、本遺構における基盤層(基本土層6-1層)に含まれたパミスが混入したものとおもわれる。**規模** (平面) 長さ6.45m 幅0.20~0.35m:北西~南東方向に直行。(断面) 深さ0.08~0.14m:椀形 **底面** 北西から南東への下り勾配。**出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 古墳時代後期~平安時代 (FA降下以降からAs-B降下以前)。その根拠は、(1) 基本土層5層を掘りこむ状態で検出され、(2) 覆土にFAを含む灰褐色土が存在するという2点。



4号溝 (P L. 15)

位置 A区 (X=386~399, Y=543~559) **検出状況** 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の5層が露出する状況にある中、この基本土層5層において平面プランを確認した。**覆土** FAおよび砂礫を含む灰褐色土を主体とする。As-Cも

僅かに混入するが、本遺構における基盤層(基本土層6-1層)に含まれたパミスが混入したものとおもわれる。**規模** (平面) 長さ19.40m 幅0.48~1.03m:北東~南西方向にほぼ直行。(断面) 深さ0.05~0.16m:台形 **底面** 北東から南西への下り勾配。**出土遺物** 土師器小片などが出土した。**他遺構との新旧関係** 5号土坑→4号溝 **帰属時期** 古墳時代後期~平安時代 (FA降下以降からAs-B降下以前)。その根拠は、(1)基本土層5層を掘りこむ状態で検出され、(2)覆土にFAを含む灰褐色土が存在するという2点。



4号溝
0. 攪乱土。
1. 灰褐色砂質土。FAおよび砂礫を含む。

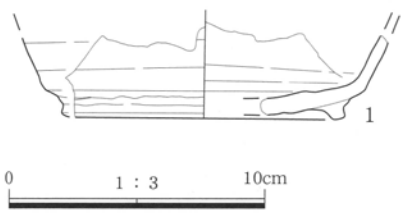
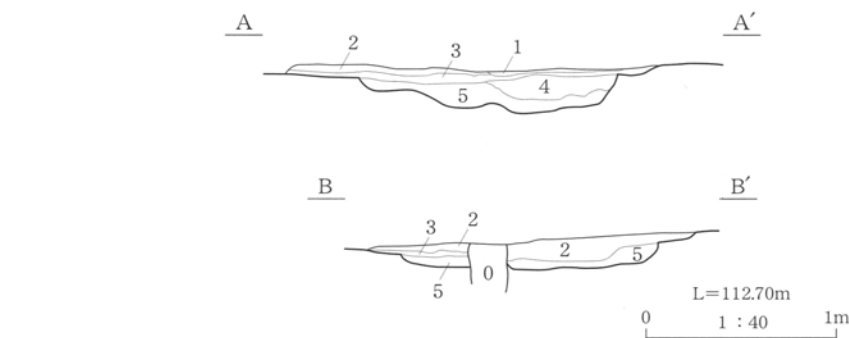
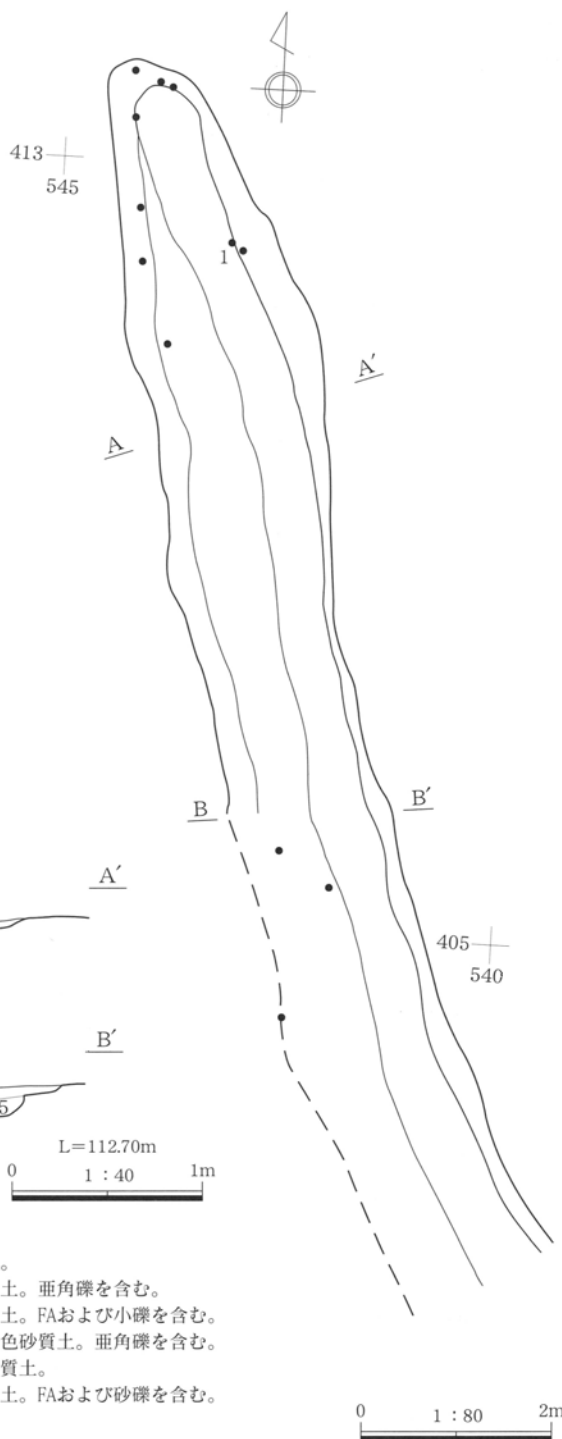
4号溝

II 検出された遺構と遺物

5号溝 (P.L. 15・22)

位置 A区 (X=401~414, Y=539~544) 検出状

況 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の5層が露出する状況にある中、この基本土層5層において平面プランを確認した。覆土 FAおよび砂礫を含む灰褐色土を主体とする。As-Cも僅かに混入するが、本遺構における基盤層(基本土層6-1層)に含まれたパミスが混入したものとおもわれる。規模(平面)長さ13.65m幅0.85~2.00m:北北西~南南東方向に直行。(断面)深さ0.15~0.25m:台形 底面 北北西から南南東への下り勾配。出土遺物 須恵器杯片(No.1)、土師器小片、縄文土器片(P.55参照)などが出土した。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 古墳時代後期~平安時代(FA降下以降からAs-B降下以前。その根拠は、(1)基本土層5層を掘りこむ状態で検出され、(2)覆土にFAを含む灰褐色土が存在するという2点。



5号溝出土遺物

5号溝

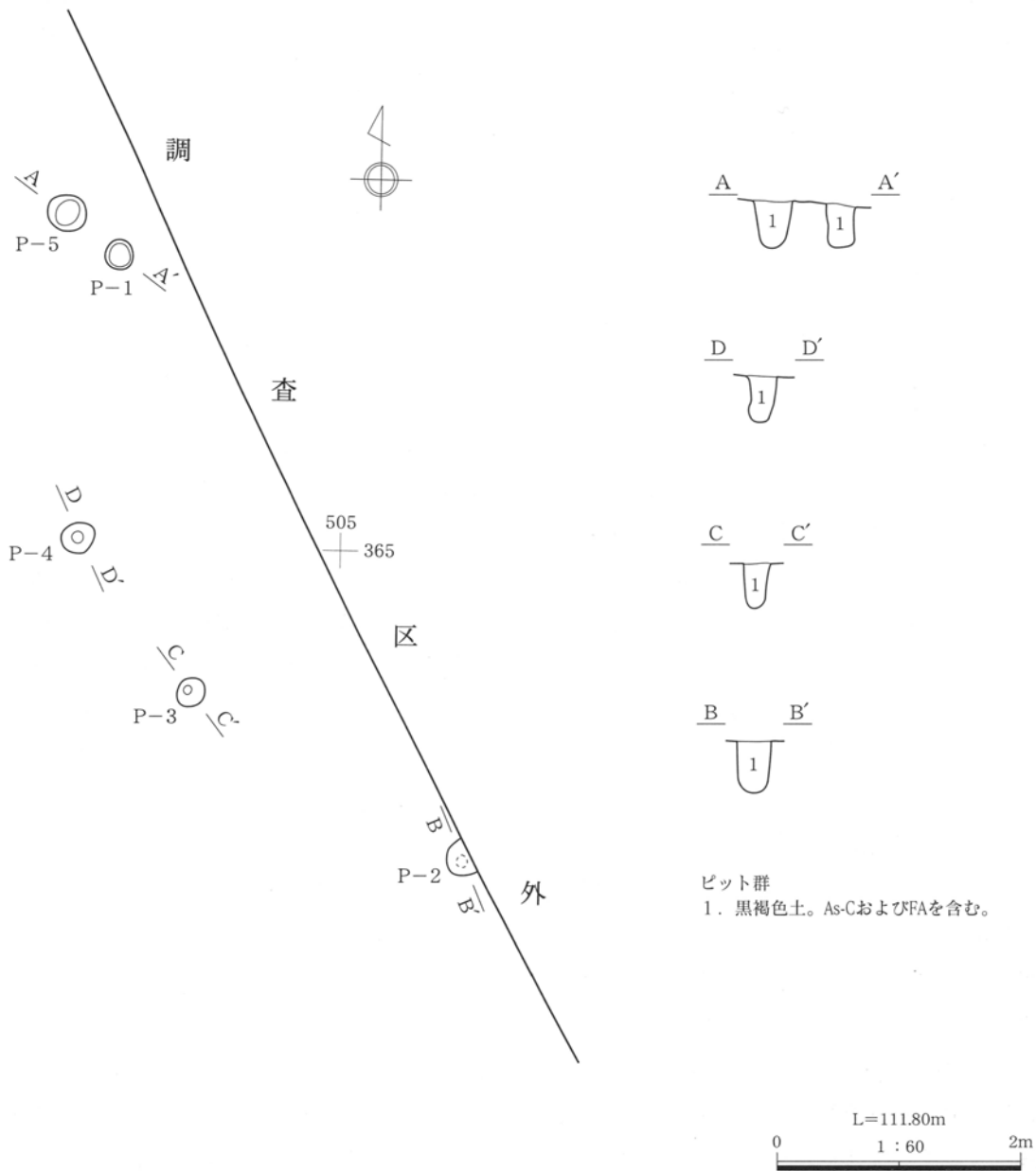
5号溝出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・成・整形・文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	底面直上	口径 - 高台径 11.2 器高 3.8+	①黒色鉱物 ②還元焰 ③灰白2.5Y8/1	外面 体部轆轤整形、底部回転篋削り後高台両脇に貼付時の回転撫で。 内面 轆轤整形。	体部下半~底部外縁1/5残。

3. ピット群

位置 B区 (X=363~368, Y=503~507) **検出状況** 基本土層の2層を除去して、平面プランを確認。**覆土** As-CおよびFAを含む黒色土。**規模** ピットは5箇所確認された。P-1は直径26cm、深さ37cm。P-2は直径31cm、深さ44cm。P-3は直径27cm、深さ37cm。P-4は直径29cm、深さ39cm。P-5は直径34cm、深さ39cm。**関係性** 5

つのピットは直線的に並ぶ状況ではなく、柱列などの想定は無理がある。しかし、5基とも覆土が共通し規模もほぼ揃っていることから、同一の遺構の一部分であること若しくは时期的同一性を推測する。**遺物** なし。**帰属時期** As-CおよびFAを含む黒色土が覆土であるということから、古墳時代後期以降と考えられる。



ピット群

4. 土坑

1号土坑 (P L. 11)

位置 A区 (X=389・390、Y=544・545) **検出状況** 基本土層の4層および5層を除去して、平面プランを確認した。**覆土** As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸1.21m×短軸1.06m:円形 (断面) 深さ0.18m:台形 **出土遺物** 縄文土器片が出土した (P.55参照)。**他遺構との新旧関係** 1号土坑→1号溝 **帰属時期** 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1)平安時代に帰属すると考えられる1号溝によって一部が切られて、(2)覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在するという2点。

2号土坑 (P L. 11)

位置 A区 (X=372・373、Y=549・550) **検出状況** 基本土層の6-1層を除去して、平面プランを確認した。**覆土** As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸1.12m×短軸0.83m:不整円形 (断面) 深さ0.22m:楕円形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1)基本土層5層ではその存在が確認できず、(2)基本土層6-1層の除去によってその存在が確認され、(3)覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在するという3点。

3号土坑 (P L. 12)

位置 A区 (X=379・380、Y=547・548) **検出状況** 基本土層の6-1層を除去して、平面プランを確認した。**覆土** As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸1.29m×短軸0.92 (推定) m:楕円形 (断面) 深さ0.18m:台形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1)基本土層5層ではその存在が確認できず、(2)基本土層6-1層の除去によってその存在が

確認され、(3)覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在するという3点。

4号土坑 (P L. 12)

位置 A区 (X=377・378、Y=546) **検出状況** 基本土層の6-1層を除去して、平面プランを確認した。**覆土** As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.98m×短軸0.77m:楕円形 (断面) 深さ0.20m:楕円形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1)基本土層5層ではその存在が確認できず、(2)基本土層6-1層の除去によってその存在が確認され、(3)覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在するという3点。

5号土坑 (P L. 12)

位置 A区 (X=388・389、Y=556) **検出状況** 基本土層の4層および5層を除去して、平面プランを確認した。**覆土** As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.72m×短軸0.50m:円形 (断面) 深さ0.21m:楕円形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** 5号土坑→4号溝 **帰属時期** 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1)平安時代に帰属すると考えられる4号溝によって一部が切られて、(2)覆土にFAを含む黒褐色土が存在するという2点。

6号土坑 (P L. 12)

位置 B区 (X=365・366、Y=516・517) **検出状況** 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。**覆土** As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.95m×短軸0.56m:円形 (断面) 深さ0.26m:台形 **出土遺物** 縄文土器片 (P.55参照) が出土した。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期**

縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(2) 本遺構が掘りこまれている層（基本土層7層）の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層（基本土層8層）、という2点。

7号土坑 (P L. 12)

位置 B区 (X=365・366、Y=515) **検出状況**
基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。覆土 As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。規模 (平面) 長軸0.58m×短軸0.48m：円形 (断面) 深さ0.27m：台形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(2) 本遺構が掘りこまれている層（基本土層7層）の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層（基本土層8層）、という2点。

8号土坑 (P L. 12)

位置 B区 (X=369・370、Y=518) **検出状況**
基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。覆土 As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。規模 (平面) 長軸0.65m×短軸0.46m：円形 (断面) 深さ0.29m：楕円形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(2) 本遺構が掘りこまれている層（基本土層7層）の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層（基本土層8層）、という2点。

9号土坑 (P L. 12)

位置 B区 (X=377、Y=512・513) **検出状況**
基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の

7層において平面プランを確認した。覆土 As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。規模 (平面) 長軸0.73m×短軸0.54m：円形 (断面) 深さ0.28m：台形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在している、という1点。

10号土坑 (P L. 12)

位置 B区 (X=366・367、Y=520・521) **検出状況**
基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。覆土As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。規模 (平面) 長軸0.56m×短軸0.49m：円形 (断面) 深さ0.24m：楕円形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(2) 本遺構が掘りこまれている層（基本土層7層）の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層（基本土層8層）、という2点。

11号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=369、Y=520・521) **検出状況**
基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。覆土 As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。規模 (平面) 長軸0.90m×短軸0.68m：楕円形 (断面) 深さ0.31m：楕円形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(2) 本遺構が掘りこまれている層（基本土層7層）の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層（基本土層8層）、という2点。

II 検出された遺構と遺物

12号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=371、Y=517・518) **検出状況** 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。**覆土** As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.86m×短軸0.68m:円形 (断面) 深さ0.18m:皿形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(2) 本遺構が掘りこまれている層(基本土層7層)の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層(基本土層8層)、という2点。

13号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=376・377、Y=514・515) **検出状況** 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。**覆土** As-C・およびFAを含む黒褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸1.07m×短軸0.69m:楕円形 (断面) 深さ0.20m:椀形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在している、という1点。

14号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=370・371、Y=522・523) **検出状況** 基本土層の2層を除去すると、その下層には基本土層の7層が露出する状況にある中、この基本土層の7層において平面プランを確認した。**覆土** As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.76m×短軸0.46m:楕円形 (断面) 深さ0.18m:椀形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1) 覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在している、という1点。

15号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=366、Y=530) **検出状況** 基本土層の6-2層を除去して、直下の基本土層7層において平面プランを確認した。**覆土** As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.50m×短軸0.35m:楕円形 (断面) 深さ0.12m:不整椀形? **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 基本土層の6-2層ではその存在が確認できず、(2) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(3) 本遺構が掘りこまれている層(基本土層7層)の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層(基本土層8層)、という3点。

16号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=365、Y=532) **検出状況** 基本土層の6-2層を除去して、直下の基本土層7層において平面プランを確認した。**覆土** As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.50m×短軸0.35m:楕円形 (断面) 深さ0.20m:椀形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 基本土層の6-2層ではその存在が確認できず、(2) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(3) 本遺構が掘りこまれている層(基本土層7層)の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層(基本土層8層)、という3点。

17号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=368、Y=536・537) **検出状況** 基本土層の6-2層を除去して、直下の基本土層7層において平面プランを確認した。**覆土** As-C・FAを含まない黄褐色土を主体とする。**規模** (平面) 長軸0.74m×短軸0.57m:不整円形 (断面) 深さ0.25m:椀形 **出土遺物** なし。**他遺構との新旧関係** なし。**帰属時期** 縄文時代中期～古墳時代前期。その根拠は、(1) 基本土層の6-2層ではそ

の存在が確認できず、(2) 覆土にAs-C・FAを含まない黄褐色土が存在し、(3) 本遺構が掘りこまれていた層（基本土層7層）の下層には縄文時代中期以降に形成されたと考えられる層（基本土層8層）、という3点。

18号土坑 (P L. 13)

位置 B区 (X=369・370、Y=541・542) **検出状況** 基本土層の6-1層を除去して、直下の基本土層7層において平面プランを確認した。覆土 As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。規模 (平面) 長軸0.85m×短軸0.57m:楕円形 (断面) 深さ0.20m:台形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1) 基本土層5層ではその存在が確認できず、(2) 基本土層6-1層の除去によってその存在が確認され、(3) 覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在するという3点。

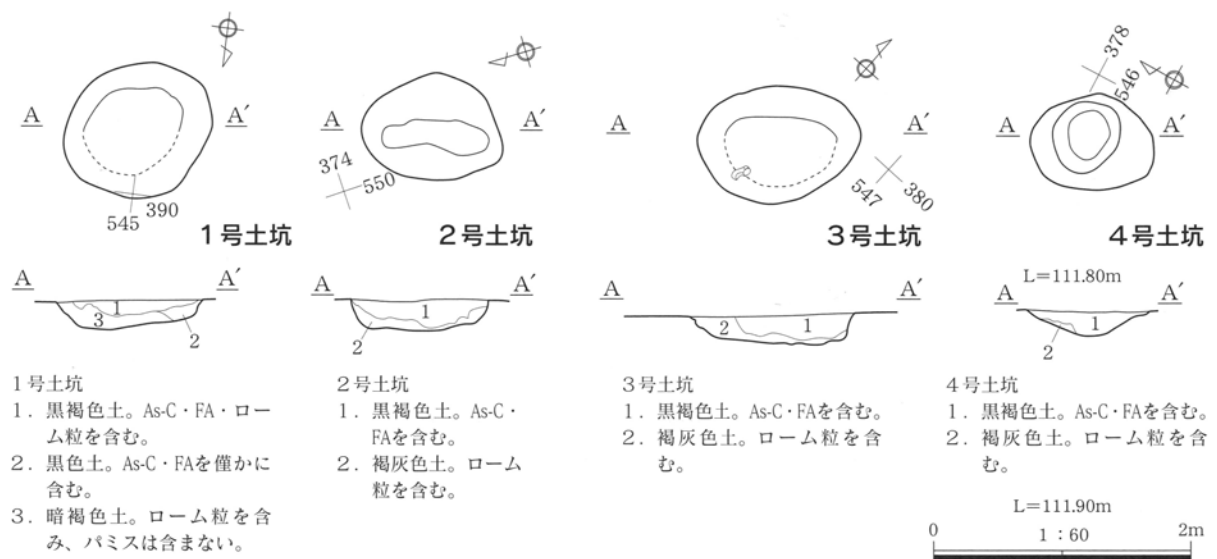
19号土坑 (P L. 14)

位置 B区 (X=371・372、Y=542・543) **検出状況** 基本土層の6-1層を除去して、直下の基本土層7層において平面プランを確認した。覆土 As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。規

模 (平面) 長軸0.64m×短軸0.46m:楕円形 (断面) 深さ0.24m:台形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 古墳時代後～平安時代。その根拠は、(1) 基本土層5層ではその存在が確認できず、(2) 基本土層6-1層の除去によってその存在が確認され、(3) 覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在するという3点。

20号土坑 (P L. 14)

位置 B区 (X=374、Y=540・541) **検出状況** 基本土層の6-1層を除去して、直下の基本土層7層において平面プランを確認した。覆土 As-CおよびFAを含む黒褐色土を主体とする。規模 (平面) 長軸0.74m×短軸0.60m:不整形円形 (断面) 深さ0.18m:台形 **出土遺物** なし。他遺構との新旧関係 なし。帰属時期 古墳時代後期～平安時代。その根拠は、(1) 基本土層5層ではその存在が確認できず、(2) 基本土層6-1層の除去によってその存在が確認され、(3) 覆土にAs-C・FAを含む黒褐色土が存在するという3点。



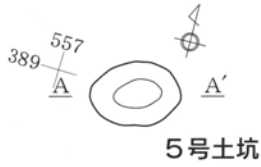
- 1号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FA・ローム粒を含む。
 2. 黒色土。As-C・FAを僅かに含む。
 3. 暗褐色土。ローム粒を含み、パミスは含まない。

- 2号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。

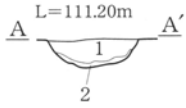
- 3号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。

- 4号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。

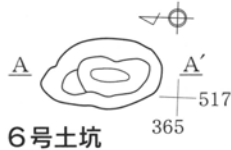
II 検出された遺構と遺物



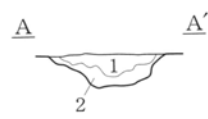
5号土坑



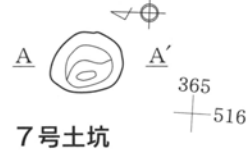
- 5号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。



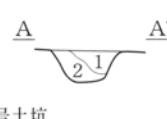
6号土坑



- 6号土坑
1. 黒色土。パミスは含まない。
 2. 黄褐色土。パミスは含まない。ローム粒を含む。



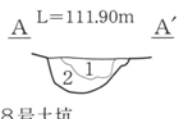
7号土坑



- 7号土坑
1. 黒色土。パミスは含まない。
 2. 黄褐色土。パミスは含まず、ローム粒を含む。



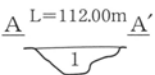
8号土坑



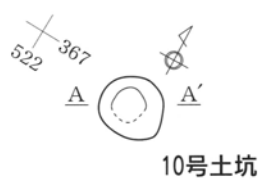
- 8号土坑
1. 黒色土。パミスは含まない。
 2. 黄褐色土。パミスは含まず、ローム粒を含む。



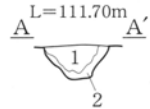
9号土坑



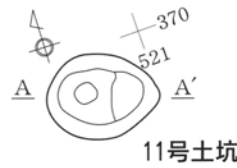
- 9号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。



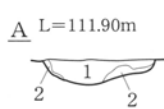
10号土坑



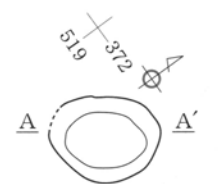
- 10号土坑
1. 黒色土。パミスは含まない。
 2. 黄褐色土。パミスは含まない。ローム粒を含む。



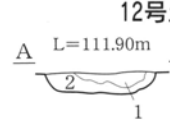
11号土坑



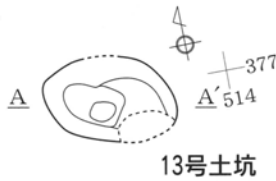
- 11号土坑
1. 黄褐色土。パミスは含まず、ローム粒を含む。
 2. 黄色土。ローム粒を多く含む。



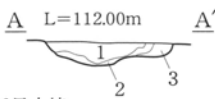
12号土坑



- 12号土坑
1. 黒色土。パミスは含まない。
 2. 黄褐色土。パミスは含まず、ローム粒を含む。



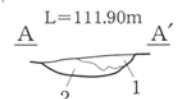
13号土坑



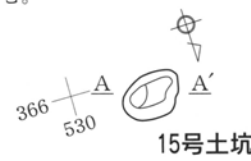
- 13号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FA・ローム粒を含む。
 2. 黒色土。As-C・FAを僅かに含む。
 3. 暗褐色土。ローム粒を含み、パミスは含まない。



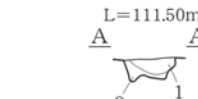
14号土坑



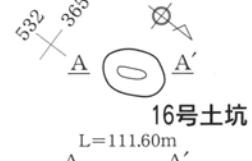
- 14号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。



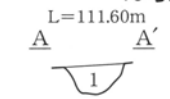
15号土坑



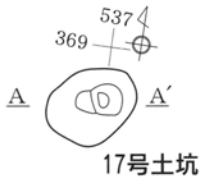
- 15号土坑
1. 黒色土。パミスは含まない。
 2. 黄褐色土。パミスは含まない。ローム粒を含む。



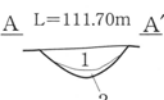
16号土坑



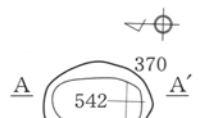
- 16号土坑
1. 黄褐色土。パミスは含まない。ローム粒を含む。



17号土坑



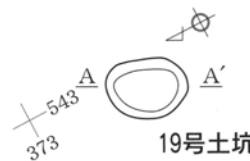
- 17号土坑
1. 黄褐色土。パミスは含まない。ローム粒を含む。
 2. 黄色土。ローム粒を多く含む。



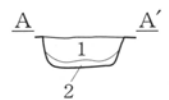
18号土坑



- 18号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。



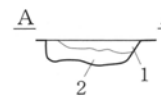
19号土坑



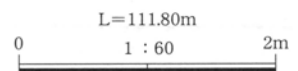
- 19号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。



20号土坑



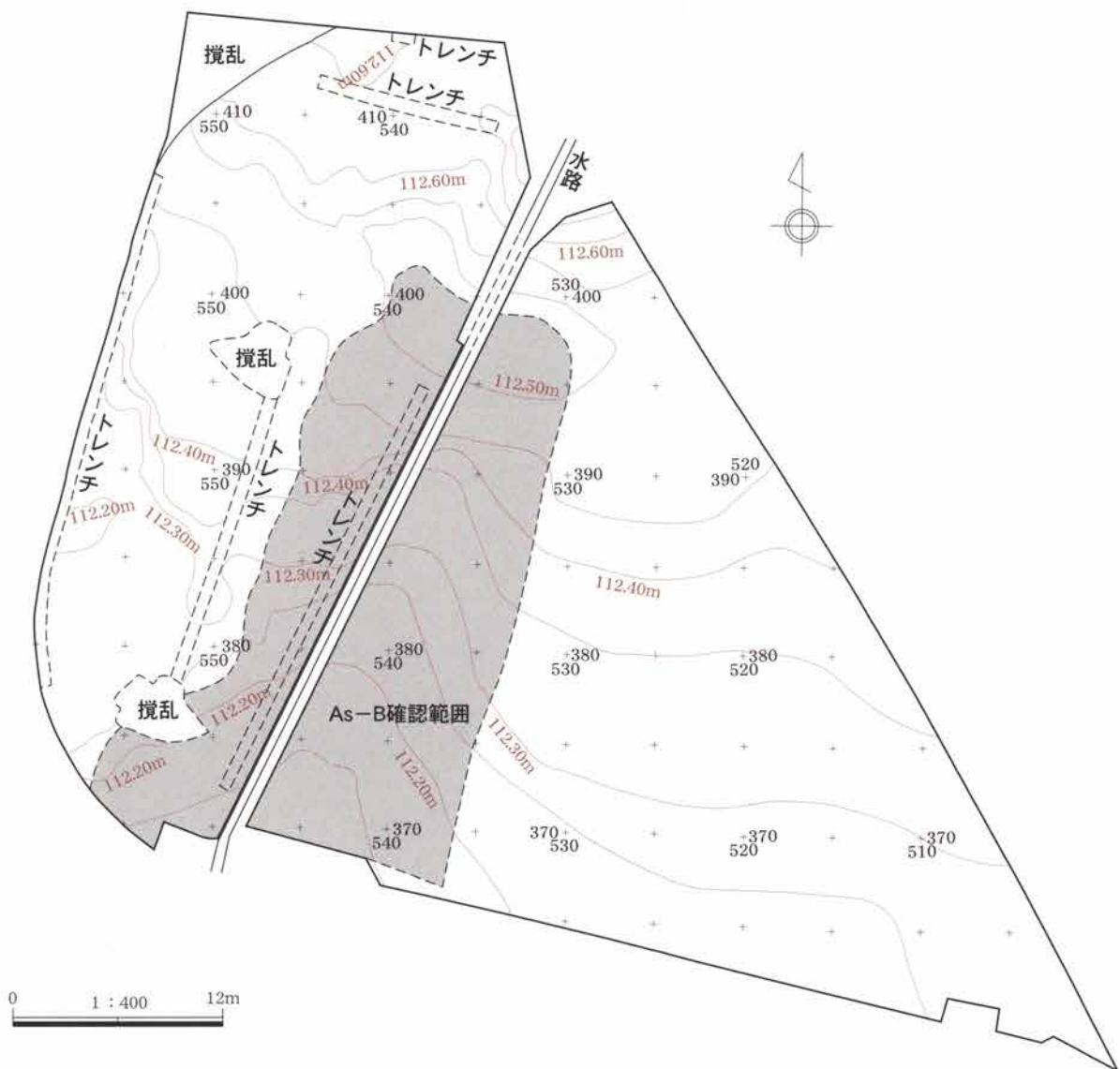
- 20号土坑
1. 黒褐色土。As-C・FAを含む。
 2. 褐灰色土。ローム粒を含む。



5. As-B下旧地表面

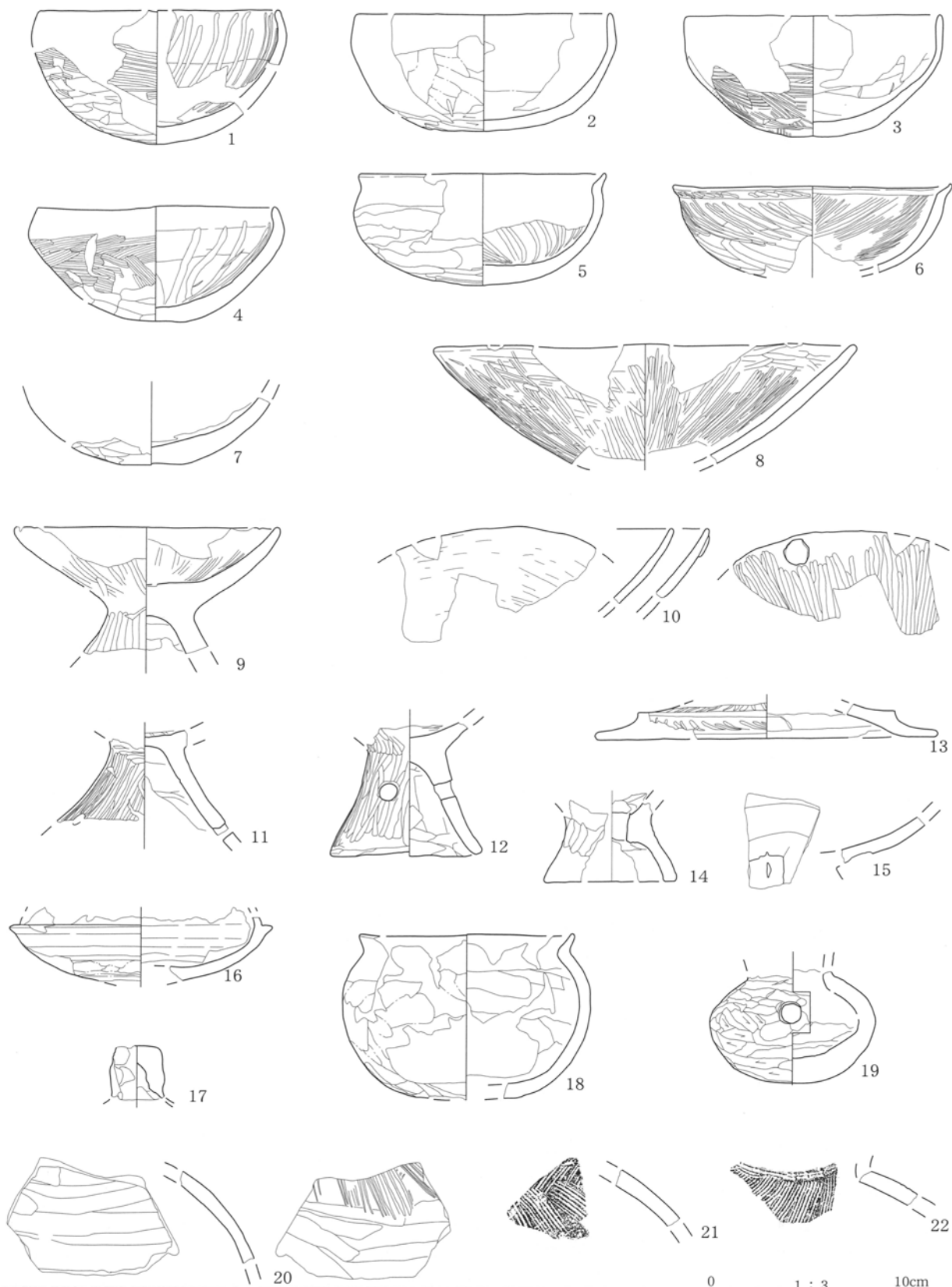
検出状況 基本土層3層 (As-B) を除去することによって地表面を検出。**検出範囲** A区東半～B区西半に限定される(下図のトーン部分、P.L. 15)。**検出遺構** 水田畦畔や足跡などの痕跡は認められず、地表面の凹凸のみが認められた。テフラ直下という検出状況を考慮し、こうした凹凸も当時の生活面 (=遺構面) と考えた。なお、As-Bの純

堆積層の周辺には同軽石が多量に含まれた黒色土が広く分布する状況にあった。こうした箇所も本来は同軽石の純堆積が存在したものと考えられ、当時の生活面 (=遺構面) が存在していたものと考えられる。念のため、こうした軽石混入土を除去してみると、その直下からは凹凸面 (=非旧地表面) が検出された。

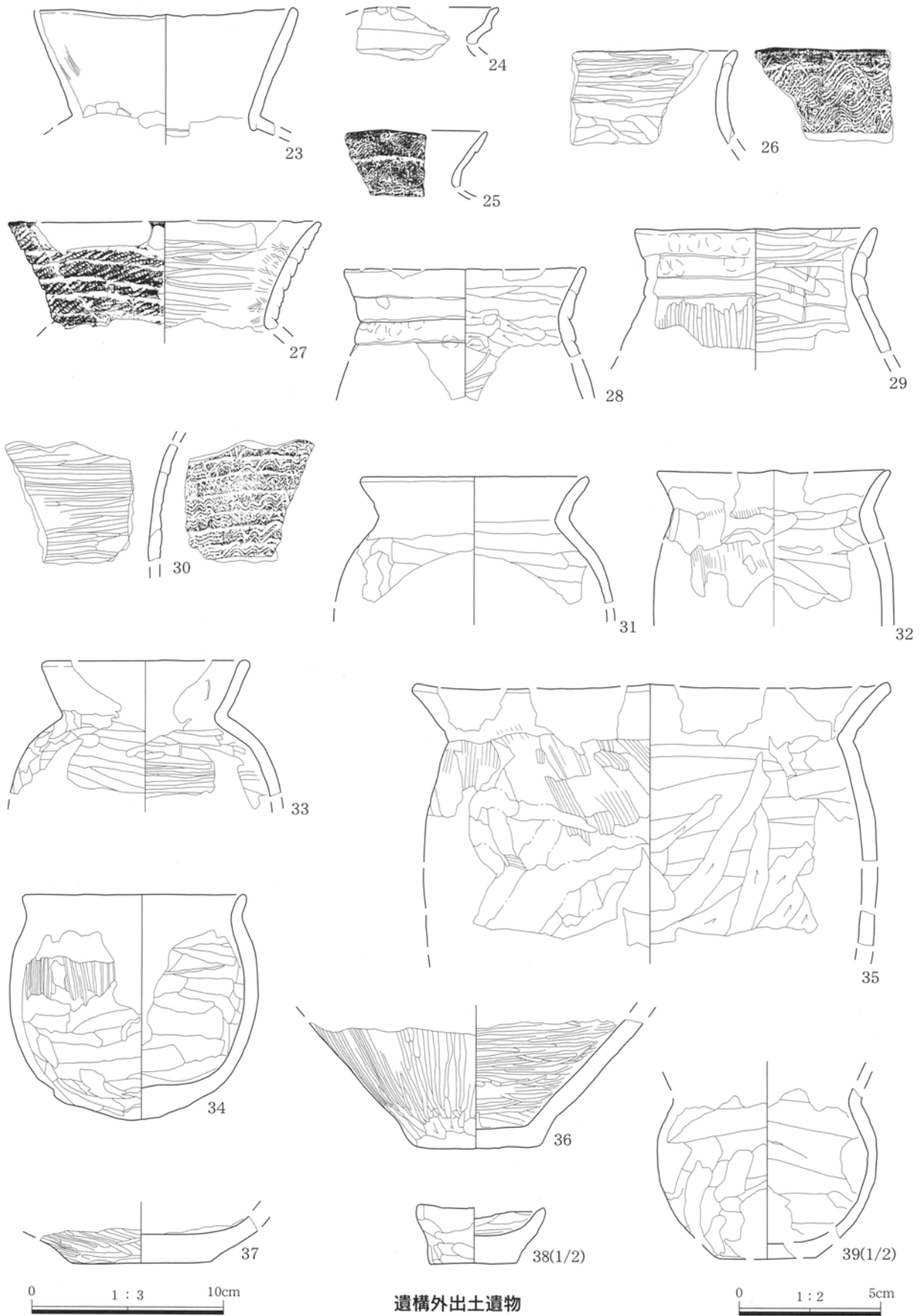


As-B下旧地表面

6. 遺構外出土遺物

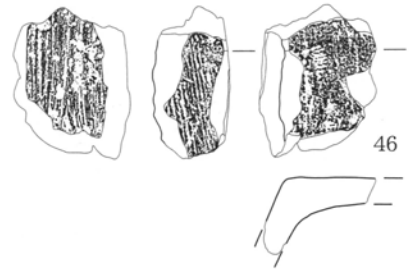
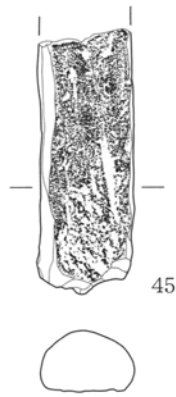
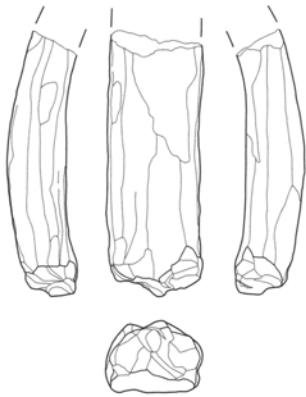
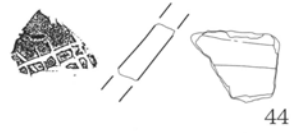
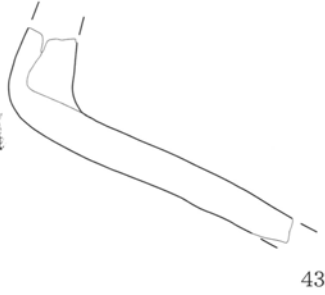
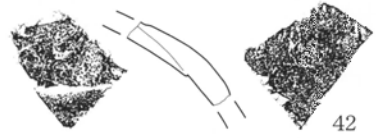
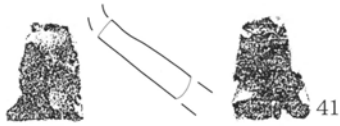
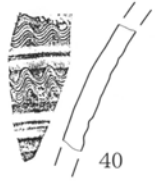


遺構外出土遺物

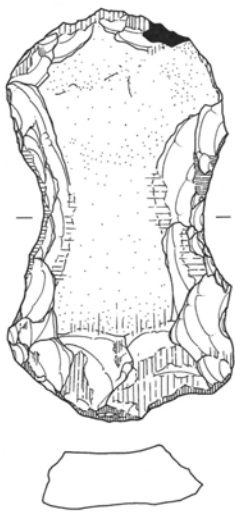


遺構外出土遺物

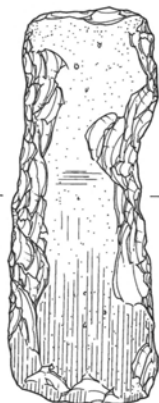
II 検出された遺構と遺物



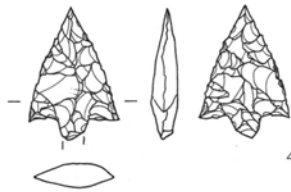
0 1 : 3 10cm



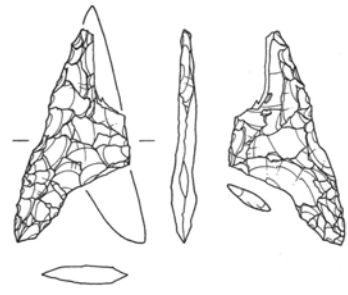
47



48



49



50

0 1 : 2 5cm

0 4 : 5 2.5cm

遺構外出土遺物

6. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器杯	395-550G5・6層、395-555G6層	口径 12.2 底径 — 器高 6.8+	①軽石、石英、黒色鋳物 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	外面 刷毛目後口縁部横撫で・体部下左方向に筒削り。 内面 体部中位以下撫で・上位以上横撫で後体部中位以上粗い放射状に筒磨き。	口縁部1/2・体部1/3欠。
2	土師器杯	390-545G5・6層	口径 (13.0) 底径 — 器高 5.9	①軽石、石英 ②普通 ③赤褐5YR4/6	外面 口縁部横撫で、体部上半撫で、体部下半に筒削り。 内面 体部下位に筒撫で、体部中位以上横撫で。	口縁部～体部上半3/4欠。
3	土師器杯	395-550・555G6層	口径 (13.1) 底径 — 器高 6.1	①軽石、黒色鋳物 ②普通 ③褐10YR4/4	外面 体部刷毛目後口縁部横撫で。 内面 体部下半に筒撫で後体部上半以上横撫で。	口縁部1/6・体部1/3残。
4	土師器杯	395-550・555G6層	口径 12.2 底径 2.5 器高 5.9	①軽石、石英、黒色鋳物 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	外面 体部横方向に刷毛目後下位左方向に筒削り、口縁部横撫で、僅かに意識された底部は筒削り。内面 体部横方向に筒削り・口縁部横撫で後粗く雑な放射状に筒磨き。	1/4欠。
5	土師器杯	395-545・550G5・6層	口径 12.6 底径 — 器高 5.6	①軽石、黒色鋳物 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	外面 体部左方向に筒削り後口縁部～体部上位横撫で。 内面 口縁部～体部上位横撫で後放射状に筒磨き・施文単位は右から左。	口縁部～体部上位3/4欠。
6	土師器杯	365-505G6層	口径 (14.1) 底径 — 器高 4.6+	①軽石、英、黒色鋳物 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	外面 体部右方向に筒削り・口縁部横撫で後体部上半及び口縁部斜方向に筒磨き、整形単位は右方向・施文単位は左方向。 内面 体部撫で・口縁部横撫で後体部中位～上位密で細かい筒磨き、施文単位は左方向。	口縁部1/4・体部上位～中位1/3残。
7	土師器杯	5層	口径 — 底径 3.0 器高 3.3+	①軽石、石英 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	外面 左方向に筒削り。 内面 撫で。	体部下半以下残。
8	土師器高杯	385-550G6層	口径 (21.4) 底径 — 器高 2.3+	①軽石、石英 ②良好 ③明褐7.5YR5/6	外面 横方向に筒削り後縦方向に筒磨き。 内面 体部縦方向に筒削り後縦磨き・整形単位は右から左へ、口縁部粗い横方向に筒磨き。	口縁部～杯部中位1/2残。
9	土師器高杯	390-540・545G6層	口径 (13.5) 底径 — 器高 6.4+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い褐7.5YR6/3	外面 筒削り後口縁部横撫で後縦方向に筒磨き。 内面 杯部口縁部横撫で後放射状に筒磨き、脚部横方向に撫で。	杯部1/2・脚部上位残。
10	土師器高杯	385-540・380-545G6層	口径 — 底径 — 器高 3.8+	①軽石、石英 ②普通 ③灰黄2.5Y6/2	外面 口縁部横撫で後縦方向に筒磨き、円形貼付文1ヶ所残存。内面 横方向に筒削り後筒磨き、筒削りによる筋状の擦痕が残る磨きの単位は不明。	口縁部～体部上半1/5残。
11	土師器高杯	385-545G6層	口径 — 底径 — 器高 5.1+	①軽石、石英、黒色鋳物 ②良好 ③橙5YR6/6	円孔上半が2ヶ所残存、3ヶ所か。 外面 縦方向に筒削り後縦方向に筒磨き、屈曲部に筒痕が残る。 内面 脚部横方向に撫で、杯部筒磨き。	杯底部～脚部上半残。
12	土師器高杯	385-550G6層	口径 — 底径 7.2 器高 6.8+	①軽石、黒色鋳物、石英 ②良好 ③7.5YR5/6	外面 脚部縦方向に筒削り後縦方向に筒磨き、杯部縦・横方向に筒削り後縦方向に筒磨き。 内面 縦・横方向に筒撫で。脚端部撫でるか、平坦面を志向。	杯部下位以下残。
13	土師器高杯	395・400-550G6層	口径 — 底径 17.4 器高 1.8+	①軽石、石英、黒色鋳物 ②普通 ③明赤褐5YR5/8	外面 段をもち、上下段とも横撫で後上段縦方向・下段斜方向に筒磨き。 内面 接地部筒削り、他筒撫で。	脚端部1/5残。
14	土師器器台	5層	口径 — 底径 6.6 器高 4.5+	①軽石、石英、黒色・乳白色鋳物 ②普通 ③褐10YR4/4	外面 体部下位～脚部中位下方向に筒削り後体部縦方向に筒削り後横方向に撫で。内面 体部斜方向に撫で、孔部筒削り後撫で、脚部横方向に撫で。脚端部平坦。	体部下位1/4・脚部残。
15	須恵器高杯?	390-550G6層	口径 — 底径 — 器高 2.3+	①軽石、石英、黒色鋳物 ②還元焰 ③灰N5/	外面 左回転轆轤整形、下端の方形欠き破りは脚部方形透かし穴に因るか。	杯部破片。短脚か。
16	須恵器杯	380-555G5層、385-560G6層	口径 — 底径 — 器高 3.2+	①— ②還元焰 ③灰N5/	外面 体部回転轆轤削り後下半撫で、受部横撫で。 内面 轆轤整形。	口縁部下位～体部中位1/3残。
17	弥生土器蓋?	385-550G6層	径 2.7 孔径 1.3 器高 2.7+	①石英、乳白色鋳物 ②普通 ③灰白10YR8/2	外面 撫で、側面は歪みがあり上面は平坦。 内面 孔は棒状工具に因る刺突か、外傾する底面は摘み上げ後撫でか。蓋の摘み又は高杯の接合部品か。	摘みとして上面1/4欠。
18	土師器鉢	395-550G5・6層、395-555G6層	口径 (10.9) 底径 — 器高 8.3+	①軽石 ②良好 ③明褐7.5YR5/6	外面 体部下位に筒削り、体部上位～中位撫で、口縁部横撫で。 内面 体部撫で後口縁部横撫で。	口縁部1/8・体部1/3残。
19	土師器甗	390-550G6層	口径 — 底径 — 器高 3.8+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄橙10YR7/4	外面 筒削り後撫で。 内面 指撫で。	頸部以下残。
20	弥生土器壺	395-540G6層	口径 — 底径 — 器高 4.7+	①軽石、石英 ②普通 ③褐7.5YR4/3	外面 左方向に筒削り後右に開く櫛描羽状文。 内面 左方向に筒撫で。	肩部破片。
21	弥生土器壺?	395-540G6層	口径 — 底径 — 器高 2.8+	①石英、赤褐色鋳物、軽石 ②普通 ③褐7.5YR4/6	外面 右に開く櫛描羽状文。 内面 横方向に撫で。	肩部破片。
22	弥生土器壺?	395-540G6層	口径 — 底径 — 器高 1.7+	①軽石、赤褐色鋳物 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 3連止め簾状文後右に開く櫛描羽状文。 内面 横方向に筒撫で。	頸部破片。

II 検出された遺構と遺物

23	土師器壺	385-550G6層	口径(14.0) 底径 器高 6.8+	①軽石、石英 ②普通 ③浅黄橙7.5YR8/3	外面 胴部縦方向篋削り、口縁部縦方向刷毛目後口縁部横方向撫で。 内面 横方向撫で、頸部に輪積み痕あり。	口縁部1/4・頸部1/8残。
24	土師器甕	385-545G6層	口径 底径 器高 1.9+	①軽石 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 横撫で。 内面 横撫で。	S字甕。 口縁部破片。
25	弥生土器甕	380-545G6層	口径 底径 器高 3.0+	①軽石 ②普通 ③黒7.5YR2/1	外面 折り返し口縁、雑な波状文。 内面 横方向篋磨き。	口縁部破片。
26	弥生土器甕	370-535G6層	口径 底径 器高 5.0+	①軽石、石英 ②普通 ③暗褐7.5YR3/3	外面 櫛描波状文。 内面 撫で後横方向篋磨き。	口縁部破片。
27	弥生土器甕	385-550G6層、390-545-550G6層	口径(16.5) 底径 器高 5.7+	①軽石 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	外面 口縁部輪積み6段横撫で後半節LR縄文施文後頸部櫛描き波状文 内面 横撫で後横方向粗い篋磨き。	口縁部～頸部3/8残。
28	土師器甕	390-540・545G6層	口径(13.0) 底径 器高 6.9+	①軽石 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 胴部篋削り後縦方向篋磨き、口縁部輪積み3段横方向撫で・指頭圧痕あり。内面 頸部以下左方向篋撫で又は篋削り後部分的に横方向篋磨き、口縁部篋撫で又は撫で。	口縁部2/5・胴部上位1/6残。
29	弥生土器甕	390-540・545G6層	口径(12.8) 底径 器高 6.5+	①軽石 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 胴部左方向篋削り後縦方向篋削り後篋磨き、口縁部輪積み3段横撫で・指頭圧痕あり。内面 口縁部下半以下横方向篋撫で・口縁部横撫で後部分的に横方向篋磨き。	口縁部上段輪積み1/4・中段～胴部上位1/6残。
30	弥生土器甕	395-545G6層	口径 底径 器高 8.2+	①軽石、石英 ②普通 ③暗褐7.5YR3/3	外面 輪積み痕7段に櫛描波状文。 内面 横方向篋磨き。	口縁部破片。
31	土師器甕	395-550G5・6層	口径(12.1) 底径 器高 6.7+	①軽石 ②普通 ③黒褐7.5YR3/2	外面 胴部縦方向篋削り後上位横方向篋削り後口縁部横撫で。 内面 胴部横方向撫で、口縁部横撫で。	口縁部～胴部上位1/4残。
32	土師器甕	395-550G5・6層	口径(12.2) 底径 器高 7.3+	①軽石、黒色鈹物 ②普通 ③暗褐7.5YR3/3	外面 器表が剥離、胴部上方向刷毛目後口縁部横撫で。 内面 胴部左方向篋撫で、口縁部横撫で。	口縁部1/8・胴部上位1/3残。
33	土師器甕	390-545G6層、395-555G6層	口径(11.0) 底径 器高 7.8+	①軽石、石英 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 胴部左方向篋削り後口縁部横撫で。 内面 胴部左方向篋削り後中位以下横方向篋磨き、口縁部篋撫で後横撫で。	口縁部1/4・胴部上半1/3残。
34	土師器甕	390-550G5・6層	口径(11.8) 底径 8.1 器高 11.9	①軽石 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 胴部縦方向刷毛目後横方向撫で・口縁部横撫で。底部篋削り・丸底だが縁辺に段をもち底部を意識。 内面 胴部横方向篋撫で後口縁部横撫で、底部撫で。	口縁部3/4・胴部1/2欠。
35	土師器甕	390-550G5・6層、395-550-555G6層	口径(25.2) 底径 器高 13.7+	①軽石 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	外面 胴部撫で後主に縦方向刷毛目後主に横方向強い撫で・口縁部横撫で。内面 胴部横方向篋撫で後右上方篋削り、口縁部横撫で。	口縁部1/4・胴部上位1/3・胴部中位1/6残
36	土師器甕	380-545G6層、390-550G6層	口径 底径 器高 6.7+	①軽石、石英 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 胴部下方向篋削り後縦方向篋磨き、底部篋削り。 内面 胴部横方向篋磨き、底部篋撫で。	胴部下位～底部1/3。
37	土師器甕	390-545G6層	口径 底径 器高 2.5+	①軽石、石英、黒色鈹物 ②普通 ③褐7.5YR4/3	外面 胴部左方向篋削り後左方向篋磨き、底部篋削り後篋磨き。 内面 撫で。	胴部最下位～底部残。
38	土師器杯？ ミニチュア	380-550G6層	口径(4.5) 底径(3.0) 器高 2.1+	①軽石 ②普通 ③暗褐7.5YR3/3	外面 体部撫で後最下位右方向篋削り、底部一定方向へ直線的に篋削り。 内面 体部下位以下篋撫で、体部上半撫で、口縁部摘みだし。	口縁部～体部上半3/4欠。
39	土師器甕 ミニチュア	390-505G6層	口径 底径 器高 6.0+	①軽石、赤褐色鈹物 ②普通 ③鈍い橙7.5YR6/4	外面 撫で。 内面 撫で、肩部に輪積み痕あり。	頸部～底部1/4残。
40	須恵器甕	360-505G6層	口径 底径 器高 5.1+	①石英 ②還元焰 ③黒7.5Y2/1	外面 二条の沈線2本と波状文。 内面 横方向撫で、自然釉が薄く付着。6～7世紀頃か。	口縁部破片。
41	陶器甕	B区埋没土	口径 底径 器高 3.1+	常滑。外面 叩き後撫でか。 内面 横方向撫で。13世紀後半～14世紀前半。		頸部破片。外-42と同一個体か。
42	陶器甕	B区4層	口径 底径 器高 3.3+	常滑。外面 叩き後斜方向撫で。 内面 横方向撫で、輪積み痕あり。13世紀後半～14世紀前半。		肩部破片。外-41と同一個体か。
43	須恵器甕	B区4層	口径 底径 器高 8.1+	①石英、軽い ②還元焰 ③灰N5/	外面 平行叩き後撫で。 内面 青海波当て具痕後横方向撫で、頸部の屈曲が弱い。奈良～平安時代。在地産か。	頸部～胴部上位破片。
44	陶器卸し皿	395-545G6層	口径 7.6 底径 5.6 器高 11.6	瀬戸・美濃。外面 轆轤整形、口縁側に灰釉を施す。 内面 轆轤整形、篋による斜格子状の刻みを施す。15世紀前葉。		体部破片。
45	埴輪？	B区	長さ 10.4+ 幅 3.8 厚さ 2.3	①軽石、黒色鈹物 ②普通 ③明褐7.5YR5/6	全体を撫で整形。断面台形状で一辺は平坦となり、この面に網代状の圧痕あり。端部は指で押さえ込み、窪みをもつ。	破片。美豆良か。
46	埴輪？	365-535G6層	高さ 6.0+ 幅 4.3+ 厚さ 1.1	①軽石、石英、黒色鈹物 ②普通 ③外明赤褐2.5YR5/6	断面鈍角に開くL字状で外面は稜をもち、内面は湾曲する。外面 縦方向の刷毛目と篋削り。内面 縦方向篋削り後刷毛目状の擦痕。	隅部破片。家形か。

6. 遺構外出土遺物

47	石器 打製石斧	B区	長さ 10.9 幅 6.0 厚さ 1.7 重量 156.1 石材 黒色頁岩	平面撥形。片面に自然面が残り、縁辺に垂直持ち両面調整技法による階段状剥離で整形した刃部をもつ。端部は水平持ち片面調整技法による急角度剥離で調整。両面調整。	完形。部分的にガジリ。
48	石器 打製石斧	370-535G6層	長さ 10.5 幅 4.0 厚さ 1.7 重量 89.0 石材 灰色安山岩	平面短冊形。図下端の刃部に摩擦が目立つ。基本的に水平持ち片面調整技法による急角度剥離で調整。	完形。
49	石器 鏃	365-535G6層	長さ 2.1+ 幅 1.5 厚さ 0.4 重量 0.94 石材 玉随	両面整形で平基有茎。	茎先端欠。
50	石器 鏃	380-550G	長さ 3.5 幅 1.9+ 厚さ 0.3 重量 1.45 石材 チャート	両面整形で凹基無茎。	片側基部と縁辺の一部欠。

西大室上諏訪遺跡出土縄文土器一覧表

No.	出土位置	層位	型式名	部位	重量 g	備考	No.	出土位置	層位	型式名	部位	重量 g	備考
1	1号住居	埋没土	称名寺1	口縁部	93.8		55	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	31.3	
2	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	83.9		56	"	"	加曽利EⅢ	胴部	8.6	
3	"	"	加曽利EⅢ	胴部	54.5		57	"	"	加曽利EⅢ	胴部	10.6	
4	"	"	加曽利EⅢ	胴部	76.3		58	"	"	加曽利EⅢ	胴部	10.3	
5	"	"	加曽利EⅢ	胴部	27.1		59	"	"	加曽利EⅢ	胴部	8.3	
6	"	"	加曽利EⅢ	胴部	27.7		60	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	10.3	
7	"	"	加曽利EⅢ	胴部	13.3		61	"	"	加曽利EⅢ	胴部	6	
8	"	"	加曽利EⅢ	胴部	27.5		62	"	"	加曽利EⅢ	胴部	5.9	
9	"	"	加曽利EⅢ	胴部	15.1		63	"	"	加曽利EⅢ	胴部	5.6	
10	"	"	加曽利EⅢ	胴部	23.8		64	"	"	加曽利EⅢ	胴部	23.3	159・174と接合
11	"	"	加曽利EⅡ	胴部	27.4		65	5溝	埋没土	加曽利EⅣ	口縁部	20.2	
12	"	"	加曽利EⅢ	胴部	11.9		66	1土	埋没土	加曽利EⅢ?	胴部	18.8	
13	"	"	加曽利EⅢ	胴部	13.7		67	6土	埋没土	堀之内2	胴部	13.8	69と接合
14	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	7.4		68	"	"	加曽利EⅢ	胴部	10.7	
15	2号住居	埋没土	加曽利EⅢ	胴部	11.7		69	"	"	堀之内2	貼付隆線	2.4	67と接合
16	"	"	加曽利EⅢ	胴部	17		70	360-505G	2	加曽利EⅢ	胴部	92.1	
17	"	"	加曽利EⅢ	胴部	10.5		71	"	2	加曽利EⅢ	胴部	135.7	
18	"	"	加曽利EⅢ	胴部	9.5		72	"	6	加曽利EⅢ	胴部	55.6	
19	"	"	加曽利EⅢ	胴部	26.1		73	"	6	加曽利EⅢ	胴部	34.6	
20	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	20.2		74	"	6	加曽利EⅢ	胴部	32.8	
21	"	"	加曽利EⅢ	胴部	22.8		75	"	6	加曽利EⅢ	胴部	11	
22	"	"	加曽利EⅢ	胴部	9.7		76	"	6	加曽利EⅢ	胴部	17.2	
23	"	"	称名寺1	胴部	11.3		77	"	6	加曽利EⅢ	胴部	14.7	
24	3号住居	埋没土	加曽利EⅢ	胴部	69.1		78	"	6	加曽利EⅢ	胴部	12.7	
25	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	12.7		79	"	6	加曽利EⅢ	胴部	30.6	
26	"	"	加曽利EⅢ	胴部	28.9		80	360-510G	6	加曽利EⅢ	胴部	10.2	
27	4号住居	埋没土	加曽利EⅢ	口縁部~胴部	393.6		81	360-515G	6	加曽利EⅢ	胴部	34.1	33と接合
28	"	"	加曽利EⅢ	胴部	22.3		82	365-505G	6	加曽利B2	胴部	48.8	
29	"	"	加曽利EⅢ	胴部	16.7		83	"	6	加曽利EⅢ	胴部	36.8	
30	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	158.2		84	"	6	加曽利EⅢ	胴部	43	
31	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	67.5		85	"	6	加曽利EⅡ	胴部	26	
32	"	"	加曽利EⅢ	胴部	65.2		86	"	6	加曽利EⅢ	胴部	22.4	
33	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	34.8	81と接合	87	"	6	加曽利EⅢ	胴部	13.1	
34	"	"	加曽利EⅢ	胴部	54.1		88	"	6	加曽利EⅢ	胴部	8.5	
35	"	"	加曽利EⅢ	胴部	45.4		89	"	6	加曽利EⅢ	胴部	8	
36	"	"	加曽利EⅢ?	口縁部	34.9		90	"	6	加曽利EⅢ	胴部	7.6	
37	"	"	加曽利EⅢ	胴部	35.9		91	"	6	加曽利EⅢ	胴部	6.1	
38	"	"	加曽利EⅢ	胴部	24.2		92	365-510G	6	加曽利EⅢ	口縁部	160.9	
39	"	"	加曽利EⅢ	胴部	37.1		93	"	6	加曽利EⅢ	胴部	37.0	
40	"	"	加曽利EⅢ	胴部	24.7		94	365-520G	6	加曽利EⅢ	胴部	16	
41	"	"	加曽利EⅢ	胴部	12.5		95	365-525G	6	無文、中期後半?	胴部	8.4	
42	"	"	?	口縁部	12.3		96	"	6	加曽利EⅢ	胴部	14.6	
43	"	"	加曽利EⅢ	胴部	28.1		97	"	6	加曽利EⅢ	胴部	12.1	
44	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	32		98	"	6	加曽利B1	口縁部	7.6	
45	"	"	?	胴部	17.1		99	365-530G	6	無文、中期後半?	胴部	14.9	
46	"	"	加曽利EⅢ	胴部	16.4		100	"	6	加曽利EⅢ	胴部	22.4	
47	"	"	加曽利EⅢ	胴部	13		101	370-515G	6	加曽利EⅢ	胴部	22.5	
48	"	"	加曽利EⅢ	胴部	11.9		102	"	6	加曽利EⅢ	胴部	14.4	
49	"	"	加曽利EⅢ	胴部	27.1		103	"	6	加曽利EⅢ	胴部	7.6	
50	"	"	加曽利EⅢ	胴部	15.6		104	"	6	沈線1条、中期後半?	胴部	7.9	
51	"	"	加曽利EⅢ	口縁部	12.4		105	370-530G	6	加曽利EⅢ	胴部	42.2	
52	"	"	加曽利EⅢ	胴部	33.7								
53	"	"	加曽利EⅢ	胴部	14.3								
54	"	"	加曽利EⅢ	胴部	17.3								

II 検出された遺構と遺物

No.	出土位置	層位	型式名	部位	重量 g	備考	No.	出土位置	層位	型式名	部位	重量 g	備考
106	"	6	加曾利EⅢ	胴部	32.2		162	380-555G	6	堀之内?	胴部	5.9	
107	"	6	加曾利EⅢ	胴部	46.7		163	390-545G	6	加曾利EⅢ	口縁部	53.6	217と接合
108	"	6	加曾利EⅢ	胴部	17.8		164	385-550G	6	加曾利EⅢ	胴部	41.5	
109	"	6	加曾利EⅢ	胴部	17.5		165	"	6	加曾利EⅢ	胴部	23	
110	"	6	加曾利EⅢ	胴部	16		166	"	6	加曾利EⅢ	胴部	38.3	
111	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	10.1		167	"	6	加曾利EⅢ	胴部	18.1	
112	"	6	加曾利EⅢ	胴部	11.4		168	"	6	加曾利EⅢ	胴部	9.5	
113	"	6	加曾利EⅢ	胴部	15.2		169	"	6	加曾利EⅢ	胴部	5.2	
114	"	6	加曾利EⅢ	胴部	8.3		170	385-555G	6	加曾利EⅢ	胴部	28.6	
115	"	6	加曾利EⅢ	胴部	44.1	138と接合	171	"	6	加曾利EⅢ	胴部	32.3	
116	370-535G	6	加曾利EⅢ	胴部	36.8		172	"	6	加曾利EⅢ	胴部	26	
117	"	6	加曾利EⅢ	胴部	10.1		173	"	6	加曾利EⅢ	胴部	23.5	
118	370-540G	6	加曾利EⅢ	胴部	103.2		174	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	27.2	64・159と接合
119	"	6	加曾利EⅢ	胴部	71.1		175	390-545G	6	加曾利EⅢ	胴部	8.8	
120	"	6	加曾利EⅢ	胴部	45.9		176	390-550G	6	加曾利EⅢ	胴部	21.5	
121	"	6	無文、中期後半?	胴部	29.1		177	"	6	加曾利EⅢ	胴部	42.2	
122	"	6	加曾利EⅢ	胴部	27.1		178	390-555G	6	加曾利EⅢ	口縁部	23.2	
123	"	6	加曾利EⅢ	胴部	36.2		179	"	6	加曾利EⅢ	胴部	15.7	
124	"	6	加曾利EⅢ	胴部	12.9		180	"	6	加曾利EⅢ	胴部	16.1	
125	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	35.4		181	395-540G	6	加曾利EⅢ	胴部	78.2	
126	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	23.2		182	"	6	加曾利EⅢ	胴部	34.4	
127	375-510G	6	称名寺2?	胴部	8.9		183	"	6	加曾利EⅢ	胴部	60.1	
128	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	27.7		184	"	6	加曾利EⅢ	胴部	12.3	
129	"	6	加曾利EⅢ	胴部	22.4		185	"	6	加曾利EⅢ	胴部	32.7	
130	"	6	加曾利EⅢ	胴部	24.6		186	395-545G	6	加曾利EⅢ	口縁部	20	
131	"	6	加曾利EⅢ	胴部	6.7		187	"	6	加曾利EⅢ	胴部	28.3	
132	"	6	無文、中期後半?	胴部	6.3		188	"	6	加曾利EⅢ	胴部	19.7	
133	"	6	無文、中期後半?	胴部	6.4		189	"	6	加曾利EⅢ	胴部	12.8	
134	"	6	加曾利EⅢ	胴部	5		190	395-550G	5	加曾利EⅢ	胴部	16.6	
135	"	6	加曾利EⅢ	胴部	3.7		191	"	5	加曾利EⅢ	胴部	5.5	
136	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	96	145と接合	192	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	82.5	
137	375-520G	6	加曾利EⅢ	胴部	27.2		193	"	6	堀之内?	口縁部	51.4	
138	375-530G	6	加曾利EⅢ	胴部	84.8	115と接合	194	"	6	加曾利EⅢ	胴部	35.1	
139	"	6	加曾利EⅢ	胴部	56.1		195	"	6	加曾利EⅢ	胴部	58.6	
140	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	31.7		196	"	6	加曾利EⅢ	胴部	10.5	
141	"	6	無文、中期後半?	胴部	6.4		197	"	6	加曾利EⅢ	胴部	12.9	
142	375-545G	6	堀之内2	口縁部	75.7	P L. 24	198	"	6	加曾利EⅢ	胴部	6.5	
143	"	6	加曾利EⅢ	胴部	28.9		199	395-555G	6	加曾利EⅡ	胴部	30.9	
144	375-555G	6	加曾利EⅢ	口縁部	39.4		200	"	6	加曾利EⅢ	胴部	7	
145	380-515G	6	加曾利EⅢ	口縁部	27.3	136と接合	201	"	6	加曾利EⅢ	胴部	17.5	
146	380-530G	6	加曾利EⅢ	胴部	31.9		202	400-545G	6	加曾利EⅢ	胴部	45.6	
147	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	13.6		203	"	6	加曾利EⅢ	胴部	41.3	
148	"	6	加曾利EⅢ	胴部	14.1		204	400-550G	6	加曾利EⅢ	口縁部	69.6	
149	380-535G	6	加曾利BⅠ	胴部	28.6		205	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	29.9	
150	"	6	無文、中期後半?	胴部	14.1		206	"	6	加曾利EⅢ	胴部	13.4	
151	"	6	加曾利BⅠ	胴部	10.1		207	"	6	加曾利EⅢ	胴部	9.3	
152	"	6	加曾利BⅠ	胴部	6.2		208	405-530G	?	加曾利EⅢ	口縁部	42.7	
153	"	6	加曾利BⅠ	胴部	4.7		209	405-535G	7	加曾利EⅢ	胴部	160.7	
154	"	6	加曾利BⅠ	胴部	19.1		210	"	?	加曾利EⅢ	胴部	23.4	
155	380-540G	6	堀之内2	口縁部	12.3		211	"	7	加曾利EⅢ	胴部	18.3	
156	"	6	称名寺1	胴部	9.6		212	410-535G	?	加曾利EⅢ	胴部	50.9	
157	"	6	加曾利EⅢ	胴部	74.5		213	410-545G	6	無文、中期後半?	胴部	37.6	
158	"	6	加曾利EⅢ	胴部	8.9		214	"	6	加曾利EⅢ	胴部	25	
159	"	6	加曾利EⅢ	口縁部	142.1	64・174と接合	215	"	6	加曾利EⅢ	胴部	13.5	
160	380-550G	6	加曾利EⅢ	胴部	101.8		216	"	7	加曾利EⅢ	胴部	12.7	
161	"	6	加曾利EⅢ	胴部	16.8		217	トレンチ	6	加曾利EⅢ	口縁部	90.6	163と接合
							218	B区	?	加曾利EⅢ	胴部	42.1	
							219	"	?	加曾利EⅢ	胴部	26.3	
							220	"	?	加曾利EⅢ	胴部	11.9	
							221	"	?	加曾利BⅡ	胴部	6.9	

Ⅲ 自然科学分析

1. 火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

赤城火山南麓とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された前橋市西大室上諏訪遺跡においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行い、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象地点は、A区西～西南壁、380-510グリッド、395-520グリッド、2号住居址A-A'セクション、395-525グリッドの5地点である。

2. 土層の層序

(1) A区西～西南壁

A区西～西南壁では、下位より灰褐色砂質土（層厚11cm）、暗灰褐色土（層厚15cm）、黄灰色軽石混じり黒灰色土（層厚16cm、軽石の最大径3mm）、灰色砂層（層厚6cm、溝の覆土）、白色軽石を含む砂混じり暗灰色土（層厚12cm、軽石の最大径11mm）、砂に富む灰褐色土（層厚5cm）、灰褐色土（層厚7cm）、暗灰褐色土（層厚7cm）、灰褐色粗粒火山灰層（層厚2cm）、褐色砂質土（層厚6cm）、灰褐色土（層厚2cm）、灰色土（層厚15cm）、道路盛土（層厚33cm）が認められた（図3）。

(2) 380-510グリッド

380-510グリッドの排水溝壁面では、下位より暗灰褐色土（層厚13cm以上）、黄色細粒軽石混じり灰色砂層（層厚21cm、軽石の最大径3mm）、黒褐色土（層厚15cm）、灰色粘土質シルト層（層厚10cm）、黄灰色シルト層（層厚9cm）、砂混じり灰色シルト層（層厚19cm）、褐色軽石混じり灰褐色砂質土（層厚7cm、軽石の最大径4mm）が認められた（図1）。

(3) 395-520グリッド

380-510グリッドの排水溝壁面では、下位より黄色軽石混じり灰色砂層（層厚15cm、軽石の最大径5mm）、暗灰色砂質土（層厚12cm）、灰色シルト層（層厚3cm）、黒褐色泥層（層厚3cm）、灰色砂層（層厚1cm）、黒褐色泥層（層厚8cm）、灰色シルト層（層厚10cm）、暗灰色シルト層（層厚8cm）、砂混じり灰色シルト層（層厚37cm）、円磨された褐色軽石混じり黄灰色砂層（層厚11cm、軽石の最大径3mm）が認められた（図4）。

(4) 2号住居址A-A'セクション

2号住居址A-A'セクションにおける覆土は、下位より砂混じり黒灰褐色土（層厚8cm）、黒灰褐色土（層

Ⅲ 自然科学分析

厚10cm)、灰白色軽石混じり黒灰褐色土 (層厚7cm, 軽石の最大径4mm) からなる (図2)。

(5) 395-525グリッド

395-525グリッドでは、下位より黄褐色土 (層厚30cm以上)、黄褐色砂質土 (層厚20cm)、黄色砂層 (層厚10cm)、灰褐色砂質土 (層厚13cm)、暗灰色砂質土 (層厚20cm)、黄色軽石混じり灰色砂層 (層厚23cm, 軽石の最大径6mm)、暗灰色砂質泥層 (層厚11cm)、砂混じり黒灰色泥層 (層厚4cm)、黒褐色泥層 (層厚8cm)、灰色シルト層 (層厚13cm)、灰色シルト質砂層 (層厚23cm)、黄灰色砂層 (層厚21cm) が認められる (図5)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

指標テフラの層位を明らかにするために、A区西～西南壁、380-510グリッド、395-520グリッド、2号住居址A-A'セクション、395-525グリッドにおいて基本的に5cmごとに採取された試料のうち、37点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。A区西～西南壁では、試料7と試料4を除く試料9より上位の試料から軽石が検出される。この地点で検出される軽石は、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石 (最大径2.7mm)、さほど発泡が良くない白色軽石 (最大径2.4mm)、比較的良く発泡した淡褐色軽石 (最大径2.6mm) の3種類である。斑晶としては、順に斜方輝石や単斜輝石、角閃石や斜方輝石、斜方輝石や単斜輝石が認められる。火山ガラスとしては、これらの軽石の細粒物がそれぞれ認められる。軽石の産状から、試料9付近に灰白色軽石と白色軽石で各々特徴づけられるテフラがあると考えられる。また試料1のテフラ層は、淡褐色軽石で特徴づけられると考えられる。

380-510グリッドでは、試料1に白色軽石 (最大径2.5mm) が比較的多く含まれている。この試料には、さらに白色の軽石型ガラスや無色透明のバブル型ガラスも比較的多く含まれている。火山ガラスとしては、試料19や試料17に、無色透明の軽石型ガラスやバブル型ガラスが少量含まれている。そのほかに斜長石の結晶が多く認められる。試料15や試料13には、無色透明の軽石型ガラスが少量含まれている。さらに試料13には、ごく少量ながら淡褐色のバブル型ガラスが認められる。試料12から試料10にかけては、火山ガラスが比較的多く含まれる傾向にある。火山ガラスとしては、無色透明の軽石型ガラスやバブル型ガラスが多いが、とくに試料11には白色の軽石型ガラスも比較的多く認められる。また試料9には白色の軽石型ガラス、試料5には無色透明の軽石型ガラス、試料3には白色の軽石型ガラスが少量含まれている。

395-520グリッドでは、試料3にわずかながら無色透明の軽石型ガラスが少量認められた。テフラ粒子の産状から試料5や試料3が採取された堆積物についてはテフラの可能性は低い。

2号住居址A-A'セクションでは、いずれの試料からもスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石を (最大径3.7mm) を検出することができる。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料1には、ほ

かにさほど発泡が良くない白色軽石（最大径2.5mm）が少量含まれている。この軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。なお火山ガラスとしては、これらの軽石の細粒物が認められる。

395-525グリッドでは、試料9に細粒の黄白色軽石（最大径1.9mm）が少量含まれている。火山ガラスは、いずれの試料でも認められるが、試料13から試料11にかけて、また試料3から試料1にかけて、比較的多く認められる。火山ガラスとしては、前者において無色透明や白色の軽石型ガラス、後者では白色の軽石型ガラスや無色透明のバブル型ガラスが含まれている。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

380-510グリッド及び395-525グリッドにおける調査分析で特徴的なテフラ粒子が認められた試料のうち、前者は試料19、試料15、試料11の3試料を対象に、後者は火山ガラスが比較的多く認められた試料11、少量ながら黄白色軽石が含まれている試料9、白色軽石型の火山ガラスが比較的多く認められた試料1の3試料を対象に、日本列島とその周辺におけるテフラカタログの作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。380-510グリッドの試料19に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.501-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.708-1.711である。試料15に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.501-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごくわずかに角閃石が認められる。斜方輝石と角閃石の屈折率（ γ ， n_2 ）は、各々1.707-1.711と1.675-1.694である。試料11には、重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごくわずかに角閃石が認められる。斜方輝石と角閃石の屈折率（ γ ， n_2 ）は、各々1.707-1.711と1.690-1.694である。

395-525グリッドの試料11に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.502-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.707-1.711である。試料9に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.502-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.708-1.711である。試料1には、重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごくわずかに角閃石が含まれている。斜方輝石と角閃石の屈折率（ γ ， n_2 ）は、各々1.706-1.710と1.691-1.695である。

5. 考察

380-510グリッドの排水溝壁面では、とくに赤城火山南麓とその周辺で特徴的な層相をもつ、約1.9～2.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井，1962，早田，1996，未公表資料）や、約1.3～1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1962，町田・新井，1992）などの軽石質テフラ層や、約2.4～2.5万年前*1に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，村山，1993，池田ほか，1995）などのガラス質テフラ層は認められなかった。また、ATに特徴的な無色透明のバブル型ガラスの濃集層準も検出されなかった。

分析試料の中では、最下位付近に層位にある試料19や試料17で斜長石が多く認められる傾向がある。さらに試料19に含まれる火山ガラスの色調、形態、屈折率、重鉱物の組合せ、さらに斜方輝石の屈折率などは、この試料にAs-YPに由来するテフラ粒子が多く含まれていることを示している。テフラ粒子の産状は、これらの試

Ⅲ 自然科学分析

料の層位がAs-YPのすぐ上位にあることを示唆しているように思える。

試料15や試料13に含まれるテフラ粒子の多くについては、As-YPのほか、約1.1万年前*1に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj, 早田, 1990, 1996)などに由来すると考えられる。また、試料13にごくわずかながら含まれている淡褐色のバブル型ガラスについては、その特徴から約6,300年前*1に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978)に由来する可能性が考えられる。なお、これらの試料に含まれる角閃石の起源や噴出年代については、現在のところ不明である。

以上のように、現段階において得られている資料からは、380-510グリッドの排水溝壁面で認められる土層の層位については、As-YPより上位で、As-Cより下位にある可能性が高いように思われる。このような層位にある水成の砂質堆積物については、伊勢崎市波志江中屋敷東遺跡における調査の際にも検出されており、その直下の泥炭層から、6650±60y.BP (Beta-125275) や6490±60y.BP (Beta-125276) の14C年代が得られている。また直下付近にある土坑(21号土坑)から検出された炭化材については6020±70y.BP (Beta-129389)、同層準にある樹木株からは6090±60y.BP (Beta-129390) の14C年代が得られている(以上、古環境研究所, 2002)。

また、その上位の土層の観察およびテフラ検出分析により検出された3種類の軽石のうち、灰白色軽石については、その岩相から3世紀終末～4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000)に由来すると考えられる。またさほど発泡が良くない白色軽石については、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると思われる。テフラの分布と本遺跡の位置関係からは、前者の可能性がより高いと考えられる。さらに淡褐色軽石については、岩相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。したがって、A区西～西南壁の試料1の粗粒火山灰層については、As-Bに同定される。

これらのことから、2号住居址については、旧地表面の把握およびその土層の分析が困難なことから正確な層位の把握は難しいが、As-Cより上位で、Hr-FAより下位の可能性が考えられる。またA区西～西南壁で認められた溝の層位については、Hr-FAより上位で、As-Bより下位にあると推定される。

395-525グリッドの試料11や試料9に含まれるテフラ粒子は、軽石の色調、火山ガラスの色調、形態、屈折率、重鉱物の組合せ、さらに斜方輝石の屈折率などから、約1.3～1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来する可能性が高いと考えられる。したがって、砂質の層相を呈する土層の中で、火山ガラスが比較的多く出現しはじめる試料13付近にその降灰層準があると推定できよう。

試料1に含まれる白色軽石については、斑晶に角閃石が特徴的に含まれている可能性があることや、角閃石の屈折率などから、榛名火山のほか妙高火山などの噴火に由来する可能性も考えられる。完新世中期と思われるこの時代の榛名火山の噴火についてはあまり資料が得られていないが、妙高火山については約5,500～6,000年前*1や4,000～4500年前*1に噴火したことが知られている(早津・新井, 1980, 早津, 1985, 町田・新井, 1992)。今後の資料の蓄積をまって、高精度のテフラ同定を行いたい。なおこの試料に含まれる斜方輝石の中には、その屈折率から約5,400年前*1に浅間火山から噴出したと考えられている浅間六合軽石(As-Kn, 早田, 1991, 1996)あるいはそれに関係したものが含まれている可能性もある。

6. まとめ

西大室上諏訪遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、少なくとも下位より浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 1.3~1.4万年前* 1)、浅間C軽石 (As-C, 3世紀終末~4世紀初頭)、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭) あるいは榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 6世紀中葉)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年) などの指標テフラやそれらに由来するテフラ粒子を検出することができた。また395-525グリッドにおいて角閃石で特徴づけられるテフラの降灰層準を明らかにすることができた。本地点で認められる水成堆積物の層位は、これらのテフラのさらに上位にある。

* 1 放射性炭素 (14C) 年代。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器 14C年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.
- 古環境研究所 (2002) テフラ分析と放射性炭素 (14C) 年代測定. 日本道路公団・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中屋敷東遺跡」, p.263-279.
- 早津賢二 (1985) 妙高火山群—その地質と活動史—. 第一法規, 344p.
- 早津賢二・新井房夫 (1980) 妙高火山群テフラ地域の第四紀テフラ層—示標テフラ層の記載および火山活動との関係—. 地質雑, 86, p.243-263.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代. 地質雑, 99, p.787-798.
- 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

Ⅲ 自然科学分析

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.

早田 勉 (1990) 群馬の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p.39-129.

早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.

早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて－. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

友廣哲也 (1988) 古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.

若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
A区西～西南壁	1	+++	淡褐	2.6	+++	pm	淡褐
	2	++	灰白	2.0	++	pm	灰白
	3	++	灰白,白	1.5,1.2	++	pm	灰白,白
	4	—	—	—	+	pm	灰白,白
	5	++	白,灰白	2.4,1.7	++	pm	灰白,白
	7	—	—	—	+	pm	灰白
	9	++	灰白,白	2.7,1.3	+	pm	灰白,白
	11	—	—	—	—	—	—
	13	—	—	—	—	—	—
	15	—	—	—	—	—	—

1. 火山灰分析

380-510グリッド	1	++	白	2.5	++	pm > bw	白,透明
	3	-	-	-	+	pm	白
	5	-	-	-	+	pm	透明
	7	-	-	-	-	-	-
	9	-	-	-	+	pm	白
	10	-	-	-	++	pm > bw	透明
	11	-	-	-	++	pm > bw	白,透明
	12	-	-	-	++	pm	透明
	13	-	-	-	+	pm > bw	透明,淡褐
	15	-	-	-	+	pm	透明
	17	-	-	-	+	pm > bw	透明
	19	-	-	-	+	pm	透明
395-520グリッド	3	-	-	-	+	pm	透明
	5	-	-	-	-	-	-
2号住居址A-A'	1	++	灰白,白	3.7,2.5	++	pm	灰白,白
	3	++	灰白	1.8	++	pm	灰白
	5	++	灰白	3.9	++	pm	灰白
395-525グリッド	1	-	-	-	++	pm	白
	3	-	-	-	++	pm > bw	白,透明
	5	-	-	-	+	pm	透明,白
	7	-	-	-	+	pm	透明,白
	9	+	黄白	1.9	++	pm	透明,白
	11	-	-	-	++	pm	透明,白
	13	-	-	-	++	pm	透明,白
	15	-	-	-	+	pm	白,透明
	17	-	-	-	+	pm	白,透明
	19	-	-	-	+	pm	白,透明

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位はmm.
bw: バブル型, pm: 軽石型.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n2)
380-510グリッド	11	—	opx > cpx, (ho)	1.707-1.711	1.690-1.694
380-510グリッド	15	1.501-1.504	opx > cpx, (ho)	1.707-1.711	1.675-1.694
380-510グリッド	19	1.501-1.504	opx > cpx	1.708-1.711	—
395-525グリッド	1	—	opx > cpx, (ho)	1.706-1.710	1.691-1.695
395-525グリッド	9	1.502-1.505	opx > cpx	1.708-1.711	—
395-525グリッド	19	1.502-1.504	opx > cpx	1.707-1.711	—

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）による。opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石。（ ）は、量が少ないことを示す。

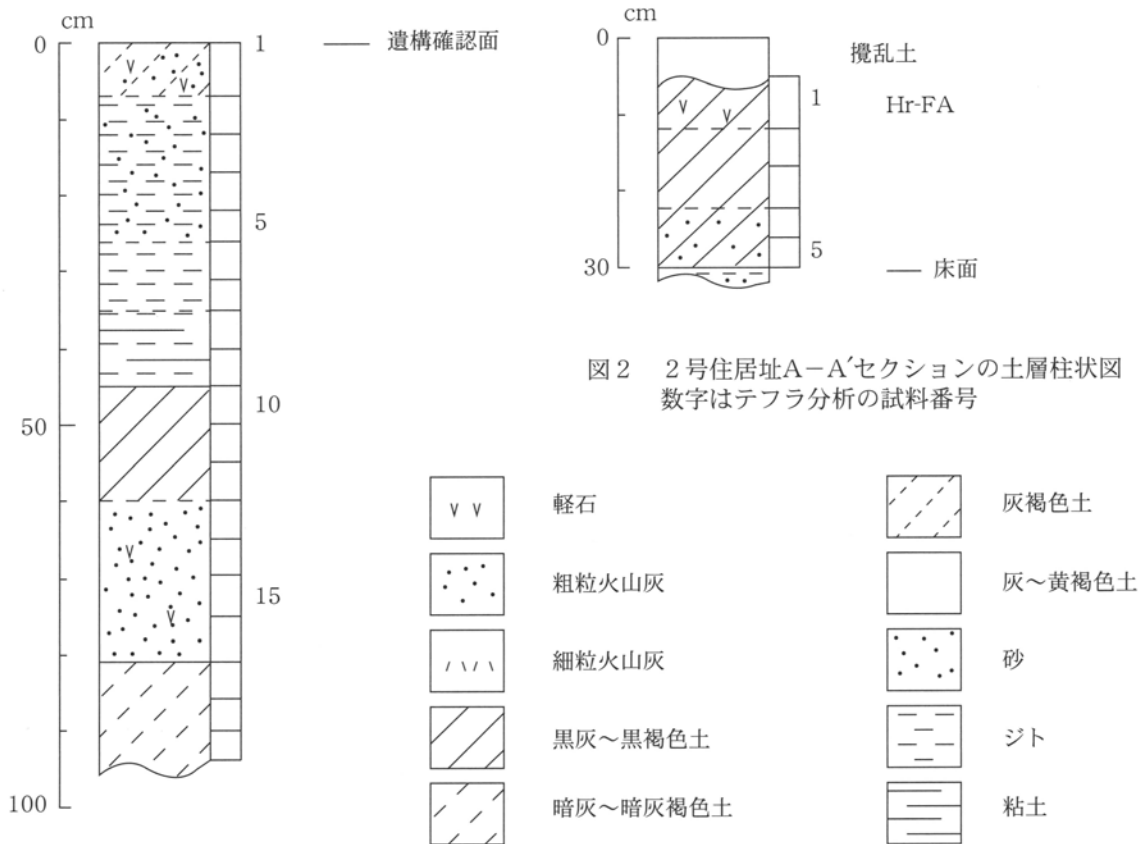


図1 380-510グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

図2 2号住居址A-A'セクションの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

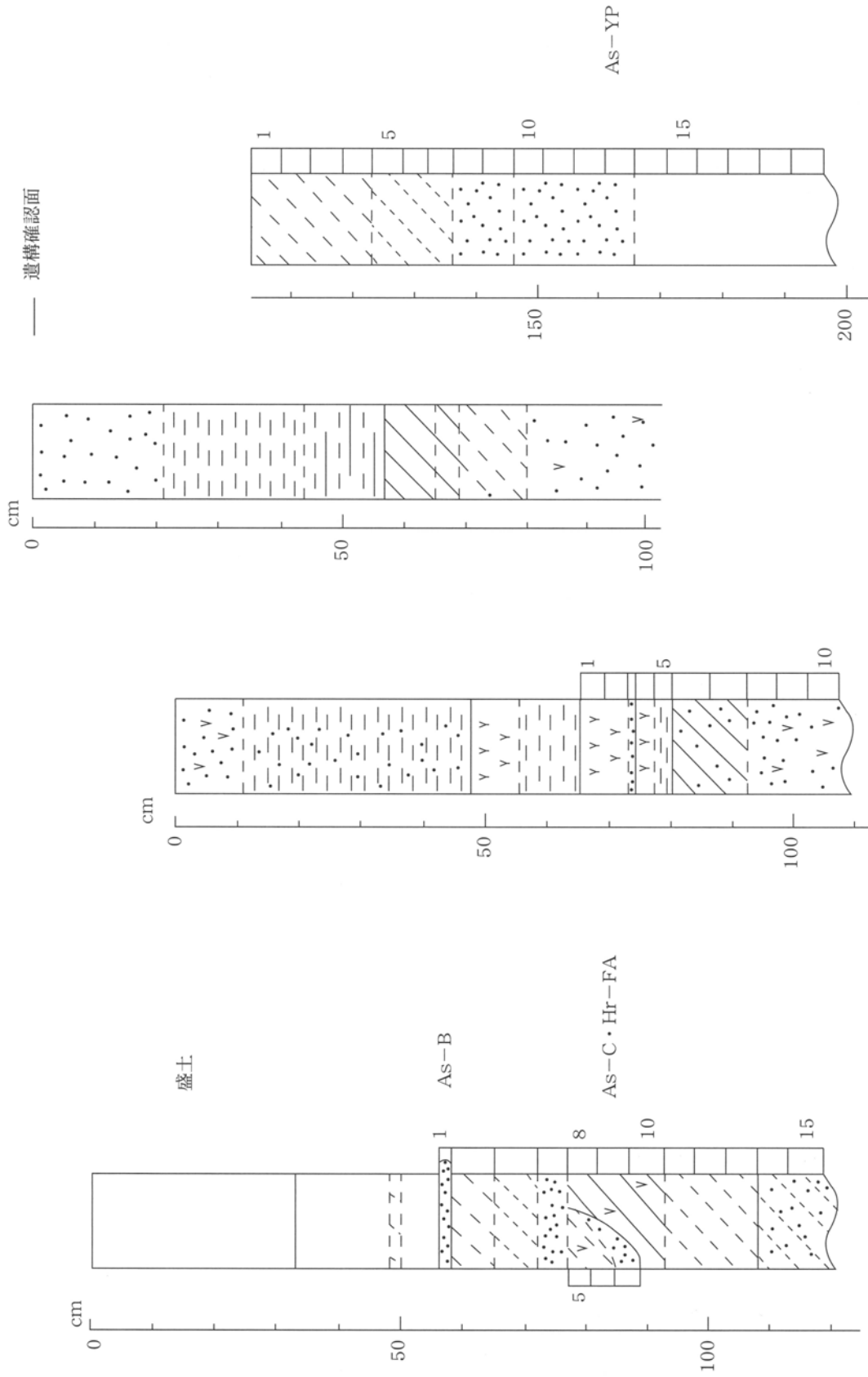


図3 A区西～西南壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

図4 395-520グリッド
数字はテフラ分析の試料番号

図5 395-525グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

2. 1号住居出土炭化材の樹種同定

(株) パレオ・ラボ

1. はじめに

ここでは、古墳時代前期の焼失家屋A区1号住居跡から出土した炭化材10点の樹種同定結果を報告する。これらの炭化材は、出土産状から屋根材と推測されているものである。

2. 方法

炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、広葉樹材で管孔配列の特徴から種類を特定できるものはこの段階で同定し、それ以外の試料は材の3方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大し材組織を観察して同定する。走査電子顕微鏡用の試料は、3方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果

同定の結果は、10試料のうち9点がコナラ節で、1点がクヌギ節であった（表1）。No.1・4・5・7・9は、比較的残存状況が良く、丸太材というよりは分割材であったように思われる。No.6は、柾目板状の破片であった。コナラ節の年輪幅は1～1.5mmほどで、クヌギ節は2～3mmであり、クヌギ節の方がコナラ節より年輪幅が広がった。

材組織

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Q.* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 1a-1c (No.5)、2 (No.1)、3 (No.3)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、その後は急に径を減じ非常に小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は単列と細胞幅が非常に広い集合状のものがある。道管と放射組織との壁孔は、孔口が広く、交互状や柵状である。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q.* subgen. *Q.* sect. *Cerris* ブナ科 図版1 4 (No.2)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、その後は急に径を減じ小型で厚壁の管孔が放射状に配列する環孔材。接線断面と放射断面は前述のコナラ節と同様である。

4. まとめ

古墳時代には建築材にコナラ節とクヌギ節が多く利用されていた事が知られているが、当住居跡でも同様な結果が確認された。当住居跡では、コナラ節がクヌギ節より多く利用されていたようであり、分割材と思われる40～50年輪数が数えられる炭化材が多く観察された。

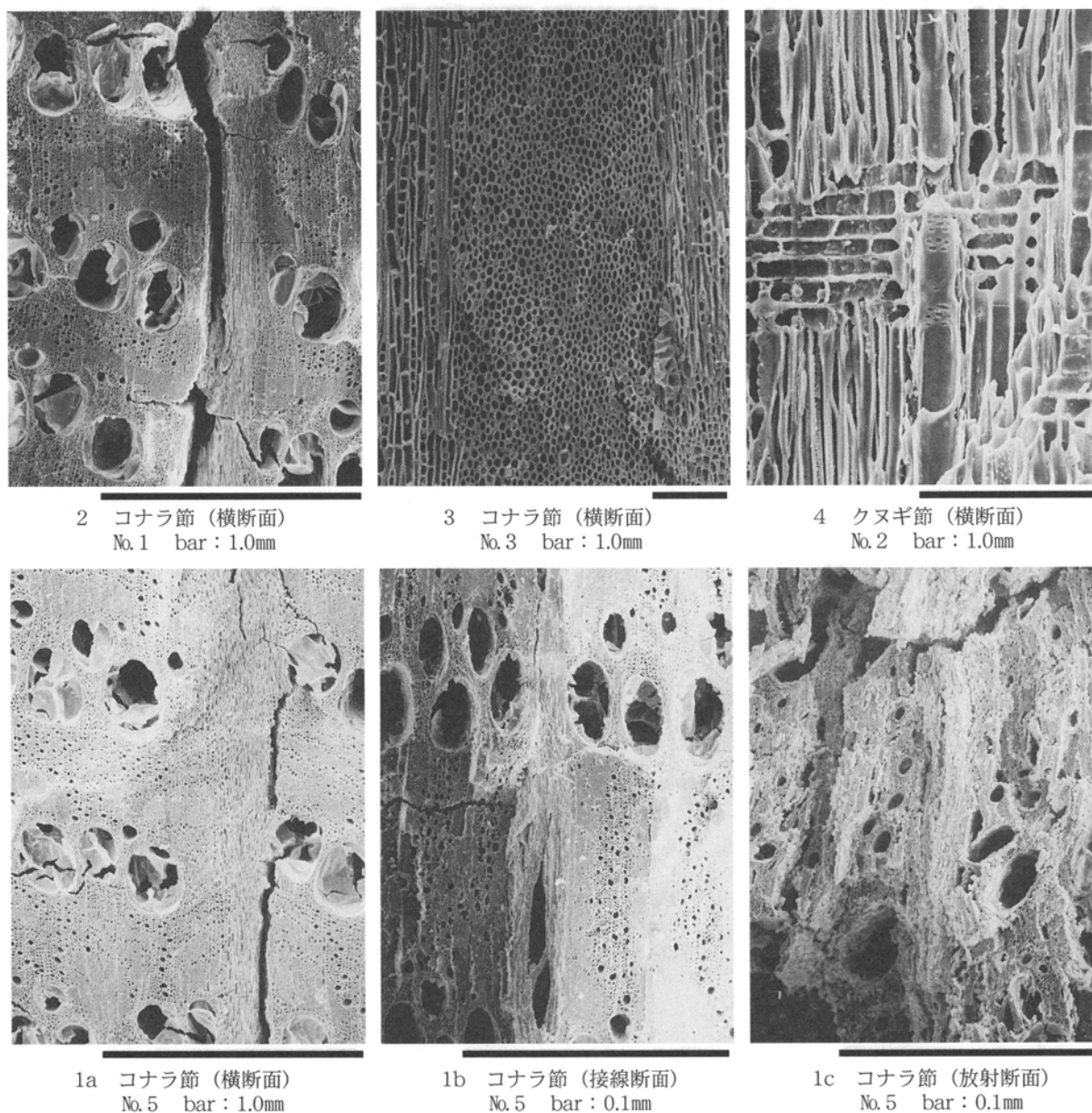
コナラ節とクヌギ節は、落葉広葉樹林や二次林に多く生育する落葉高木である。コナラ節やクヌギ節が住居建築材に多く利用されていた背景には、材質が建築材に適材であると共に、豊富に生育していて入手容易であった事が推測される。

2. 1号住居出土炭化材の樹種同定

表1 1号住居出土炭化材樹種同定結果

遺構	炭化材No.	樹種	形状	備考
1号住居	No.1	コナラ節	分割材?	放射径4.1cmで46年輪あり
1号住居	No.2	クヌギ節	破片	1年輪は2~3mm
1号住居	No.3	コナラ節	薄い破片	放射径3.7cmで24年輪あり
1号住居	No.4	コナラ節	分割材?	一部生焼け
1号住居	No.5	コナラ節	1/6分割材?	放射径5.5cmで36年輪あり
1号住居	No.6	コナラ節	柁目板状	放射径47cmで51年輪あり
1号住居	No.7	コナラ節	芯持ち1/4~1/6分割材?	放射径5.3cmで39年輪あり
1号住居	No.8	コナラ節	薄い破片	放射径2.2cmで26年輪あり
1号住居	No.9	コナラ節	分割材?	1年輪は1mm前後
1号住居	No.10	コナラ節	小破片	

図版1 1号住居出土炭化材樹種の走査電子顕微鏡写真



IV まとめ

西大室上諏訪遺跡4号・5号住居出土土器について

1. 目的

本稿は、西大室上諏訪遺跡4号住居および5号住居から出土した土器を編年的に位置づけることを目的とする。

2. 資料の抽出

(1) 4号住居 (P28~32)

本住居からは床面および覆土から多量の土器が出土している。本住居の場合、壁高が40~60cmであり、全ての出土遺物を等価に扱うことはできない。故に、その出土状況から考慮して、床面(ピット内・貯蔵穴内出土を含む)および覆土下層(~床上5cm・覆土6層)の資料をまとまりのある土器群とする。

器種は甕(4住-17・18・31・32・33・35・39・41・45・46・47・52・58)、台付甕(4住-19・53・55)、壺(4住-43・44)、高坏(4住-2・7・11・12・15)、器台?(4住-16)、鉢(4住-3・4)である。なお、器種が確定できないもの(4住-1・10・13・14・23)もある。

(2) 5号住居 (P37・38)

本住居からは床面および覆土から良好な土器群が出土している。本住居の場合、壁高が3~10cmということもあり、かつ、その出土状況から廃棄時の一括性は極めて高い。故に、ここでは出土遺物をまとまりある土器群と考える。

器種は甕(5住-3・4・5・6・7・8・9・10)、壺(5住-2)、鉢(5住-1)、片口(5住-12)である。なお、器種が確定できないもの(5住-11)もある。

3. 資料の観察

(1) 4号住居 (図1)

甕では、その様相が把握できる資料は(4住-31・32・33・39)である。甕31は口縁~頸部のみが残存する資料であり、器高推定が困難である。形態的には、口縁は短く、外反し、口縁端部では肥厚化する。

頸部は緩やかに屈曲するものと推定される。技法的には、口縁部および体部にはやや乱れた櫛描文を施し、頸部には簾状文(3連止め)を施している。内面全体には丁寧なミガキ(横方向)を施している。甕32は残存高22.3cm(推定器高約23cm)を測る。形態的には、口縁は直線的に開き、頸部は緩やかに屈曲、体部中位に最大径をもつという特徴をもつ(底部は不明)。技法的には、口縁部外面には6段の輪積を露にし、そこに縄文(単節RL)を施している。体部には上半のみに縄文(単節RL)を施し、下半は丁寧なミガキ(縦方向)を施している。内面全体には丁寧なミガキ(横方向)を施している。甕33は器高20.8cmを測る。形態的には、口縁が直線的に開き、頸部は屈曲し、体部中位に最大径をもち、平底という特徴をもつ。技法的には、口縁部外面には4段の輪積を露にし、口唇部には縄文(単節RL)を施す。体部には上半のみに縄文(単節RL)を施し、下半は丁寧なミガキ(縦~斜方向)を施している。内面全体には丁寧なミガキ(横方向)を施している。甕39は残存高14.8cm(推定器高約20cm)を測る。形態的には、口縁がわずかに外反し、頸部は緩やかに屈曲し、体部中位に最大径をもつという特徴をもつ(底部は不明)。技法的には、口縁部外面にはヘラケズリ後ハケ調整を施し、体部には全面、丁寧なミガキ(縦方向)を施している。内面全体には丁寧なミガキ(横方向)を施している。

台付甕では、その様相が把握できる資料は(4住-19・55)である。台付甕19は、器高11.6cmを測る。形態的には、口縁が短く開き、頸部は屈曲し、体部中位に最大径をもち、短い台が付くという特徴をもつ。技法的には、口縁部はヨコナデ、体部には上半のみに縄文(単節)を施し、下半はミガキ(縦方向)を施している。内面全体にはミガキ(横~斜方向)を施している。台付甕55は、台部のみであるが、S

字状口縁台付甕である。技法的には、外面にはハケを施し、内面にはナデを施している。端部が欠損しているため、端部折り返しの有無は不明である。

壺では、その様相が把握できる資料は(4住-43・44)である。壺43は口縁部のみであるが、口径が19.9cmを測ることから推測して、推定器高40cm程度が考えられる。形態的には大きく外反し、端部が肥厚する。技法的には外面でミガキ(縦方向)、内面でもミガキ(横方向)を施している。壺44は口縁部のみであるが、口径が9.6cmを測ることから推測して、推定器高15~20cmが考えられる。形態的には口縁部は直線的に開く。技法的には外面でミガキ(斜方向)、内面でもミガキ(横方向)を施している。

高坏では、その様相が把握できる資料は(4住-7・11・15)である。高坏7は坏部のみであるが、その口径が13.0cmを測ることから、高坏15と同様の小形高坏と推定される。形態的には、端部は丸く収められ、わずかに内湾気味に開く坏部である。技法的には、外面でミガキ(横~斜方向)、内面でもミガキ(横方向)を施している。高坏11は坏部のみであるが、その口径が20cm以上を測ることから、大形高坏と推定される。形態的には、端部は丸く収められ、やや内湾気味に大きく開く坏部である。技法的には、外面でミガキ(横方向)、内面でもミガキ(横~斜方向)を施している。高坏15は器高10.3cmを測

る。形態的には、浅く、口縁と体部の境目に明確な稜を持たず、端部が丸く収められてる坏部と、大きく外反し、柱部と裾部の境目で屈曲する脚部とで構成されている。なお、脚部には円孔が互目状に3孔ずつ開けられている。技法的には、坏部・脚部外面でミガキ(縦方向)、坏部・脚部内面でもミガキ(主に横方向)を施している。

器台は全体を把握できる資料がないものの、その可能性が高い資料は(4住-16)である。器台16は、脚部だけの資料である。形態的にはほぼ直線的にひらく脚部である。なお、円孔が互目状に3孔ずつ開けられていると推定される。技法的には、外面にはミガキ(横方向)と赤彩を施し、内面にはヘラナデを施している。

鉢では、その様相が把握できる資料は(4住-3・4)である。鉢3は器高4.5cmを測る。形態的には直線的に開く口縁~体部と、平底という特徴をもつ。技法的には外面にはミガキ(横方向)、内面にはミガキ(横~縦方向)を施している。鉢4は器高6.6cmを測る。形態的には僅かに内湾気味に開く口縁~体部と、平底という特徴をもつ。技法的には内外面ともミガキ(横方向)を施している。

(2) 5号住居(図2)

甕では、その様相が把握できる資料は(5住-3・4・5・7・9)である。甕3は残存高9.6cm(推定器

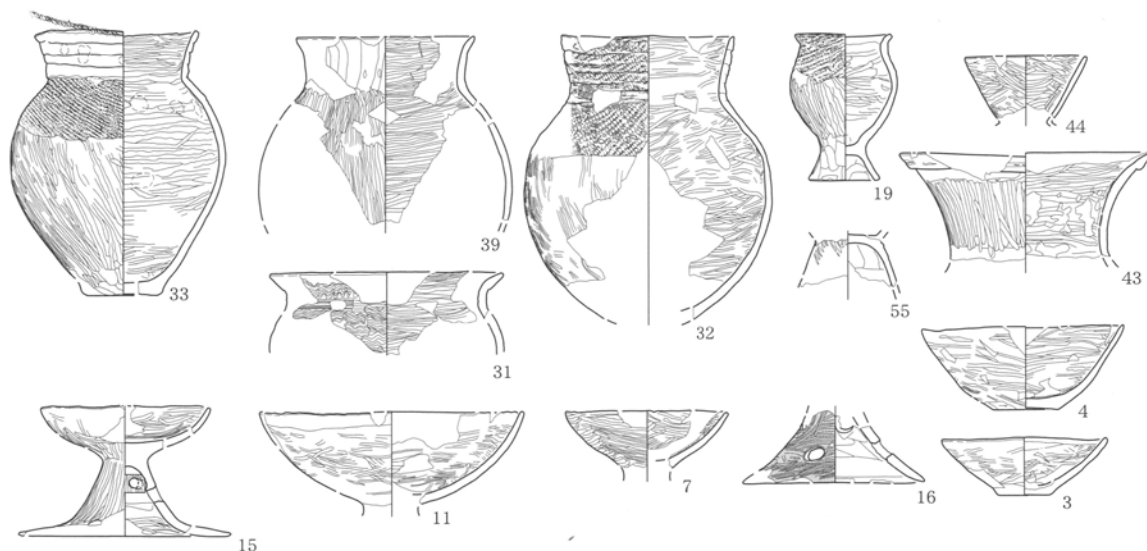


図1 4号住居出土遺物(検討資料のみ) s=1/6

IV まとめ

高約20cm)を測る。形態的には、口縁が直線的に開き、頸部は屈曲し、体部上～中位に最大径をもつという特徴をもつ(底部は不明)。技法的には、口縁部外面には3乃至4段の輪積を露にし、体部外面にはミガキ(横方向)を施す。口縁内面にはミガキ(横方向)、体部内面にはナデを施している。甕4は残存高9.2cm(推定器高約20cm)を測る。形態的には、口縁が直線的に開き、頸部は屈曲し、体部上～中位に最大径をもつという特徴をもつ(底部は不明)。技法的には、口縁部外面には3段の輪積を露にし、体部外面にはヘラケズリを施している。内面全体にはナデを施している。甕5は残存高8.7cm(推定器高約20cm)を測る。形態的には、口縁が直線的に開き(推定)、頸部は屈曲し、体部上～中位に最大径をもつという特徴をもつ(底部は不明)。技法的には、口縁部外面には2段以上の輪積を露にし、体部外面にはミガキ(斜方向)を施し、内面全体にはミガキ(横方向)を施している。甕7は、残存高10.5cm(推定器高約12cm)を測る。形態的には頸部は屈曲し、体部は中位に最大径をもち、平底という特徴をもつ。技法的には体部外面にはミガキ(斜方向)を施し、体部内面にはミガキ(斜～横方向)を施している。甕9は残存高16.9cm(推定器高約20cm)を測る。形態的には、口縁が大きく外反気味に開き、頸部は屈曲し、体部中位に最大径をもつという特徴をもつ(底部は不明)。技法的には、口縁～頸部外面はヘラケズリを施し、体部外面はミガキ(斜方向)を施す。口縁～体部上位内面はヘラナデを施し、体部下半内面

にはミガキ(斜方向)を施している。

壺・鉢・片口は、(5住-2・1・12)についてはそれぞれ様相が把握できる。壺2は、残存高12.8cm(推定器高約20cm)を測る。形態的には頸部は屈曲し、体部は中～下位に最大径をもつという特徴をもつ(底部は不明)。技法的には体部外面にはミガキ(横方向)を施し、頸部には刺突が施されている。頸部内面にはミガキ(横方向?)を施し、体部内面にはヘラナデを施している。鉢1は、器高9.0cmを測る。形態的には僅かに内湾気味に開く口縁～体部と、平底という特徴をもつ。技法的には外面ではミガキ(横方向)を施し、内面ではミガキ(縦～横方向)を施している。片口12は、器高8.0cmを測る。形態的には口縁部は内湾し、折り返しにより、肥厚化している。体では中位に最大径をもち、平底である。技法的には内外面ともはナデを施している。

4. 資料の分類

先に提示した4・5号住居の出土遺物は次のように分類できる。

甕(台付甕を含む)はA～Fに分類できる。

甕A…口縁に輪積み痕を露にする甕。内外面とも丁寧なミガキを施す特徴をもつ。器高は20cm程度。なお、器面縄文を施すものを甕A1(4住-32・33)、そうでないものを甕A2(5住-3・4・5)とする。

甕B…櫛描文を施す甕。内外面とも丁寧なミガキを施す特徴をもつ。(4住-31)。

甕C…外面の装飾はなく、外面にはミガキやナデ、内面にはミガキを施す甕。器高は20cm程度。

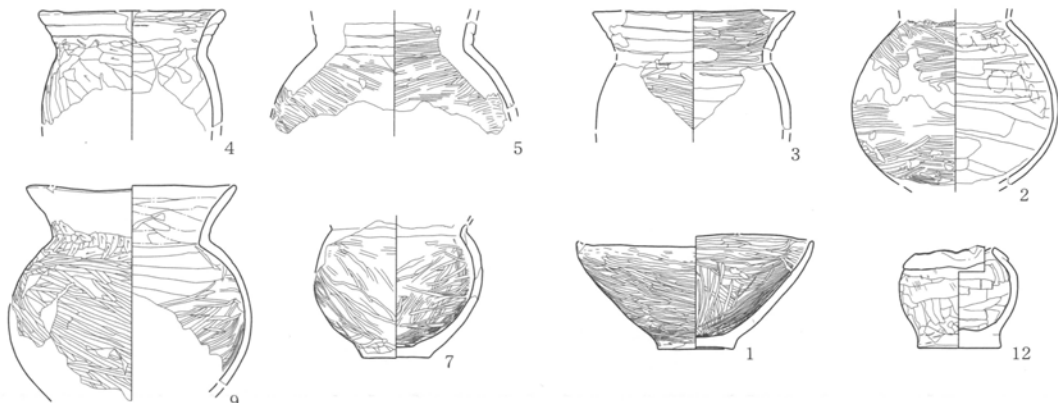


図2 5号住居出土遺物(検討資料のみ) s=1/6

(4住-39・5住-9)

甕D…外面の装飾はなく、外面にはミガキやナデ、内面にはミガキを施す甕。器高は12cm程度。

(5住-7)

甕E…S字状口縁台付甕 (4住-55)

甕F…器高10cm程度の台付甕。外面には縄文を施文。内外面ともミガキを施す。(4住-19)

壺はA～Cに分類できる。

壺A…口縁は長く、大きく外反し、端部が折り返しとなるもの。器高は40cm程度。(4住-43)

壺B…口縁は外斜し、体部が球形のもの。ミガキの多用はみられない。器高は20cm程度。(5住-2)

壺C…口縁が外斜し、体部が球形で、丁寧なミガキを施すもの。器高は15～20cm程度。(4住-44)

高坏はA～Bに分類できる。

高坏A…小型の坏部に裾広がりの脚部がつくもの (4住-7・15)

高坏B…大型の坏部に裾広がりの脚部がつくもの (4住-11)

器台・鉢・片口はそれぞれAのみとする。

器台A…小型で、赤彩を施すもの。(4住-16)

鉢A…小型で、平底のもの (4住-3・4、5住-1)

片口A…小型で口縁が折り返しのもの (5住-12)

5. 資料の検討

(1) 型式変化

甕については、「甕A1から甕A2へ」という変化(図3)が赤城山南麓地域では認められ(小島1983・若狭1990・深澤1999)、これに従うと、「4号住居の甕32・33(甕A1)→5号住居の甕3・4・5(甕A2)」という変化を認識できる。また、「甕Bから甕Cへ」という変化(図3)も認められ(若狭1990)、これに従うと、「4号住居の甕31(甕B)→4号住居の甕39・5号住居の甕9(甕C)」という変化を認識できる。

壺については、「壺Aから壺Bへ」という変化が想定でき(深澤1999)、これに従うと、「4号住居の壺43(壺A)→5号住居の壺2(壺B)」という変化が

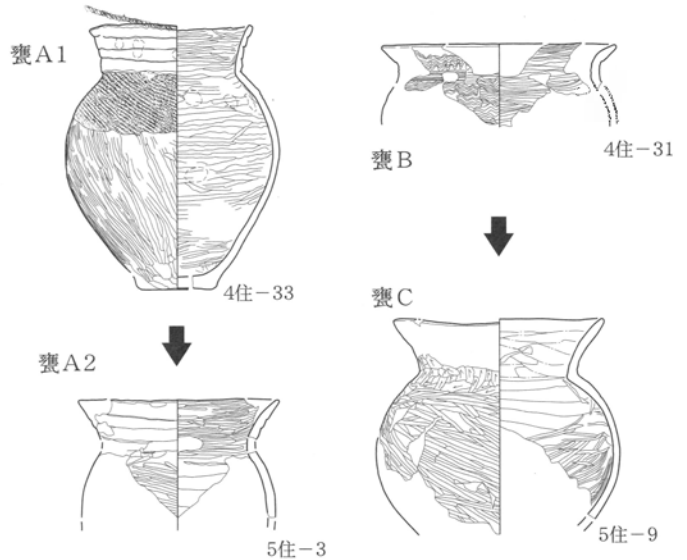


図3 甕の型式変化 s = 1/6

想定できる。

(2) 共伴関係

4号住居の出土遺物では、甕A1・B・C・E・F、壺A、高坏A・B、器台? A、鉢Aが共伴する。一方、5号住居の出土遺物では甕A2・C・甕D、壺B、鉢A、片口Aが共伴する。

これらの共伴関係では、高坏・器台?・鉢・片口ではその差異を認めることはできないものの、甕・壺では差異を認めることが可能である。

(3) 出土遺物の前後関係

上記の通り、型式変化とその共伴関係を考慮すると、「4号住居出土遺物→5号住居出土遺物」という前後関係が認められる。それは甕と壺の型式変化とその変化に矛盾することのない共伴関係によって裏付けられるものである。

6. 資料の位置づけ

では、このように前後関係が認識できる二つの住居の出土遺物であるが、それぞれはどのような編年的位置づけをすることができるのかについて検証する。

西大室上諏訪遺跡が位置する「赤城山南麓地域」においては、既に弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器変遷案(図4)(以下、深澤案)が提示されており(深澤1999)、それに準じる形で位置づけを図ってみたい。

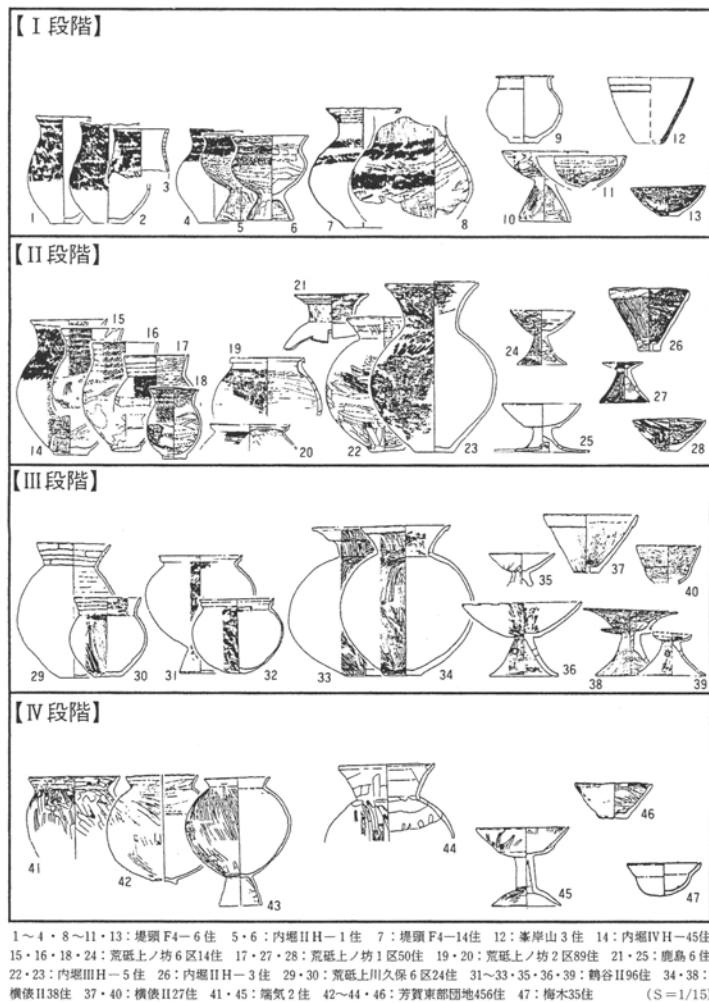


図4 赤城山南麓におけるI~IV段階の「吉ヶ谷式土器」と主な共伴土器 (深沢1999)

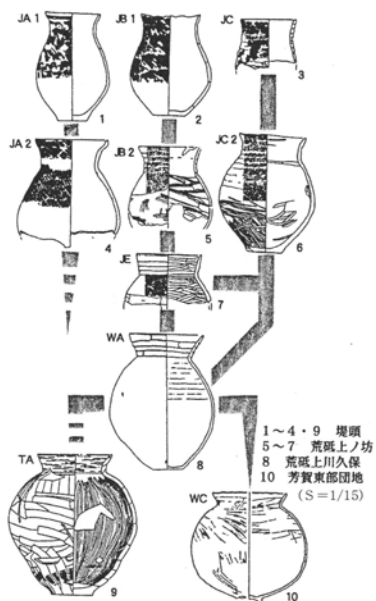


図5 吉ヶ谷式系甕の型式変化 (深沢1999)

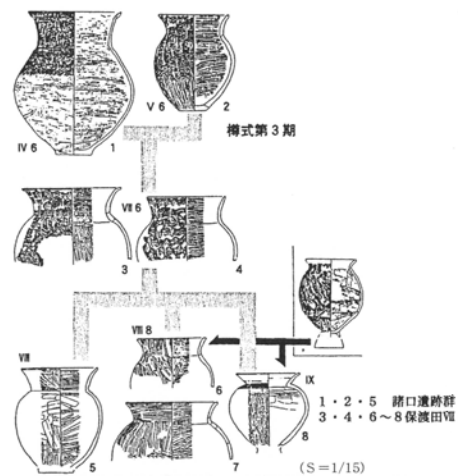


図6 樽式系甕の型式変化 (若狭1990)

(1) 甕の位置づけ (図5・6)

西大室上諏訪遺跡分類 (以下、「上諏訪分類」) の甕A1は縄文施文と輪積みとミガキ整形を指標とする型式であるが、これは、深澤案分類の甕Jと同型式のものである。また、上諏訪分類の甕A2は輪積みとミガキ整形を指標とする型式であるが、これは深澤案分類の甕Wと同型式のものである。さらに、上諏訪分類の甕Bは若狭編年における (若狭1990。以下同じ) 樽式系甕VII、本遺跡分類の甕Cは若狭編年における樽式系甕VIIIに相当する型式といえる。

(2) 壺の位置づけ

上諏訪分類の壺Aは破片資料のため、施文の全体状況は不明瞭だが、口縁の形態や推定器高などを考慮すると深澤案分類の壺GKまたは壺JBに相当する型式である。また、上諏訪分類の壺Bも口縁欠損資料のため、不明瞭な点もおおものの、深澤案分類の壺Wor壺Tに類似するものと考えられる。

(3) 本稿の結論

上記のとおり考えると、4号住居の出土土器は、上諏訪分類の「甕A1+壺A」の組み合わせであり、これは、深澤案分類の「甕J+壺GkorJB」の組み合わせに類似する。よって、赤城南麓地域の編年案に沿えば、II段階乃至III段階の「吉ヶ谷式系土器」とその共伴土器、と考えることができる。また、5号住居の出土土器は、上諏訪分類の「甕A2+壺B」の組み合わせであり、これは深澤案分類の「甕W+壺WorT」の組み合わせに類似する。よって、赤城南麓地域の編年案に沿えば、III段階の「吉ヶ谷式系土器」とその共伴土器、と考えることができる。

さらにこうした位置づけは、4号住居の出土土器に甕B・C (若狭編年の樽式系甕VII・VIII) が共伴するのに対し、5号住居の出土遺物には甕C (若狭編年の樽式系甕VIII) のみしか共伴しないという状況からも裏付けられるものである。

ところで、4号住居の出土遺物には甕Eが含まれている。底部のみの破片資料であること、かつ赤城南麓地域ということから、田口編年 (田口1981、2000) に直接当てはめることはできないものの、参

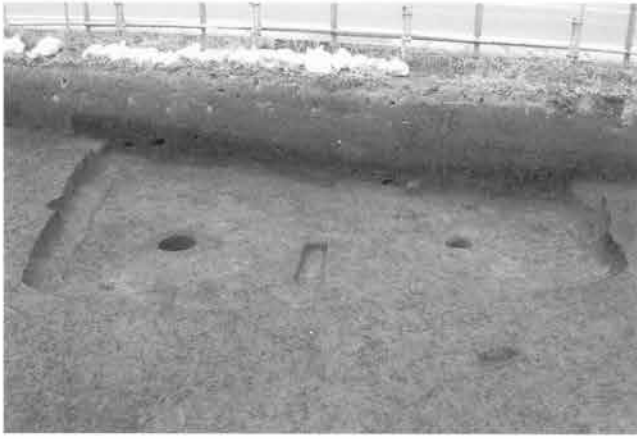
考とするならば、田口編年のII類乃至III類の可能性が高い。このことは4号住居の出土土器が「吉ヶ谷式系」II段階乃至III段階とすることにも矛盾をきたさない。

よって、こうした、複属性の検証を踏まえると、西大室上諏訪遺跡4号住居の出土土器はII段階乃至III段階の「吉ヶ谷式系土器」とその共伴土器、西大室上諏訪遺跡5号住居の出土土器はIII段階の「吉ヶ谷式系土器」とその共伴土器に位置づけることが妥当であり、このことを本稿の結論とする。

引用文献

- 小島純一 1983 「赤井戸式土器について—赤城山麓の後期弥生土器の一様相—」『人間・遺跡・遺物』
- 田口一郎 1981 『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字状口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』
- 若狭徹 1990 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』1
- 若狭徹 2000 「S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態—群馬県の場合—」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』
- 深澤敦仁 1998 「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究XVI』
- 深澤敦仁 1999 「『赤井戸式』土器の行方」『群馬考古学手帳』9

写 真 图 版



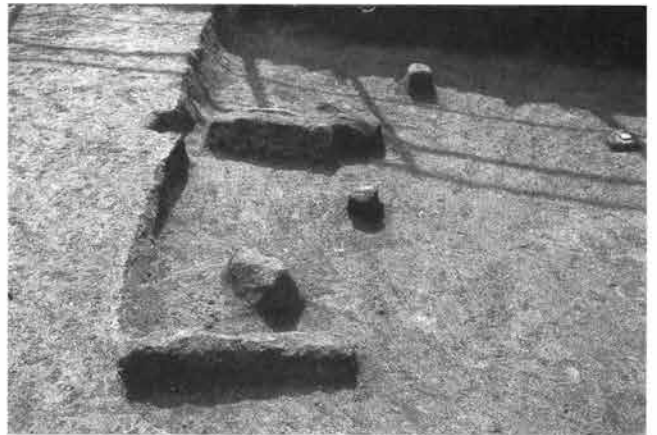
1. 1号住居 床面 全景 (東→)



2. 1号住居 床面及び覆土遺物出土状況全景 (東→)



3. 1号住居 南壁付近：壇状遺構 (北東→)



4. 1号住居 炭化材出土状況 (東→)



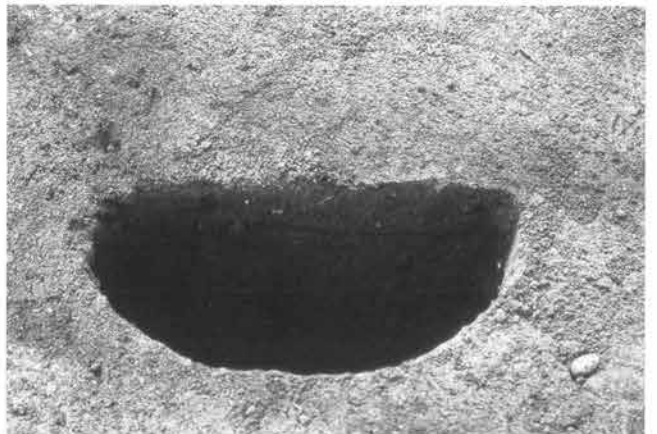
5. 1号住居 覆土断面A-A' (南→)



6. 1号住居 覆土断面B-B' (東→)



7. 1号住居 P-1 覆土断面C-C' (東→)

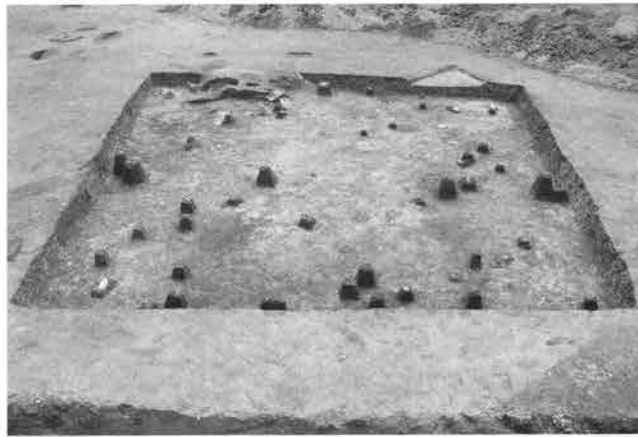


8. 1号住居 P-2 覆土断面C-C' (東→)

PL-2:2号住居



1. 2号住居 床面 全景 (東→)



2. 2号住居 覆土及び床面遺物出土状況 (東→)



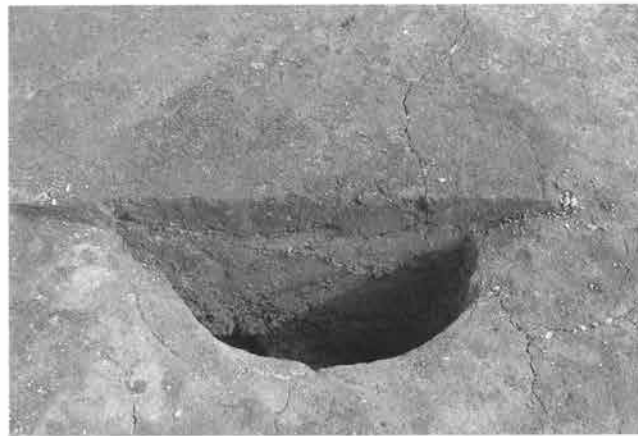
3. 2号住居 覆土断面A-A' (西→)



4. 2号住居 覆土断面B-B' (南→)



5. 2号住居 P-1 覆土断面D-D' (北→)



6. 2号住居 P-2 覆土断面D-D' (北→)



7. 2号住居 P-3 覆土断面C-C' (南→)



8. 2号住居 P-4 覆土断面C-C' (南→)



1. 2号住居 カマド・貯蔵穴 全景 (東→)



2. 2号住居 貯蔵穴 全景 (北→)



3. 2号住居 貯蔵穴 覆土断面G-G' (北→)



4. 2号住居 カマド確認状況 (東→)



5. 2号住居 カマド燃焼面検出状況 全景 (東→)



6. 2号住居 カマド 覆土断面E-E' (東→)



7. 2号住居 カマド内支脚検出状況 (東→)



8. 2号住居 カマド北脇 礎検出状況 (東→)



1. 2号住居 カマド 天井崩落土断面F-F' (南→)



1. 2号住居 カマド 壁体・天井崩落土断面F-F' (北→)



3. 2号住居 カマド 覆土断面F-F' (南東→)



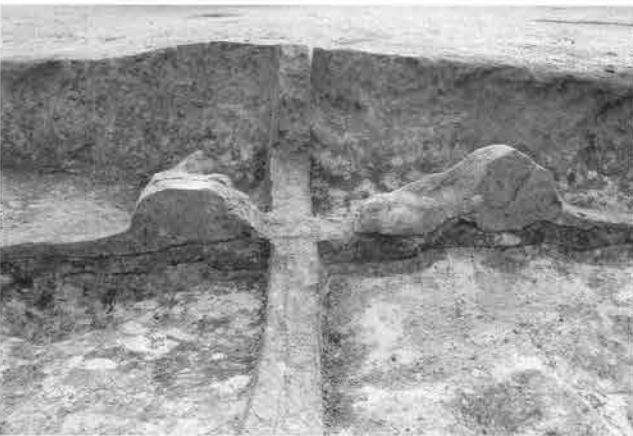
4. 2号住居 カマド 袖部検出状況 (東→)



5. 2号住居 カマド袖部下遺物検出状況 (東→)



6. 2号住居 カマド構築材除去状況 全景 (東→)



7. 2号住居 カマド 袖部断面E-E' (東→)



8. 2号住居 カマド 燃烧床面断面F-F' (北→)



1. 2号住居 床面掘り方 全景 (東→)



2. 2号住居 床面掘り方 間仕切り溝 (西→)



3. 2号住居 床面掘り方 壁際周溝 (東→)



4. 2号住居 床面掘り方 壁際周溝 (北→)



5. 2号住居 張床 断面A-A' (西→)



6. 2号住居 張床 断面B-B' (南→)



7. 3号住居 床面 全景 (南→)



8. 3号住居 覆土および床面 遺物出土状況 (南→)



1. 3号住居 覆土断面A-A' (西→)



2. 3号住居 覆土断面B-B' (南→)



3. 3号住居 床上 焼土および炭化物出土状況 (南→)



4. 3号住居 床上 焼土および炭化物出土状況 (北東→)



5. 3号住居 床上 焼土および炭化物 断面 (西→)



6. 3号住居 床面 間仕切り溝 (東→)



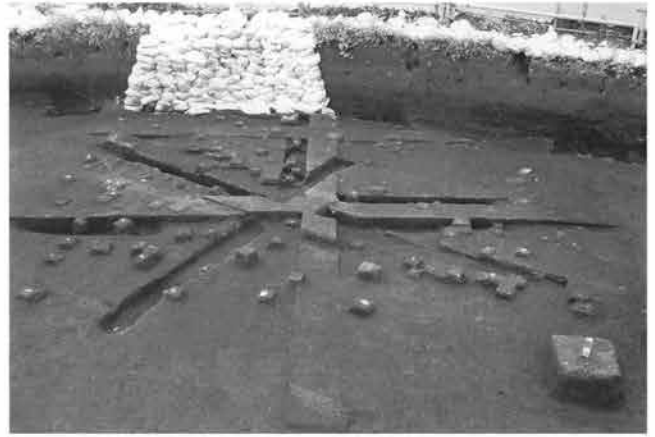
7. 3号住居 P-1 覆土断面C-C' (西→)



8. 3号住居 P-2 覆土断面C-C' (西→)



1. 4号住居 床面 全景 (北東→)



2. 4号住居 覆土上層 遺物出土状況 (北東→)



3. 4号住居 床面遺物出土状況 (その1) (北東→)



4. 4号住居 床面遺物 (No43) 出土状況 (その2) (東→)



5. 4号住居 覆土断面A-A' (北東→)



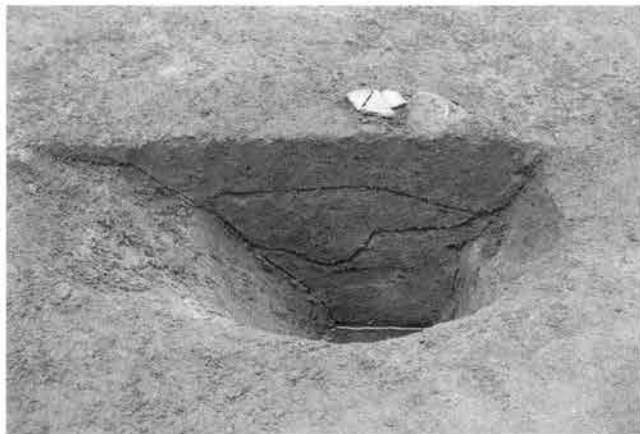
6. 4号住居 覆土断面B-B'南 (東→)



7. 4号住居 P-2内遺物 (No33・41) 出土状況 (南東→)



8. 4号住居 P-2 覆土断面C-C' (南東→)



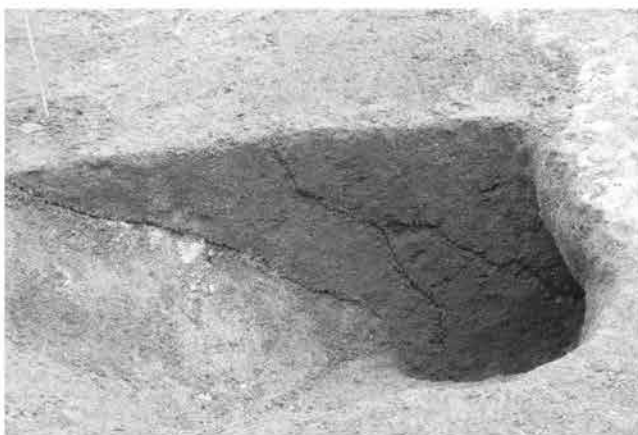
1. 4号住居 P-1 覆土断面D-D' (南東→)



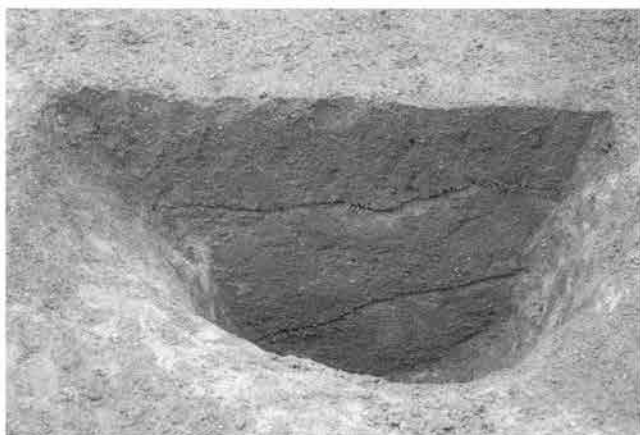
2. 4号住居 P-3 覆土断面C-C' (南東→)



3. 4号住居 P-4 覆土断面D-D' (南東→)



4. 4号住居 P-5 覆土断面H-H' (北東→)



5. 4号住居 貯蔵穴 覆土断面A-A' (北東→)



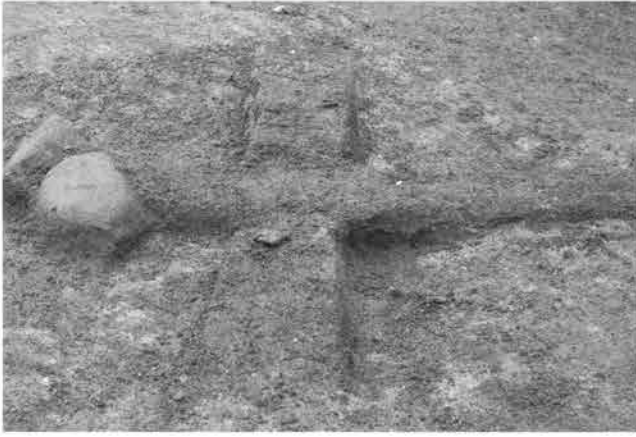
6. 4号住居 P-5及び貯蔵穴 全景 (北西→)



7. 4号住居 壁際周溝 (南東→)



8. 4号住居 炉 使用面 全景 (北西→)



1. 4号住居 炉 覆土断面E-E' (北東→)



2. 4号住居 炉 覆土断面F-F' (南東→)



3. 4号住居 炉 掘り方 全景 (南東→)



4. 4号住居 炉 掘り方断面E-E' (北東→)



4. 4号住居 炉 掘り方断面F-F' (南東→)



6. 5号住居 床面および覆土 遺物出土状況 全景 (南→)



7. 5号住居 床面 全景 (南→)



8. 5号住居 床面 南西隅 遺物出土状況 (東→)



1. 5号住居 覆土断面A-A' (西→)



2. 5号住居 覆土断面B-B' (南→)



3. 5号住居 P-1 覆土断面F-F' (東→)



4. 5号住居 P-2 覆土断面G-G' (西→)



5. 5号住居 P-3 覆土断面G-G' (西→)



6. 5号住居 貯蔵穴 覆土断面C-C' (東→)



7. 5号住居 床面 南西隅 遺物出土状況 (北→)



8. 5号住居 炉 使用面 全景 (南→)



1. 5号住居 炉 使用面 覆土断面D-D' (東→)



2. 5号住居 炉 使用面 覆土断E-E' (南→)



3. 5号住居 炉 掘り方 (北西→)



4. 5号住居 掘り方 全景 (南→)



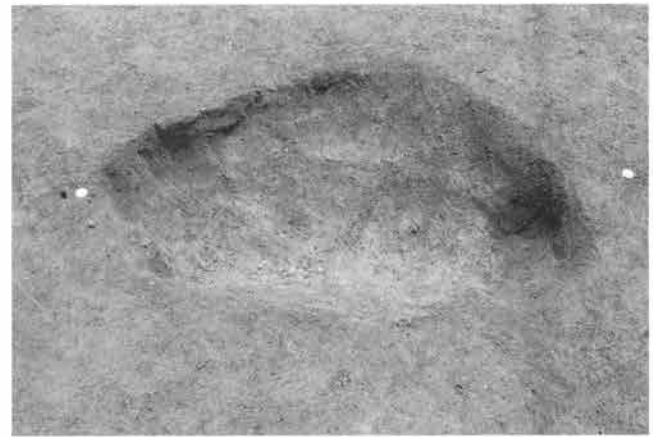
5. 5号住居 張床 断面A-A' (西→)



6. 5号住居 張床 断面B-B' (南→)



7. 1号土坑 全景 (南→)



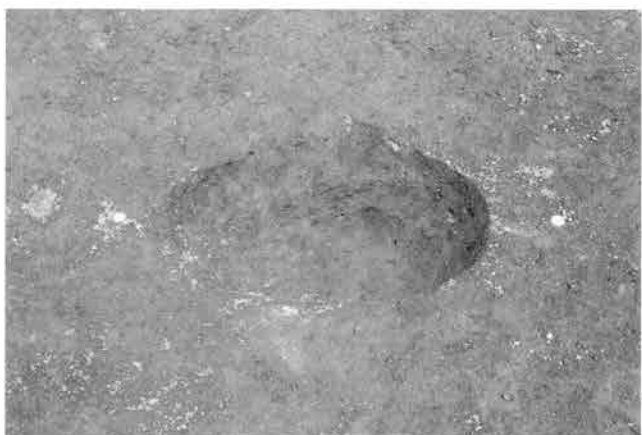
8. 2号土坑 全景 (西→)



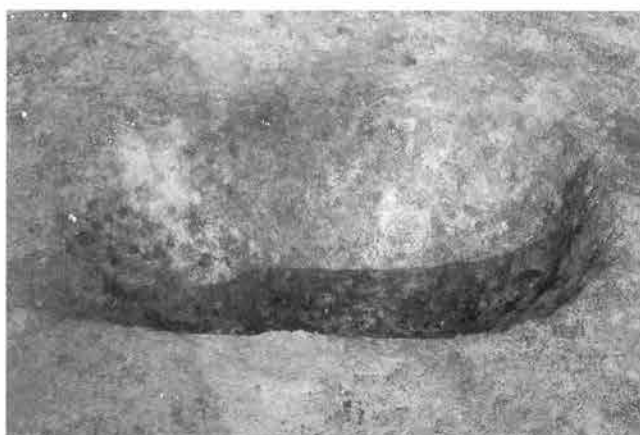
1. 3号土坑 全景 (東→)



2. 4号土坑 全景 (南西→)



3. 5号土坑 全景 (南→)



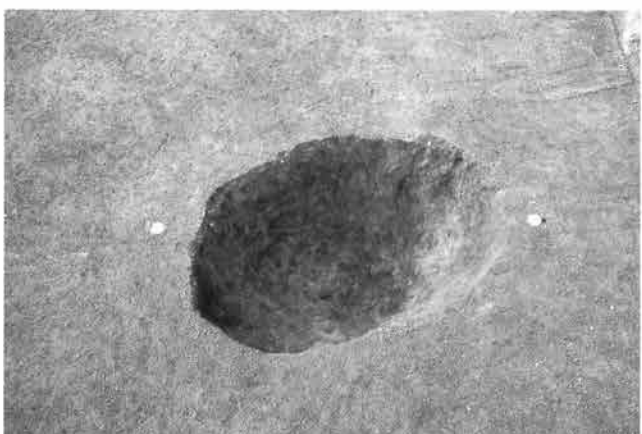
4. 6号土坑 全景 (西→)



5. 7号土坑 全景 (西→)



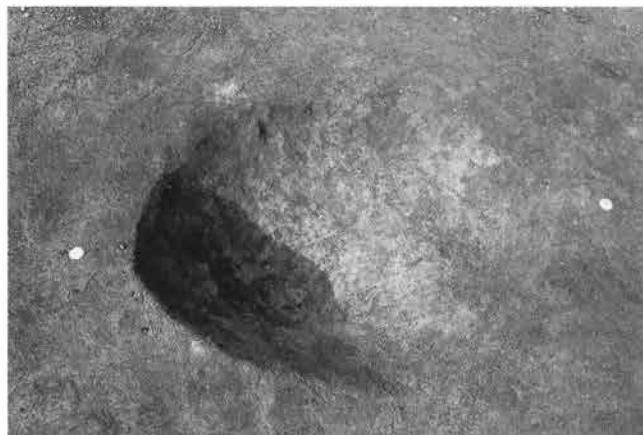
6. 8号土坑 全景 (南西→)



7. 9号土坑 全景 (南東→)



8. 10号土坑 全景 (南→)



1. 11号土坑 全景 (南東→)



2. 12号土坑 全景 (南東→)



3. 13号土坑 全景 (南→)



4. 14号土坑 全景 (西→)



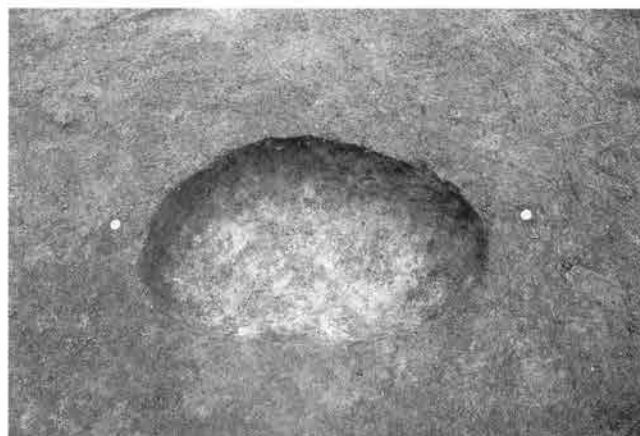
5. 15号土坑 全景 (北→)



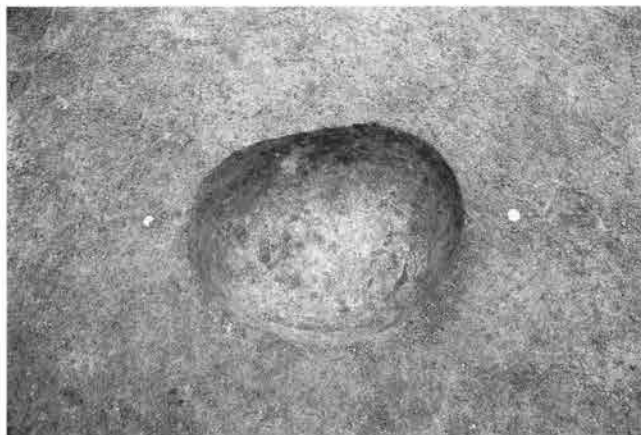
6. 16号土坑 全景 (北東→)



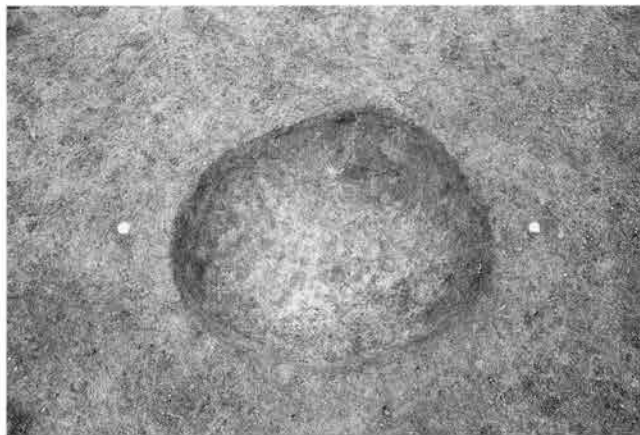
7. 17号土坑 全景 (南→)



8. 18号土坑 全景 (西→)



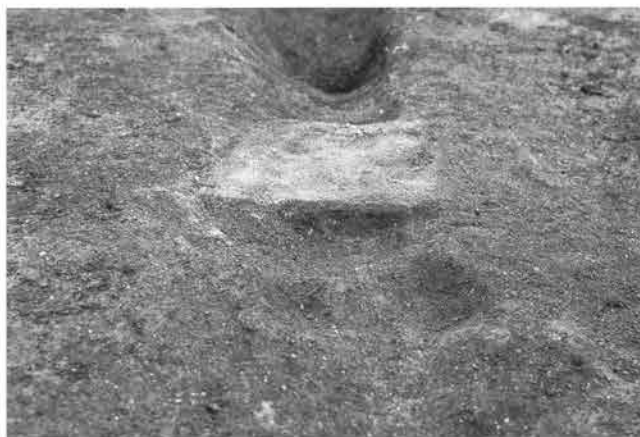
1. 19号土坑 全景 (北西→)



2. 20号土坑 全景 (南東→)



3. 1号溝 全景 (西→)



4. 1号溝 覆土断面 B-B' (西→)



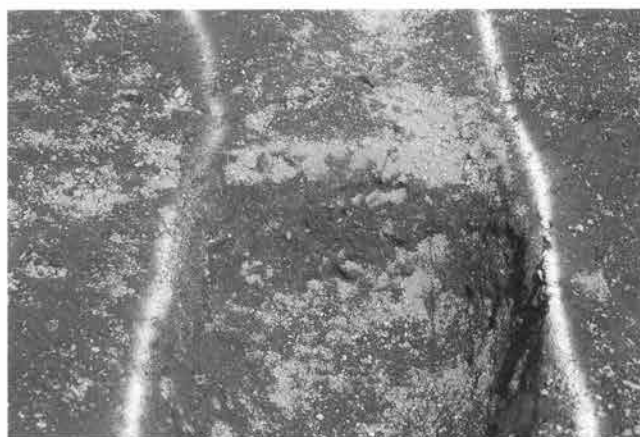
5. 2号溝 全景 (東→)



6. 2号溝 覆土断面 A-A' (北西→)



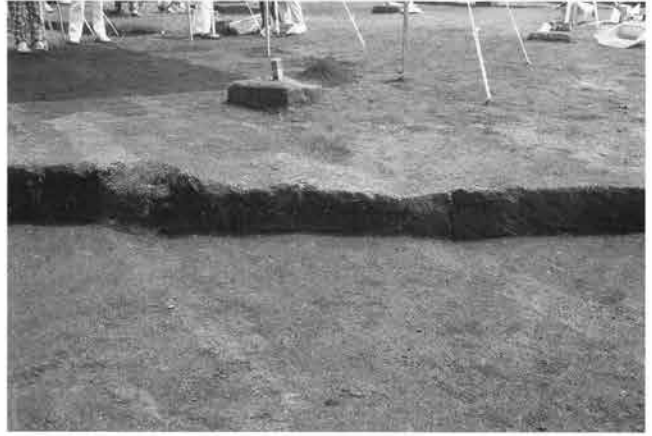
7. 3号溝 全景 (南東→)



8. 3号溝 覆土断面 A-A' (南東→)



1. 4号溝 全景 (南西→)



2. 4号溝 覆土断面B-B' (南西→)



3. 5号溝 全景 (南→)



4. 5号溝 覆土断面A-A' (南→)



5. 5号溝 覆土断面B-B' (南→)



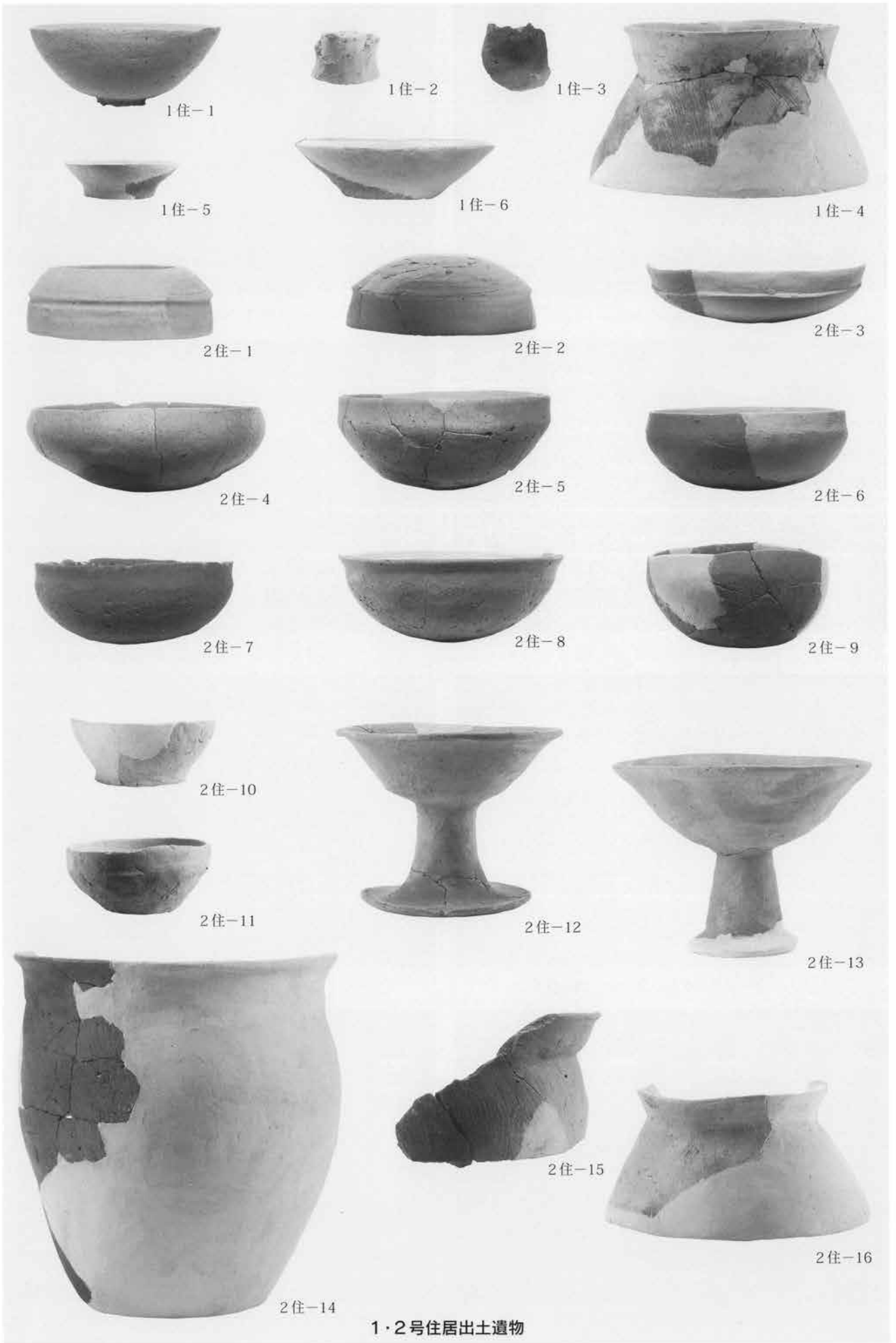
6. A区 As-B下旧地表面 全景 (北西→)

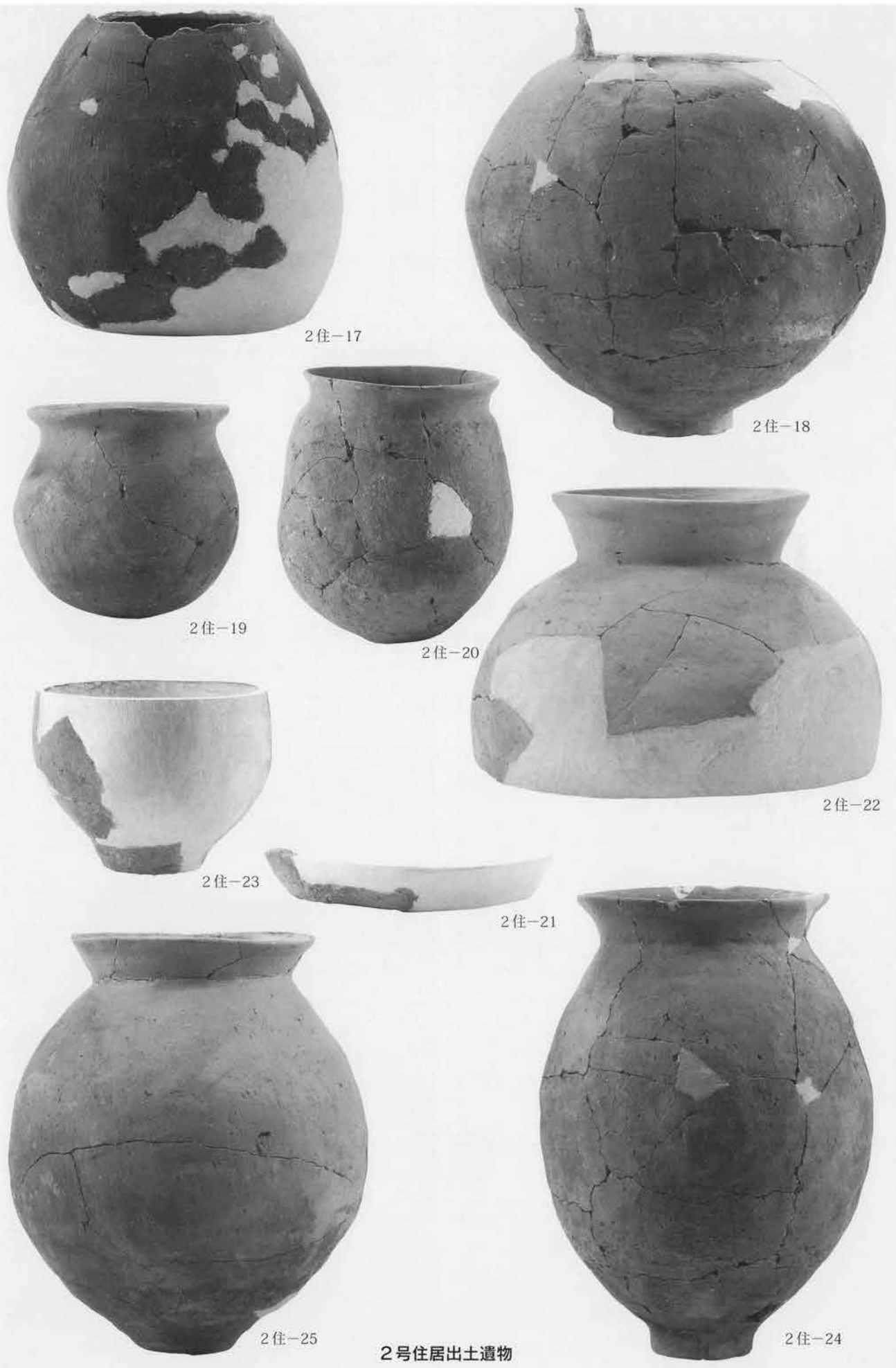


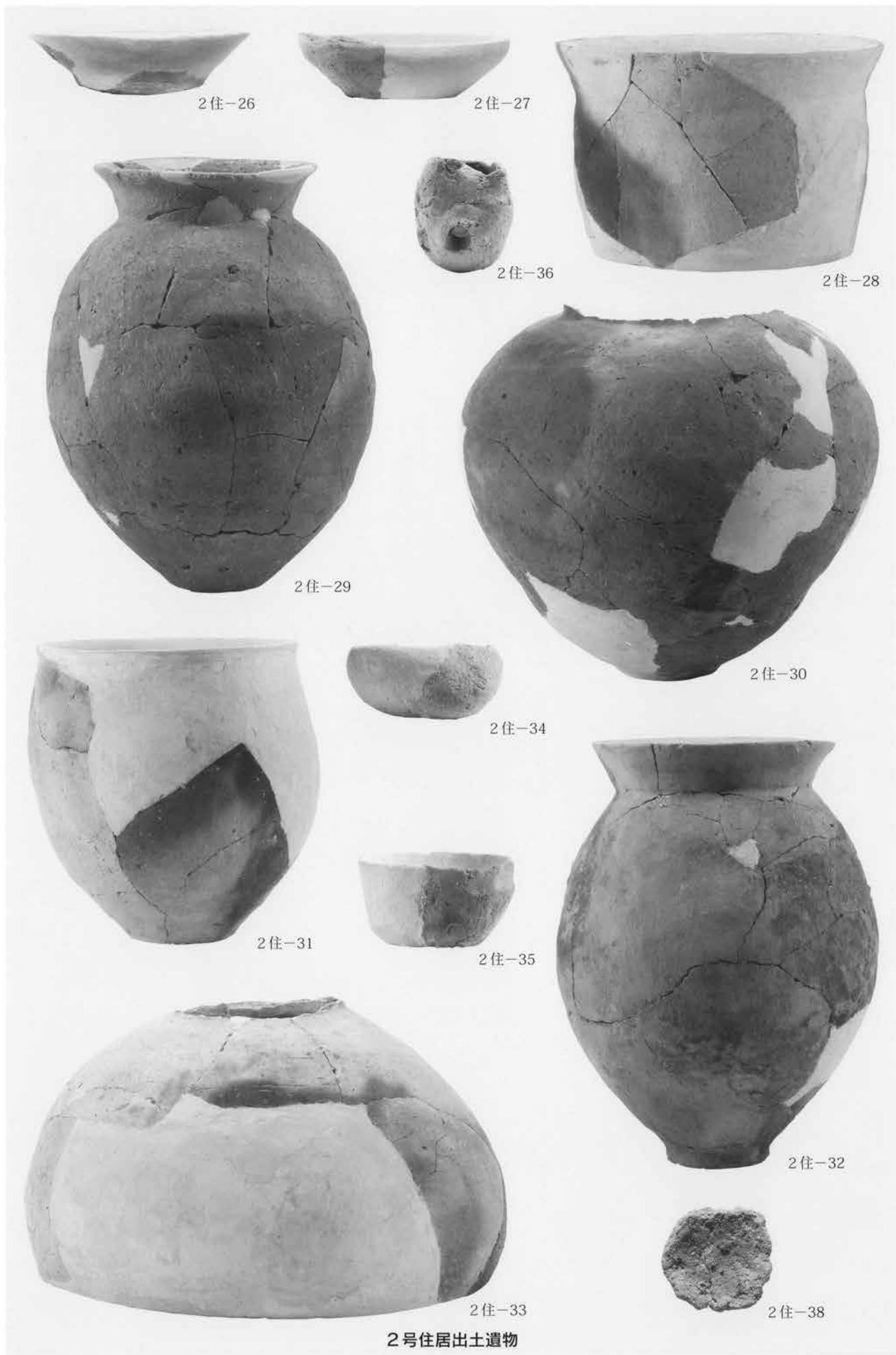
7. A区 As-B下旧地表面 全景 (北→)

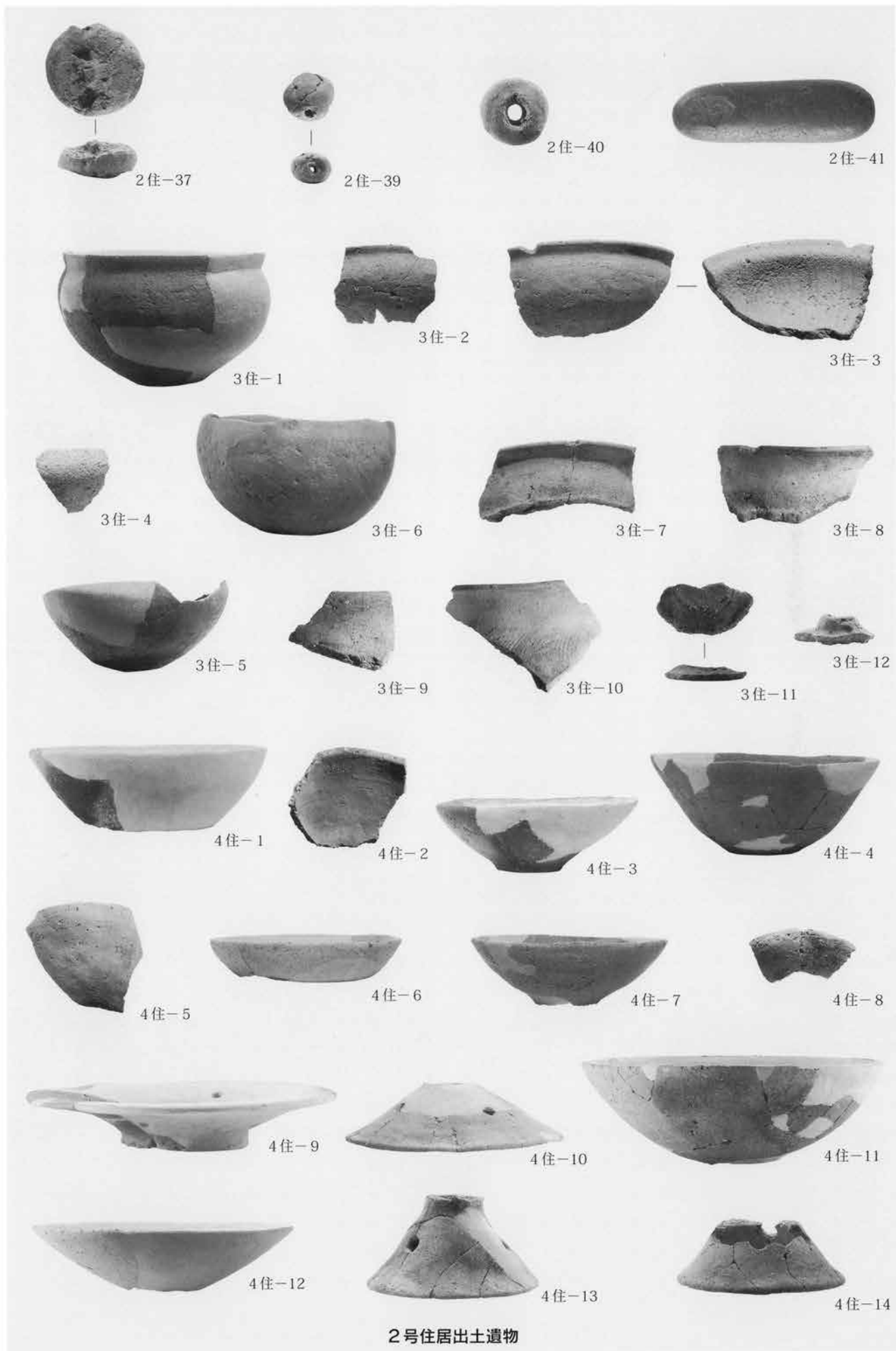


8. A区 As-B混入土除去面 近景 (東→)

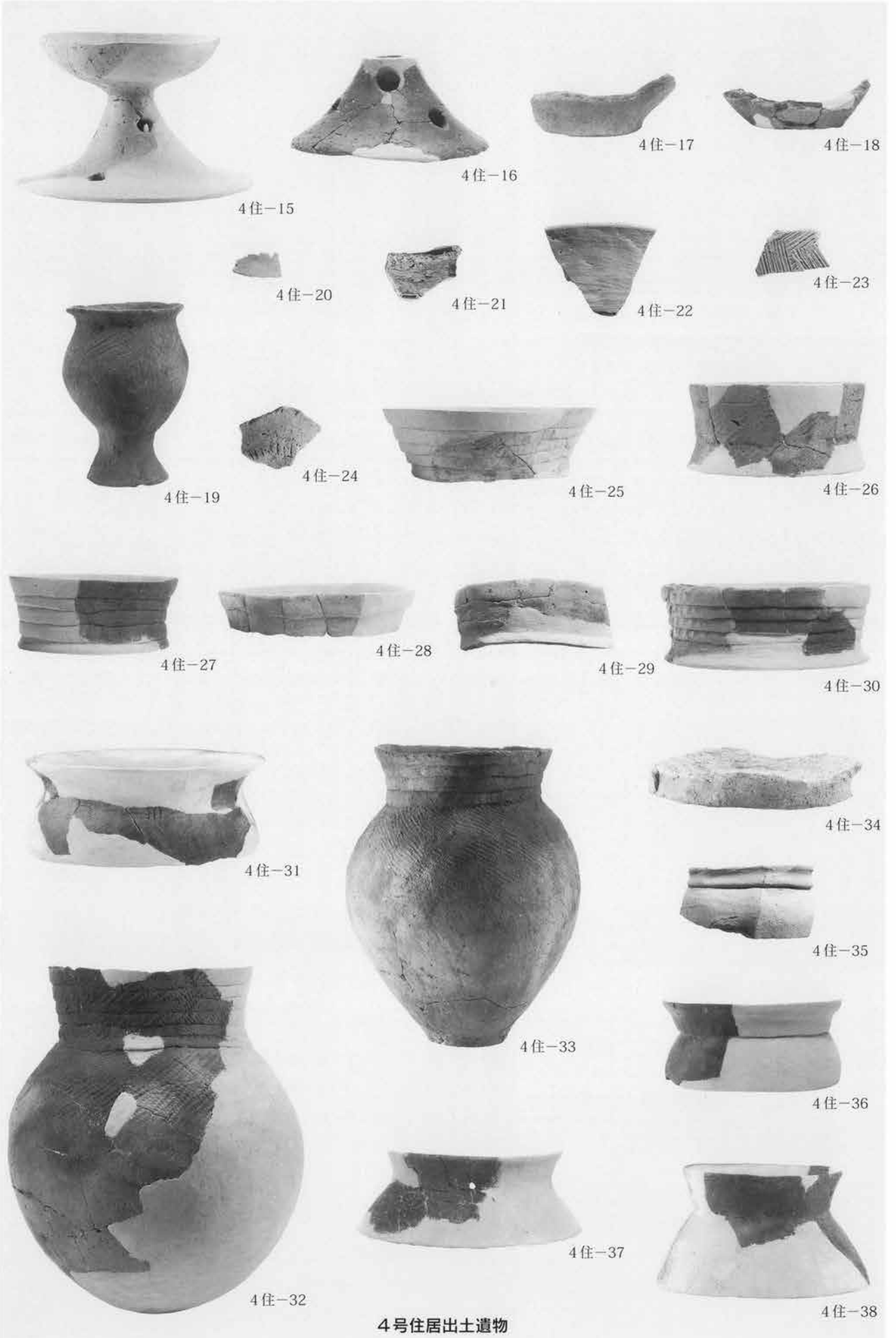


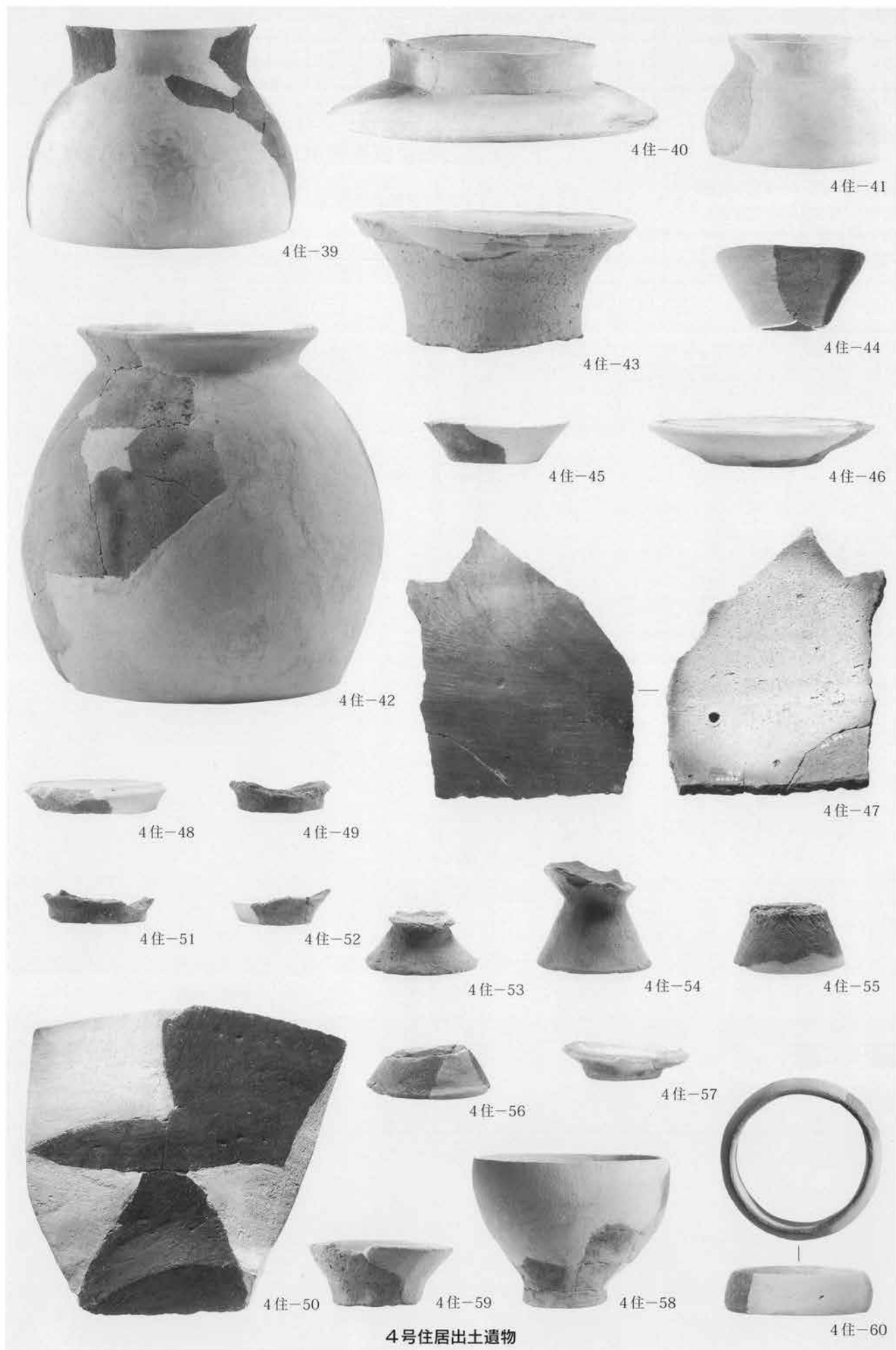




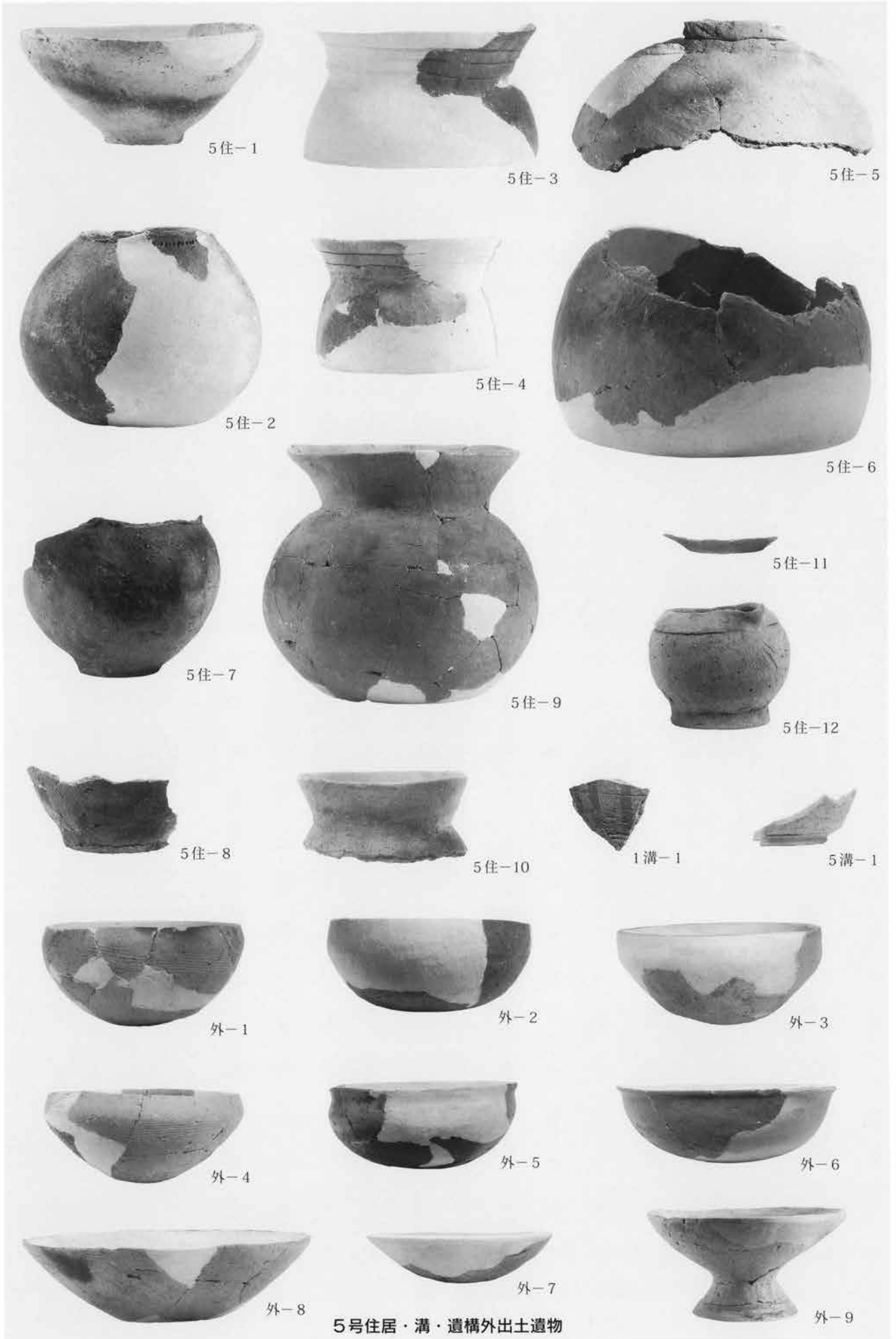


2号住居出土遺物





4号住居出土遺物





外-10



外-11



外-12



外-13



外-14



外-15



外-16



外-17



外-18



外-19



外-20



外-21



外-22



外-23



外-24



外-25



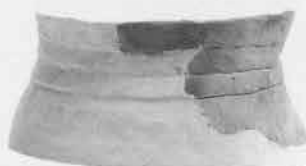
外-26



外-27



外-28



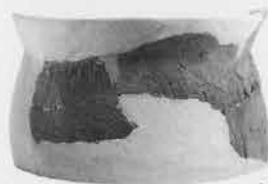
外-29



外-30



外-31



外-32



外-33



外-34



外-36



外-37

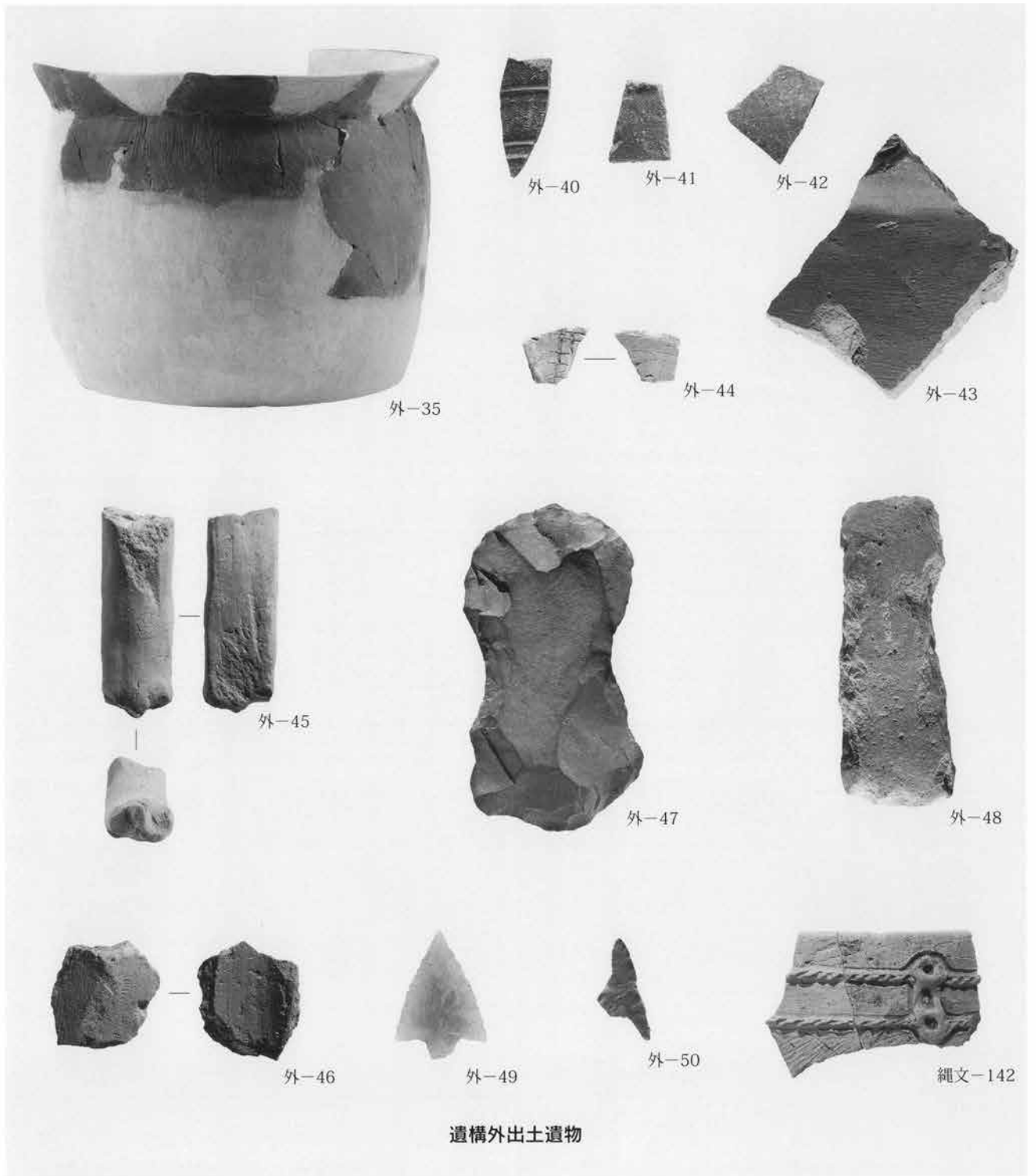


外-38



外-39

遺構外出土遺物



報 告 書 抄 録

書名ふりがな	にしおおむろかみすわいせき
書名	西大室上諏訪遺跡
副書名	一般県道深津伊勢崎線単独道路改築(改良)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	338
編著者名	深澤敦仁／齊藤幸男／中東耕志
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20050117
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	にしおおむろかみすわいせき
遺跡名	西大室上諏訪遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばしにしおおむろまち
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町
市町村コード	10201
遺跡番号	1006
北緯(日本測地系)	362248
東経(日本測地系)	1391129
北緯(世界測地系)	362300
東経(世界測地系)	1391120
調査期間	20030710-20030930
調査面積	2181
調査原因	県道改築事業
種別	集落
主な時代	古墳／奈良平安
遺跡概要	集落-古墳-住居5-土師器／集落-～奈良平安-溝5+土坑20
特記事項	

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第338集

西大室上諏訪遺跡 一般県道深津伊勢崎線単独道路改築(改良)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年1月12日印刷

平成17年1月17日発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

<http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社

